

Willians Marco de Castilho Junior

エジムンド・ススム・フジタ
ブラジル外務省初の日系ブラジル人

翻訳: Felipe Chaves Gonçalves Pinto

著者紹介



ウィリアンス・マルコ・デ・カスチリオ・ジュニオルは、ブラジル出身の研究者であり、ブラジルにおける日本人移民史を専門としています。現在、日本政府（MEXT）奨学生として東京大学の大学院「多文化共生・統合人間学プログラム（Integrated Human Sciences Program for Cultural Diversity, IHS）」にて博士課程に在籍しています。

ブラジル・サンパウロ大学（Universidade de São Paulo, USP）の文学部に所属する「日本語・日本文学・日本文化専攻」において修士号を取得し、2022年に「イタマラチの壁を破って：ブラジル外交における初の日系人 エジムンド・ススム・フジタ（1950-2016）」と題する修士論文を執筆しました。本書は、その研究成果をもとに執筆されたものです。

翻訳者紹介



シャヴィス・ゴンサルヴィス・ピント・フェリッペ フェリッペ（Felipe Chaves Gonçalves Pinto）筑波大学（UT）博士課程在籍。文学理論の分野で研究を行い、ブラジルと日本の文学作品における貧困者の主体の表象について比較的視点から探究している。

図版一覧

図①	黄色い仮面の裏側	29
図②	「無駄だ」	30
図③	1907年のリオ・デ・ジャネイロの Avenida Central	35
図④	20世紀初頭のイタマラチー宮殿の内部庭園	36
図⑤	在ロンドンのブラジル外交団	39
図⑥	ジュセリーノ・クビチェック元大統領（1902-1976）と外交官オデッ チ・デ・カルバーリョ・エ・ソウザの会談（1956年）	46
図⑦	リオ・ブランコ学院における有色人種学生の特除	48
図⑧	ブラジル初の黒人女性外交官	49
図⑨	藤田芳郎に関する新聞記事	54
図⑩	1960年における南米銀行監査役会の構成員	56
図⑪	1957年のフジタ家	57
図⑫	1968年サンパウロ大学法学部合格者リスト	63
図⑬	1972年 <i>Institute of World Affairs</i> コース参加者	65
図⑭	1973年、東京大学にて	67
図⑮	<i>Institute of World Affairs</i> 入会申込書（1974）	68
図⑯	1972年、 <i>Institute of World Affairs</i> におけるフジタと仲間たち	71
図⑰	1975年、リガヤ宛のフジタの手紙	71
図⑱	1975年、リガヤとの結婚許可申請書	73
図⑲	1975年、リガヤとの婚姻許可証	73
図⑳	1975年マニラでの結婚式	74
図㉑	1975年 <i>São Paulo-Shinbun</i> でのインタビュー	82
図㉒	エジムンド・ススム・フジタとセシリア・キク・イシタニ、イタマラ チーにて（1996年）	90
図㉓	1976年における外交官任命の辞令	92
図㉔	1976年におけるアジア・オセアニア局配属辞令	92
図㉕	ロナウド・コスタ大使による書簡（1979年）	95
図㉖	フジタからロナウド・コスタ宛ての書簡（1979年）	96
図㉗	1984年フィゲイレード大統領歓迎会へのフジタ宛招待状	99
図㉘	フィゲイレード大統領の訪日	100
図㉙	プロジェクト「ブラジル 2020」に関する新聞記事	101
図㉚	1995年4月、サルデンベルグとフジタによるキューバ訪問	103
図㉛	フジタの大使任命に関する新聞記事の切り抜き	104
図㉜	グアタハラでの出来事を回想し、感涙する小泉首相（2004年）	106
図㉝	<i>São Paulo-Shinbun</i> の 2004 年記事切り抜き	107
図㉞	「ヴィラ＝ロボスへのトリビュート」 <i>The Jakarta Post</i> , 2008 年	109
図㉟	エジムンド・ススム・フジタによる創作絵画	111
図㊱	「国境なき科学」プログラムに関する記事	113
図㊲	2009年における Labex 開所式	114
図㊳	2012年における Seoul of Brazil 広報資料	115
図㊴	2014 年年末慈善コンサート	116
図㊵	ブラジル外務省初の日系ブラジル人	118

表一覧

表① 1908年から1925年までの移民の流動	23
表② 1958年における日本人移民およびその子孫の家庭内使用言語（農村地域に関する数値）	61
表③ 1958年における日本人移民およびその子孫の家庭内使用言語（都市地域に関する数値）	61
表④ フジタとケイコ・イシタニの選考過程の比較	86
表⑤ 1974年から1990年にかけてのイタマラチー受験者数および合格者数	87
表⑥ 1991年から2019年にかけてのイタマラチー受験者数および合格者数	88

頭字語・略語一覧

ABRI	ブラジル国際関係学会 (Associação Brasileira de Relações Internacionais)
CAC	コチア産業組合 (Cooperativa Agrícola de Cotia)
CACD	外交官キャリア採用試験 (Concurso de Admissão à Carreira de Diplomata)
CAD	外交官上級研修課程 (Curso de Aperfeiçoamento de Diplomatas)
CAE	高等研究課程 (Curso de Altos Estudos)
CPCD	外交官養成課程 (Curso de Preparação à Carreira de Diplomata)
CsF	国境なき科学 (Ciência sem Fronteiras)
DA	行政局 (Departamento de Administração do Ministério das Relações Exteriores)
DASP	国家公務員行政局 (Departamento Administrativo do Serviço Público)
EMBRAPA	ブラジル農牧研究公社 (Empresa Brasileira de Pesquisa Agropecuária)
ERESP	外務省本省におけるサンパウロ事務所 (Escritório de Representação do Ministério de Relações Exteriores em São Paulo)
FUNAG	アレクサンドル・デ・グスマン財団 (Fundação Alexandre de Gusmão)
IBGE	ブラジル地理統計研究所 (Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística)
IRBr	リオ・ブランコ学院 (Instituto Rio Branco)
JICA	国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency)
MASP	サンパウロ美術館 (Museu de Arte de São Paulo)
MRE	ブラジル外務省 (Ministério das Relações Exteriores)
MUFG	三菱 UFJ フィナンシャル・グループ (Mitsubishi UFJ Financial Group)
ONU	国際連合 (Organização das Nações Unidas)
PAA	アフーマティブ・アクション・プログラム (Programa de Ação Afirmativa)
PNUD	国連開発計画 (Programa das Nações Unidas para o Desenvolvimento)
PUC-SP	サンパウロ・カトリック大学 (Pontifícia Universidade Católica de São Paulo)
RDA	韓国農村振興庁 (Rural Development Administration)
REBRASLON	在ロンドン国際機関ブラジル常駐代表部 (Representação Permanente do Brasil Junto às Organizações Internacionais em Londres)

SAE	戦略問題事務局 (Secretaria de Assuntos Estratégicos)
STF	連邦最高裁判所 (Supremo Tribunal Federal)
UNICEF	国際連合児童基金 (Fundo das Nações Unidas para a Infância)
UFPR	パラナ連邦大学 (Universidade Federal do Paraná)
URSS	ソビエト社会主義共和国連邦 (União das Repúblicas Socialistas Soviéticas)
USP	サンパウロ大学 (Universidade de São Paulo)

目次

本書の紹介	11
序文	12
はじめに——記憶の（再）構成	14
ブラジルにおける日本人移民に関する民族・人種的議論の概観	17
移民以前	17
初の日本人移民の到着とともに	21
1930年代と移民割当制度をめぐる危機	25
第二次世界大戦中	28
リオ・ブランコ学院におけるエリート主義	33
対外関係の舞台に立つ「文明化され、白人化された」ブラジル	33
ブラジル外交官キャリアの黎明	37
最初の採用試験とリオ・ブランコ学院の創設	40
ブラジル外交官団における変化	43
イタマラチーにおける女性の参入	43
イタマラチーにおける黒人	47
イタマラチーの壁を越えて：エジムンド・ススム・フジタの歩み	53
太陽堂：フジタ家の営む書店	53
アメリカ銀行（Banco América）	55
藤田芳郎と山室千代子の長男	56
職業選択	63
サマースクール	64
東京大学	66
「ブラジルに外交官として仕えたい」	68
結婚	70
日本人移民と戦後期	75
政治的・社会的上昇	79
イタマラチーにおける壁の打ち破り	80
選考過程	83
フジタ以後のイタマラチーにおける日系人	85
キャリアの始まり	90
シゲアキ・ウエキ	93
ロンドン	94
東京	97

モスクワ	100
リオ・ブランコ学院における学位論文	102
フィデルとの会見	103
大使フジタ	103
小泉の涙.....	104
ジャカルタ	106
フジタ画家	110
ソウル	112
帰国.....	117
結論	119
参考文献	122
付録 A エジムンド・ススム・フジタに関する情報.....	128
付録 B エジムンド・ススム・フジタの書誌	130
付録 C エジムンド・ススム・フジタの執筆集.....	133
付録 D エジムンド・ススム・フジタの友人や仕事同僚からの証言集.....	149

本書をエジムンド・ススム・フジタの思い出に捧げます。直接お会いしたことはありませんが、彼の生涯に触れることで深い感銘を受け、大きなインスピレーションを与えてくれました。

Jovem nissei quebra barreira do Itamarati

"O Brasil é o maior exemplo de um país multirracial, onde todas as raças se integram, por isso não vejo nada de excepcional no fato de um nissei ser aprovado nas provas do Itamarati", declarou Edmundo Sussumu Fujita, um dos dois candidatos paulistas, aprovados na primeira fase do concurso para a carreira diplomática.

O jovem nissei, que se mostrou surpreso com os resultados obtidos na primeira fase das provas, tem 24 anos, de idade e é bacharel em Direito pela Faculdade de São Francisco. Formado em 1972, Edmundo já ganhou 2 bolsas de estudos. A primeira, concedida quando ainda cursava a faculdade, levou-o até o "Institute of World Affairs", onde, durante dois meses, manteve contato com estudantes do mundo inteiro, em debates mundiais contemporâneos, o que segundo ele, veio aprimorar sua experiência em línguas, principalmente o Inglês. No ano passado, concorreu a uma segunda bolsa, desta vez concedida pelo governo japonês, que o levou a fazer um curso de Política Internacional durante 1 ano na Universidade de Haia.

Para o jovem, a vocação para a carreira diplomática, surgiu durante o 4º ano da Faculdade, quando manteve contato com Direito Internacional Público. Achou essa matéria bastante interessante e bonita. As opções para seguir a mais a fundo eram o magistério e a diplomacia, entretanto, vendo que a segunda era a mais movimentada e fascinante, não teve dúvida em prestar o concurso. Desde então começou a seguir de perto os concursos anuais do Itamarati, vendo todos os programas, o número de vagas e os candidatos aprovados, até que em setembro, quando regressou da Europa, resolveu fazer sua inscrição.

AS PROVAS

Um dos fatores que auxiliaram o candidato na hora das provas, foi o local onde se realizaram os exames: a própria Faculdade São Francisco, onde Edmundo passou 5 anos de sua vida. Ele confessa que ficou assustado com o número de candidatos presentes na primeira fase, aproximadamente 29, pois só há 30 vagas para a carreira.

Segundo Edmundo, "esse elevado número de inscritos



Edmundo Sussumu Fujita venceu a primeira barreira para chegar ao Itamarati

nos dias 27, 28 e 29 de novembro, no período da manhã, e versaram sobre vários temas da atualidade. A de Português, que geralmente elimina a maioria dos candidatos, teve como tema a "Urbanização e Convivência na Sociedade Contemporânea", além de um texto (discurso do ministro do

As provas de Francês e Inglês continham passagens de Literatura, versão e dissertação. O tema da primeira foi "Técnicas Modernas de Comunicação como Fator de Difusão Cultural". Nessa prova o jovem alcançou a média mínima (5). A de Inglês teve como tema a "história

"Tanto faz Saudita ou N que realmente utilidade de u o espírito de u ção", disse el

Referindo-se das provas, a testes de car

出典：Folha de São Paulo, 1974年12月18日

エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

本書の紹介

本書の紹介という名誉ある機会には、無限の資質を持つ親友であり同僚でもあるエジムンド・ススム・フジタ（Edmundo Sussumu Fujita）を称える、予期せぬ、しかし非常に歓迎すべきチャンスを与えてくれました。

私たちの「パラレルライフ」のおかげで、彼のさまざまな側面や資質を知ることができました。私たちは法学部に一緒に通い、海外の大学院で学び、国際法律事務所でインターンをし、外交官の道に進み、そして（同じ日に）大使に昇進しました。そのため私は、私たちそれぞれのキャリアの多くの段階を共に歩み、経験や友情を分かち合い、談笑し、意見を交換し、相互にアドバイスし合う機会に恵まれました。

本書を手にした読者は、エジムンド・フジタの性格や彼が歩んできた道のりのさまざまな側面を知ることができるでしょう。若く優れた伝記作家であるウィリアンス・カスチリオは、「はじめに」で、伝記の対象者とは直接会ったことがないと述べましたが、そのことが彼の特徴を軽妙かつ鋭敏に描写する妨げにはならなかったといえます。

本書の著者は、外交官という職業に（最優秀者として！）就いた最初の日系人が直面した障壁や困難を理解しやすくするため、エジムンド・フジタの生涯を様々な角度から考察しました。エジムンド・フジタの家族の日本での出自、日本からブラジルへの移民、家庭や学校での生い立ちなどを詳しく調べ上げ、またサンパウロで育ったエジムンドが経験した文化の違いや、後に海外で経験した文化の違いについて、優美かつ繊細に描写しています。さらに、海外でブラジルのために尽力するという明確な目標を達成する過程で直面した困難についても語っています。

伝記作家は、マリア・リガヤ（Maria Ligaya）が 40 年間にわたりエジムンド・フジタの妻であり伴侶として果たした重要な役割についても強調しています。彼女の献身、粘り強さ、励まし、愛情がなければ、エジムンドはこれほどの偉業を成し遂げることはできなかったでしょう。マリア・リガヤは今も、このような活動を通じて感銘を与える彼の存在の記憶を守り続けています。

本書の出版により、アレクサンドル・デ・グスマン財団（Fundação Alexandre de Gusmão）とイタマラチー（ブラジル外務省）は、最高の外交官の一人としてのエジムンド・フジタの価値を認め、新たな才能を鼓舞することに貢献しています。

フェルナンド・デ・メロ・バレット（Fernando de Mello Barreto）

一等公使（大使）・

サンパウロ大学国際関係研究所（IRI-USP）教授

序文

エジムンド・ススム・フジタ（1950-2016）は、個人的にも職業的にも「数々の壁を打ち破る」意欲を持っていなければ、優れた教育を受け、成功したキャリアを築いた日系ブラジル人にすぎなかったかもしれません。彼の最初の挑戦は、しばしば複雑な日本の家制度の中で、長男が伝統的に家業を継ぐ責任を負うという家族内の問題にありました。

子どもたち、特に長男への教育投資は、社会的に名声のあるキャリアを選ぶことで経済的な向上を目指すものでした。エジムンドはその点で家族を失望させることなく、学校で優秀な成績を収め、すべての科目で卓越した成果を上げました。彼の教育および職業の道は、親が描いた計画通りに進んでいるように見えたが、この若い日系二世¹は、家業を継がなかったことで日本の文化的伝統を破っただけでなく、それまで「エリート中のエリート」や「白人エリート」として知られていたブラジルの外務省内の社会的な烙印をも破り、1975年に初の日系ブラジル人としてイタマラチーに入省しました。

1950年にサンパウロ市で生まれ、リベルダーヂ（Liberdade）地区で最も有名な日系書店の一つ「太陽堂（Livraria Sol）」の経営者の息子であり、長い間貧困と差別に苦しんできた日本人移民の子供たちも、公の場で大きな存在になれると信じられるようになったエジムンド・フジタは、同様に日系コミュニティの中でも重要な存在となりました。フジタは、もちろん、当時の新聞 *Folha de São Paulo* の見出しにもなった「イタマラチーの壁を破った若い日系二世」という言葉の通り、ブラジルにおける日本人移民の歴史にその名を刻んだのです。

この著書は、見過ごされがちだった幸運な機会を最大限に活かした、素晴らしい成果と言えるでしょう。ウィリアムズ・カステイリョは、最初の日系ブラジル人大使、エジムンド・フジタの伝記を丁寧に描き出し、ブラジルの地政学、イタマラチーにおけるアジアの人のアイデンティティ、そしてサンパウロの日本社会の歴史といった多岐にわたるテーマを深く掘り下げています。歴史的事実、個人的なエピソード、ジャーナリズム的な要素が巧みに織り込まれた、読みやすく奥深い一冊です。

友人、同僚、家族、そして国内外の関係者からの証言をもとに、ウィリアムズは、残念ながら2016年の早逝により自分自身の人生物語を語る機会がなかった伝記の主人公の生涯を描き出します。エジムンド・フジタは、とりわけ当時の日系ブラジル人社会にとって、他の若い日系人がアジアの人としての代表が少ない職業分野でキャリアを築くよう促した点で、間違いなく歴史的に重要な人物でした。本書はさらに、人種差別、アジアの人に対する民族的ステレオタイプ、戦後の日系人の急激な社会的地位の向上、そしてブラジル外交におけるフェノタイプといった他の問題についても考察しています。

フジタ大使の私生活とイタマラチーでのキャリアにおける最も印象的なエピソードが短い章で構成されているため、この本は一般読者にとって読みやすく、同時に学術的な分野においても力強いものとなっています。

モニカ・セツヨ・オカモト（Monica Setuyo Okamoto）

¹ 日系移民の子供を指す言葉。

パラナ連邦大学（UFPR）日本語学科准教授

はじめに——記憶の（再）構成

オフィスの窓からは、ブラジルにあるフジタ大使の邸宅の庭が見えました。典型的な日本の風景のように、さまざまな種類の木々、花々、果物、野菜が、石の滝から小さな鯉の池へと流れる水と調和していました。その池の表面には赤い橋がかかり、その空間の美しい景観を一層引き立てていました。

広大な日本庭園は、その魅力だけでなく、配置に関する興味深い特徴も私に示してくれました。それは、そこにあるものの起源の多様性です。果物、花、木々は日本だけでなく、韓国、中国、フィリピン、タイ、インドネシア、イタリア、さらにはブラジルのいくつかの地域からも集められており、その瞬間に私はエジムンド・ススム・フジタの人生を通じて強く存在していた多文化的な側面について少し考えさせられました。読者はこの本を通して、彼のその側面をさらに詳しく知ることができるでしょう。

室内に目を向けつつも、窓越しに太陽の光を浴びて豊かに広がる庭の景色に囲まれながら、私は再び大使の家に保管された無数の書類や伝記資料に目を向けました。時折、二階建ての巨大な書庫を思い出すと、今でも驚嘆する自分がいます。その書庫には、膨大な数の書籍や新聞の切り抜き、歴史的な文書、メダル、勲章、写真が所狭しと並んでおり、私はその中でエジムンド・ススム・フジタという人物を少しでも深く理解しようと試みました。そして、彼の歴史について書くという難しい作業に挑戦し始めたのです。

残念ながら、運命のいたずらにより、私はフジタ大使と直接お会いすることができませんでした。彼が亡くなったのは2016年4月6日で、その数か月後、私はパラナ連邦大学（UFPR）で文学を学んでいた学生として、恩師であり指導教授でもあるモニカ・セツヨ・オカモト先生から彼の歴史を紹介されました。モニカ先生は、当時『日系ブラジル人知識人の思想（*Pensamento dos intelectuais nipo-brasileiros*）』と題された大学プロジェクトの会議の一環として、大使夫人であるマリア・リガヤ・トレンティーノ・アベレダ・フジタさん（Maria Ligaya Tolentino Abeleda Fujita）との出会いについて少しお話しされ、またエジムンド・フジタが日系ブラジル人に関連するテーマでプロジェクトを進めたいという願いを持っていたことを私に教えてくださいました。

それ以来、モニカ・オカモト先生と大使夫人マリア・リガヤさんが、フジタが当初構想していたプロジェクトを開始し、その理想を実現するために尽力する姿を見守ってきました。数多くの会議や議論を経て、ついに『日系ブラジル人（*NipoBrasileiros*）』プロジェクトが実現しました。このプロジェクトは、リガヤさんとオカモト先生の指導のもと、ピエタ・フィルムズとプロダクションズ（Pietà Filmes e Produções）の制作、UFPRの学生たちの協力を得て、2019年に同名のドキュメンタリー・ウェブシリーズとして公開されました。このシリーズは、それぞれの分野でパイオニアとなった日系ブラジル人や、彼らの民族グループ内で伝統的ではないキャリアで顕著な成功を収めた人物の物語を描いており、エジムンド・ススム・フジタの歴史を特集したエピソードも含まれています。

その同じ時期、大使フジタの人生に対する私の好奇心は徐々に高まり、『日系ブラジル人』プロジェクトの成果に満足したことが、エジムンド・ススム・フジタという人物を記録し、広めるための研究を専念して行うというアイデア

に、私をさらに引き込むきっかけとなりました。その目標を追求するため、2022年にサンパウロ大学（USP）で修士論文『イタマラチーの壁を破る：ブラジル外交における最初の日系人²、エドモンド・ススム・フジタ（1950-2016）』を完成させました。この論文では、フジタがブラジルの外交官として果たした役割についての議論を展開し、彼が最初の日系人としてイタマラチーに入省したという先駆的な業績の重要性について考察しています。

以上を踏まえ、本書が私の修士研究の成果であることを読者にご説明いたします。この研究は、エジムンド・ススム・フジタの歴史を記録するにあたり、友人、イタマラチーの同僚、家族からのインタビューや、求めた情報への迅速な回答を通じて貢献してくださった皆様のお力添えがあって初めて実現できたものです。特に、この本が成立したのは、大使夫人マリア・リガヤ・フジタの絶大な協力と強い願いがあったからこそです。彼女の計り知れない貢献により、ブラジルの外交史およびブラジルの日系社会におけるこの卓越した人物への敬意を表す記録が完成したことに、深い感謝を捧げます。

本書の作成において最も困難な作業の一つは、収集した口述記録や取得した文書に意味を持たせることであり、これらは本伝記における方法論的構築の一部を成しています。この作業に直面した際、著者は常に歴史の重要なエピソードを構築または再構築しようとする過程にあります。その一方で、収集された口述記録にも注意を払わなければなりません。というのも、Queiroz（1988）が述べるように、これらの記録には、しばしばインタビュー対象者が自らの体験に付与する象徴的な意味が含まれているからです。このように、語り手は自分の個人的な経験をその語りに関連する社会的な文脈と交差させ、結果としてその記録は生きた経験の再構築として捉えられるべきです。なぜなら、Vilas Boas（2002）が述べるように、「思い出すことは、過去を再び生きることではなく、今日のイメージや考えを用いて過去の経験を作り直し、再構築し、再考することである」（p. 64）からです。

この点において、口述記録を用いて実際の歴史を語る手法は、すでに20世紀初頭から社会学者であるウィリアム・アイザック・トマス（1863-1947）、フロリアン・ヴィトルド・ズナニエツキ（1882-1958）、フランツ・ボアズ（1858-1942）らによって行われていたことを忘れてはなりません（Castro, 1994）。口述記録によって構築された「人生の歴史」という研究手法は、個人の経験を通じて、その人々が属する社会現象を理解するための一助となります（Melleiro; Gualda, 2003）。このように、本書は家族や同僚、親しい人々からの口述記録を通じて、エジムンド・ススム・フジタの人生とその職業上の歩みを再構築し、記録することを目的としています。

さらに、この意味付けや再意味付けの作業は、口述記録に限られるものではなく、大使エジムンド・ススム・フジタの歴史に関連するすべての文書・資料の分析にも及びます。フジタの個人資料は現在、妻リガヤの管理のもと、ブラジリア（連邦区）にて整理・保管されています。これらの文書・資料はすべて、個人文書や写真、新聞記事の切り抜き、その他フジタが生涯にわたって選り保存していた資料を含むフォルダに年代順に整理されています。このことは、モニカ・オカモト先生が指摘しているように、「彼がどのように自分自身を構成

² 「日系」という用語は、一般的に、日本国外で生まれたすべての日本人の子孫を指すために使用されます。

したかったのかを示唆しており、ある意味で彼が自身の人生に与えた意味を指し示している」(Okamoto, 2018, p. 46) と言えます。

2019年、大使夫人リガヤの邸宅を訪問する機会があり、フジタ氏の人生における重要な瞬間を示す膨大な資料に触れることができました。その中の一部の資料は本書にも掲載され、フジタ大使の人生における重要な瞬間を証明する貴重なデータ源として役立ちます。例えば、彼の教育歴、外交官というキャリアの選択、海外で務めた任地、そしてその職業人生で行った業績などが含まれています。

この小さな序文を通して、本書の内容がブラジルの外交キャリアにおいて先駆的な役割を果たし、その民族集団内でも先駆者となった人物の人生を記録した重要なものとして受け取っていただければ幸いです。また、本書は、私が出会って以来、常に夫の伝記を制作し、多くの人々と共有したいという願いを示してくださったマリア・リガヤ・フジタさんへの感謝の意を表す一つの形でもあります。大使夫人リガヤさんに、この作業を捧げます。そして、エジムンド・ススム・フジタ氏にも、本書を捧げます。彼の素晴らしい人生に触れ、私の学問の道において大きなインスピレーションを与えてくださったことに感謝の意を込めて。

ブラジルにおける日本人移民に関する民族・人種的議論の概観

まず、エジムンド・ススム・フジタの歴史を紹介する前に、ブラジルにおける日本人およびその子孫のイメージがどのように形成されてきたかについて簡潔に考察することが重要である。そのためには、ブラジル社会がアジア系、特に日本人に対してどのような言説を構築し、広めてきたかを理解する必要がある。この文脈を理解することで、ブラジルで最初の日系外交官であるフジタの人物像を、ブラジルにおける民族・人種関係の議論の中でどのように捉えるべきかを考察することができるのである。

移民以前

1908年6月18日、笠戸丸がサントス港に到着したことにより、ブラジルへの日本人移民が開始された。この出来事は、日本人およびその子孫がブラジル社会に同化・統合される過程の公式な始まりの象徴的な出来事とされている³。アルリンダ・ホッシャ・ノゲイラ (Arlinda Rocha Nogueira) の見解によれば、日本人移民のプロセスはこの日付よりはるか以前に始まり、ブラジルと日本の双方で様々な議論が展開され、多くの問題に直面したとされる。ノゲイラは、「世論、報道機関、政府機関がこの運動に対して、さまざまな理由で度々反対を表明した」(Nogueira, 1992, p. 55) と述べており、これらが移民の進行に大きな影響を与えたと指摘している。

日本人移民とブラジル社会における日本人のイメージについて論じる前に、当時のブラジルの政治的状況を文脈化することが必要である。ブラジルは独立後(1822)、長期間にわたり「後進国」と見なされてきたため、国際的な舞台において先進国としての地位を確立しようと努力していた (Skidmore, 1974)。

この目的のために、ブラジルの政治的および知識人のエリート層は「ブラジル国家問題」に対する解決策を模索する大きな努力を行った⁴。このような状況の中、19世紀末にかけて国内において重要な変化が生じた。1891年には、共和制宣言後に臨時大統領に就任したデオドロ・ダ・フォンセカ元帥 (Marechal Deodoro da Fonseca, 1827-1892) の指導の下、最初の共和制憲法が制定された。

ボリス・ファウスト (Boris Fausto, 1995) によれば、新しい政治体制はヨーロッパから疑念をもって受け入れられており、臨時政府の財務大臣であったルイ・バルボーザ (Ruy Barbosa, 1849-1923) の言葉を借りれば、共和国の承認を得て海外からの信用を確保するためには、憲法の形を整えることが必要であった。1891年の憲法は、州にさらなる自治権を与え、権力を行政、立法、司法の三権に分立させ、法律の制定手続きを変更し、大統領制を国に導入した。

国際関係の分野において、ブラジル共和国の宣言はイギリスからは好意的に受け入れられなかったが、「アルゼンチンでは熱意的に歓迎され、ブラジルと

³ MAEYAMA, Takashi; SAITO, Hiroshi. *Assimilação e Integração dos Japoneses no Brasil*. São Paulo: Editora da Universidade de São Paulo, 1973 を参照されたい。

⁴ TORRES, Alberto. *O problema nacional brasileiro: introdução a um programa de organização nacional*. 4. ed. São Paulo: Editora Nacional; Brasília: Editora UnB, 1982b (Temas brasileiros, 38)を参照されたい。

アメリカ合衆国を近づけた」(Fausto, 1995, p. 248)。この時期に、ブラジルの外交軸はロンドンからワシントンへと移り、ホセ・マリア・ダ・シルヴァ・パラニョス・ジュニオール(José Maria da Silva Paranhos Júnior, 1845-1912)⁵、すなわち有名なりオ・ブランコ男爵(Barão do Rio Branco)が外務大臣に就任したことで、この動きはさらに明確となった。ワシントン駐在のブラジル大使であったジョアキン・ナブーコ(Joaquim Nabuco, 1849-1910)の協力を得て、リオ・ブランコ男爵は、ブラジルをアメリカ合衆国に接近させ、南米第一の大国として国を正当化する政策を打ち立てた。

同時期、旧共和国期(República Velha, 1889-1930)における進歩と発展の言説と結びつきながら、ブラジルは自国領内における奴隷労働を廃止したばかりであり、それに伴い、当時のコーヒー経済を維持するための新たな労働力を確保する必要に迫られていた。したがって、コーヒー農園での労働を目的とした移民の受け入れは、重要な課題となり、当時の政治的議論の中心となった。

さらに、コーヒー農園労働のための移民受け入れをめぐる議論は、単なる労働力不足の問題にとどまらず、19世紀末に顕著であった「人種の階層化」の言説にも影響を受けていた。この考え方は、ラテンアメリカ諸国において「白人化」を進めることで、より「文明化」され「発展」した国家へと近づくことを目的とする政策へとつながった(Hobsbawm, 1988)。

このような文脈のもと、ヨーロッパからの移民をブラジルの農園労働に従事させることは、理想的な解決策と見なされ、コーヒー農園の所有者のみならず、国の進歩のために白人化を推進したいと考える政治エリート層の双方にとって望ましいものであった。しかし、ヨーロッパ諸国の一部はブラジルの労働環境に不満を抱き、ヨーロッパからの移民流入を抑制する措置を講じ始めた。これにより、アジア系移民の受け入れが、新たな労働力確保の代替案として浮上することとなった。

こうして、コーヒー農園での労働を目的としたアジア系移民の受け入れを求める立場と、「人種の純粋性」を国の発展の基盤とみなし、黄色人種を「同化不能」として排除しようとする立場の間で、政治的・思想的な対立が生じた。このような議論の中で、アジア系移民が実際にブラジルへ渡航する前から、彼らに関する想像が形成されていった。すなわち、アジア系移民の実際の存在を必要とせずとも、彼らのイメージは「ブラジルの民族性に関する議論の上を遍在する幽霊のように漂っていた」のである(Lesser, 2001, p. 37)。

また、当時のブラジルとアメリカ合衆国の接近を考慮すれば、アジア系移民、特に東アジア出身者に関するブラジル国内の言説に、一定のアメリカ的影響が見られることも指摘できる。Rogério Dezem (2005)によれば、ブラジルにおける反日感情の起源は、アメリカ合衆国において生み出された言説によって醸成され、中国人に対する偏見とともに強化されていった。19世紀末から20世紀初頭のブラジルにおいては、中国人と日本人を厳密に区別する意識は必ずし

⁵ ホセ・マリア・ダ・シルヴァ・パラニョス・ジュニオールは、1845年4月20日にリオ・デ・ジャネイロで生まれた。彼は、外交官および政治家であるリオ・ブランコ子爵ホセ・マリア・ダ・シルヴァ・パラニョス(José Maria da Silva Paranhos)の息子である。1888年には、外交官としてドナ・イザベル皇女よりリオ・ブランコ男爵の称号を授与された。1902年から1912年にかけて、ブラジルの外務大臣を務めた。

も存在せず、「黄色人種」として一括りにされたイメージが広まっていたのである。

1908 年まで、Dezem によれば、日本人のアメリカ合衆国への移民は基本的に制限がなかった。この移民の流れは、1905 年の日露戦争後にさらに加速した。戦争によって引き起こされた経済危機の影響で、多くの日本人がより良い生活を求めてアメリカへ渡ったのである。しかし、この日本人労働者の増加はアメリカ社会に不安をもたらし、Dezem によれば、かつて中国人に対して向けられたものと同様の「反黄色人種」思想が台頭することとなった。

ただし、日本人に対する差別意識の形成は、中国人の場合とは異なる経路をたどった。反日的な考え方の帰結は反中国的なそれと同様であったが、その発端は異なっていた。中国人移民に対する偏見は、彼らの「否定的な」特性に基づいていたのに対し、日本人移民に対する偏見は、むしろ彼らの「肯定的な」特性に由来していたのである。実際、アメリカ政府自身が「日本人移民は勤勉であり、冷静で、知的で、勉学に励み、生活習慣が清潔であり、野心的で、アメリカの法律を遵守する」と評価していた (Dezem, 2005, p. 184)。このため、日本人労働者はアメリカ人労働者にとって「競争相手」と見なされたのである。

こうして、日本人移民の脅威は、「黄禍論」として形を成し、彼らの効果的な組織化の能力と、それを支える日本政府の保護と監督にあったのである。日本人移民はアメリカ社会において、勤勉で有能かつ効率的であり、アメリカ西海岸の経済各分野において競争力を持ち得る存在としてのイメージを確立した。しかし、これらの「長所」こそが彼らの「アキレス腱」となり、「言説の逆転」を通じて、後の反日的なパラノイアを生み出す要因となったのである (Dezem, 2005, p. 185)。

このように、アメリカ国内で強まった反日思想は、当時、外国の思想を頻繁に輸入していたブラジルにも影響を与えた。事実、1908 年までのブラジルにおいて、日本人移民を実際に目にした者はほとんどおらず、アジア人に関する認識は、アメリカや南米諸国における中国人移民の否定的な経験や、アメリカの反日思想に基づいていたのである。さらに、日本に関する直接的な情報を持つ者が皆無であったわけではなく、特に学者、軍人、政治家、外交官の一部は、日本を訪れ、そこでの経験を報告書として記録していた。

19 世紀末、一部の報告が記録されており、その最初のものは、1879 年に軍人フランシスコ・アントニオ・デ・アルメイダ (Francisco Antônio de Almeida, 1848-1928) によって発表された。これは、彼が極東を訪れた後に執筆したものである。また、1896 年の海軍将校クストディオ・ジョゼ・デ・メロ (Custódio José de Melo, 1840-1902) の経験や、1897 年の東京駐在ブラジル全権公使エンリケ・リスボア (Henrique Lisboa, 1847-1920) の報告も、当時のブラジルのコーヒー農園経営者や政治エリートが日本人に対する認識を形成する上で重要な役割を果たした。

さらに、日本を高く評価していたことで知られる外交官マノエル・デ・オリヴェイラ・リマ (Manoel de Oliveira Lima, 1867-1928) も、日本人移民のブラジルへの移住には反対の立場をとっていたことを指摘しておく必要がある。彼は、移民の流入がブラジルにおける人種の混合を促進する可能性があること

を理由に、これに否定的であった (Fujita, 2016)。この立場は、1905 年の講演において明確に示されている。

私がこの東洋の民族の驚異的な資質をいかに称賛し、その愛国的発展の方向性にいかに深い共感を抱いているとしても、日本人の不在が我が国の社会経済に大きな損失をもたらすとは考えない。まず第一に、先住民およびアフリカからの移民との劣悪な混血によって墮落したブラジル国民は、同じ白人系の要素と融合すべきである。日本人は、たとえ一定の道徳的側面において優れているとしても、その人種は異なっており、身体的に見ても少なくとも調和しない要素をもたらすことになる (Oliveira Lima, 1905, *apud* Fujita, 2016, p. 22)。

リマの見解は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて一部のブラジル人が日本人について抱いていた認識をよく表している。オリヴェイラ・リマと同様の考えを持つブラジルの知識人や政治家、またアメリカ合衆国で反日思想を広めた者たちには、日本人を必ずしも劣った民族とは見なさず、むしろ他の移民と比較して過度に優れた民族であると判断する傾向があった。このような観点から、ブラジルの一部の政治・知識層は、日本人移民が文化的・民族的に同化することは不可能であると主張し、彼らに否定的な特徴を付与しようと試みたのである。

加えて、アメリカ合衆国による日本観にとどまらず、ブラジル人はフランスが生み出した日本の社会的イメージからも影響を受けていたことを強調する必要がある。モニカ・セツヨ・オカモトによれば、フランスの雑誌「*Revue des deux mondes*」は、ブラジルにおけるフランス思想の重要な伝播媒体の一つであり、ひいては日本や日本人に関する情報源でもあった (Okamoto, 2016, p. 17)。このようにして、20 世紀前半のブラジルのエリート層は、雑誌である *Revue* の内容を情報源として参照し、ブラジルにおける移民政策をめぐる議論において、それを論拠として利用していたのである (Lesser, 2001)。

フランスが生み出した日本のイメージは、人種的ステレオタイプを確立する役割を果たし、黄色人種を白人よりも劣った存在として位置づけるとともに、西洋列強の自己イメージをアジア諸国に対して優越したものとして強調する機能を担っていた (Okamoto, 2016)。この点において、ブラジルは国際的な舞台で発展した国家であることを示すため、フランスが形成した日本観を取り入れ、それを改変し、日本人の「奇異さ」に対比する形で自国を「文明国」として演出しようとしたのである。

こうして、当時のブラジルのエリート層は、日本社会と比較することで、ブラジル社会の優位性を強調し、より高度に発展した文明であるかのように装った。

そのため、ブラジル人が選択した戦略は、国際的な場においてコスモポリタンの、道徳的、キリスト教的な色彩を強調することであった。すなわち、ブラジル社会（当然ながら、ここで指されるのは主にエリート層である）が、日本社会よりも「文明的」であることを示そうとしたのである。具体的には、習慣、文化、生活様式、宗教、女性の扱い、外国人に対する態度において、ブラジルが優越していると主張した。その意図は、ブラジルの外交官たちの

貴族的な振る舞いにも顕著に表れていた。フランスやポルトガルとの文化的親近性を利用しながら、当時のブラジル人旅行者は、アジアの「奇妙な習慣」や「原始的な生活様式」と対比する形で、自らの文化的洗練、優れた審美眼、礼儀作法の良さを常に強調していた (Okamoto, 2016, p. 102)。

このように、当時のブラジルのエリート層は、日本人を「勤勉で、知的で、清潔で、従順である」と評価する一方で、日本人に対する否定的なイメージの継続的な再生産も行っていたのである。すなわち、「日本人移民は同化できない」「混血によってブラジル国家の退廃を招く」といった議論が、日本人移民の受け入れに反対する者たちの論拠として用いられたのである。したがって、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての日本人移民をめぐる議論は、単なる「反黄色人種」的な言説にとどまらず、ブラジルの国民的アイデンティティをめぐる大きなイデオロギー的対立を含んでいた。そして、その議論の枠組みは、主にアメリカ合衆国 (Lesser, 2001; Dezem, 2005) およびフランス (Okamoto, 2016) からの影響を受けて形成されたのである。

初の日本人移民の到着とともに

ブラジルと日本は、1895 年 11 月 5 日にパリにおいて「日伯修好通商航海条約」を締結し、正式に外交関係を樹立してからすでに一世紀以上が経過している。しかしながら、日本人移民の受け入れが実現したのは、それから 12 年後のことであった。ブラジル側は繰り返し日本人移民の受け入れを要請し、日本側はブラジルにおける労働環境を慎重に検討した末、1907 年 11 月、当時のサンパウロ州農務長官カルロス・ボテーリョ (Carlos Botelho, 1855-1947) と、日本の皇國殖民会社の一員であった水野龍 (1859-1951) が、両国間の移民協定に署名した (Embaixada do Japão no Brasil, 2015)。

最初の日本人移民団は、1908 年 4 月 28 日に日本を出発したロシア製軍用船「笠戸丸」に乗ってブラジルへ向かった。この船には皇國殖民会社の契約移民 781 名⁶が乗船しており、52 日間の航海を経て、同年 6 月 18 日にサントス港へ到着した。

トモオ・ハンダ (Tomoo Handa, 1987) によれば、日本人移民がブラジルに到着した際、爆竹の音を耳にしたという。彼らは、それを自分たちの到来を祝うブラジル人の歓待と勘違いした。しかし、実際には、それは当時行われていた「フェスタ・ジュニーナ (Festa junina)」の祝祭の一環にすぎなかった。ハンダは次のように記している。

⁶ 笠戸丸に乗船した移民の人数については、参考文献ごとに若干の相違が見られる。ヴァルデマール・カルネイロ・レオン・ネット (Valdemar Carneiro Leão Neto, 1990) によれば、同船には契約移民 791 名と自由移民 11 名が乗船していたとされる。一方、トモオ・ハンダ (Tomoo Handa, 1987) は、合計 800 名の移民が乗船しており、そのうち 781 名が契約移民、10 名が自主移民であったと記している。また、カイゾウ・ベルトラン、ソノエ・スガハラ、マリア・エレナ・ウイエダ、クラウジオ・セト (Kaizô Beltrão, Sonoe Sugahara, Maria Helena Uyeda, Claudio Seto 2008) は、合計 791 名であり、その内訳は契約移民 781 名と自由移民 10 名であると報告している。同様に、ブラジル日本文化協会 (Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa, 1992) は、契約移民 781 名であったと記録している。以上のことから、本書では契約移民の数を 781 名とし、自由移民などの具体的な人数については特定しないこととした。

聖ジョアン祭の前夜には、爆竹が次々に打ち上げられ、轟音とともに炸裂した。また、空には熱気球が舞っていた。これを感慨深く眺めた移民たちは、ブラジル人が自分たちを歓迎してくれているという錯覚を抱いた (Handa, 1987, p. 4)。

その後、移民たちは船を降り、初めてブラジルの地に足を踏み入れた。ハンダによれば、日本人移民に対するブラジル人の第一印象を最もよく伝えているのは、1908年に新聞 *Correio Paulistano* に掲載された記事である。

笠戸丸から最初の移民が上陸した際の最良の記録は、*Correio Paulistano* の記者による報道である。ブラジル人が初めて日本人を目にするにあたり、「この人々はどのような服装をしているのか」と好奇心を抱いたという。記者は次のように記している。「彼らは男女ともヨーロッパ風の服装をしていた」。「男性は帽子やベレー帽をかぶり、女性はスカートとブラウスを着用し、腰にベルトを締め、シンプルな婦人帽をかぶっていた。その帽子は、できる限りシンプルなもので、ゴム紐で固定され、ヘアピンで装飾されていた。彼女たちの髪型は、日本画で見られるようなものを彷彿とさせるが、そこに描かれる巨大なヘアピンは用いられていなかった」。この記者は、浮世絵に描かれる女性像を思い浮かべながら、その姿を想像していたのであろう。[…] この最初の移民団は、わざわざ日本で用意した絹製のブラジル国旗を持参し、それを掲げながらブラジルの地に降り立った。この繊細な気遣いは、彼らの教養の高さを物語るものであった。(記者が、東洋の絹で作られたブラジル国旗を目の当たりにし、いかに感動したかは想像に難くない) (Handa, 1987, p. 5)。

当時のブラジル人は、南欧からの移民に慣れ親しんでいたが、彼らは旅の疲れとともに汚れた衣服をまとっていた。そのため、日本人移民の清潔で新しい服装を目にした際、驚きと称賛の念を抱いたのである。このように、日本人移民との最初の接触は、少なくとも外見に関しては、肯定的な印象をもたらしたといえる。

日本人移民は、ブラジルにおいて迅速な経済的成功とより良い生活水準を得られることを期待していた。このような期待は、1868年の明治維新以降に日本政府が推進していた政策であり、当時の移民会社が広く宣伝していたものであった。しかしながら、ブラジルに到着した日本人移民は、大きな失望を経験することとなった。レオン・ネット (Leão Neto, 1990) は、この点について次のように指摘している。

これらの挫折は、激しいカルチャーショックによってさらに悪化し、最初の移民たちの反応としてさまざまな形態の表現が見られたものの、最終的には契約期間を終える前に多くの移民が農園を離れるという高い離脱率として表れた。抗議、緊張状態の発生、あるいは夜陰に乗じた逃亡が相次ぎ、これらの初期の移民の波は、ブラジル駐在の日本公使館が職員を農園に派遣し、事態の鎮静化を図らざるを得ない状況をもたらした (Leão Neto, 1990, p. 28)。

この移民初期の時期において、日本人に対するブラジル人の認識にも変化が生じた。それまで主に間接的な情報に基づいていた日本人のイメージに加え、

実際に日本人と接触し、共存する経験が生まれたのである。この初期段階は試験的な移民期間と見なされており、当時のブラジル政府は「日本人が農園に定住することと日本が新たなブラジル産コーヒー市場となること」を期待していた（Leão Neto, 1990, p. 27）。

そのため、移民の開始から 1920 年代半ばにかけて、移民の流れには大きな不安定さが見られたことが、以下の表にも示されている。

表① 1908 年から 1925 年までの移民の流動

年	日本人移民数（1908 から 1925 まで）
1908	830
1909	31
1910	948
1911	28
1912	2.909
1913	7.122
1914	3.676
1915	65
1916	165
1917	3.899
1918	5.599
1919	3.022
1920	1.013
1921	840
1922	1.225
1923	895
1924	2.673
1925	6.330

出典：Anuário Estatístico do Brasil, IBGE, 1951

1913 年から 1916 年にかけて、日本人移民の数が減少していることが確認される。この要因としてまず挙げられるのは、コーヒー農園主および日本人労働者の双方が経験した失望であり、「これによりブラジル政府は 1913 年に補助金を打ち切り、日本からの移民の流入が減少する結果となった」（Okamoto, 2016, p. 160）。とりわけ 1915 年には、日本人移民数がわずか 65 人にとどまり、同年には南米において「黄禍論」が拡散していたことから、ブラジル政府は日本との関係を制限する動きを見せていた。

また、この時期の不安定さに影響を与えたもう一つの要因として、日本人移民の受け入れが、ブラジルに渡航するヨーロッパ系移民の数に依存していた点が挙げられる。すなわち、日本人労働者の受け入れは、主としてヨーロッパ系移民の減少によって生じた労働力の空白を補うための措置であり、「黄色人種」の移民は第二の選択肢として扱われ、代替的に受け入れられていたのである（Nogueira, 1984）。

一般的に、日本人移民の初期におけるコーヒー農園での労働経験は、彼らのブラジルへの渡航に対する否定的な意見を生み出す結果となった。すなわち、移民の定着に関する困難をめぐる複数の証言や、移民流入の不安定さが、同時

代における日本人移民に関する議論を再燃させ、当時の在ブラジル日本公使館にとっても懸念の種となっていた。

当時のブラジルにおいては、政治的および知的エリート層によって優生学的言説が推奨されており、1920年には、ミナス・ジェライス州議会において州議会議員フィデリス・ヘイス（Fidélis Reis, 1880-1962）が、この優生思想に基づいた演説を行っている。彼は、日本人とブラジル人との間に混血が生じることに深い懸念を示し、それが「取り返しのつかない害悪」、すなわち「メステイーソ（混血者）」を生み出すと主張した。その数年後、1923年には、連邦下院議員となった同氏が、「同化不能あるいは有害なかたちでの同化しか望めない民族要素」の流入を抑制することを目的とする法案を提出した（Leão Neto, 1990）。

フィデリス・ヘイスによって提出された法案は、黒人移民のブラジルへの入国を全面的に禁止するとともに、アジア系移民の受け入れを年間総移民数の5%に制限することを目的としていた。連邦下院議員としての彼の主張は、ブラジルにおける混血の拡大を防止することにあった。彼は、黄色人種を「血統、言語、習慣、宗教において同化不可能な存在であり、将来的にはアメリカ合衆国におけるカリフォルニアのような脅威となる可能性がある」と見なしていた（Reis; Faria, 1924）。

このような立場は、アメリカ合衆国において形成された「黄禍論」という日本人に対する否定的なイメージを受容しているのみならず、同時にフランスを中心とするヨーロッパの人種理論にも依拠していることが、フィデリスが議会に提出した文書からもうかがえる：

我々は、議長閣下、この場で人種の優劣という論争的な問題について議論を展開する意図はなく、また望むものでもない。しかしながら、我々はゴビノーの見解に従い、アーリアの血、もしくはラプージュやサー・ジュリアン・ソレル・ハクスリーが提唱した金髪の高頭型人種が文明のあらゆる進歩に決定的かつ抗しがたい影響を与えてきたとする説を認める傾向がある。黒人を導入したことが誤りであったことは明白である。黄色人種について、同様の誤りを繰り返してはならない（Reis; Faria; 1924, p. 35-36）。

この点において言及すべきは、フィデリスの演説中に引用されたジョゼフ・アーサー・ド・ゴビノー伯爵（Joseph Arthur de Gobineau, 1816-1882）である。彼はフランスの知識人であり、長きにわたってブラジルの支配層の思考様式に影響を与えた人物である。ゴビノーの思想は、彼が1869年にフランス公使として初めてブラジルに赴任した時期から、1933年から1934年の国家憲法制定議会における移民割当制度に関する議論に至るまで、ブラジル社会に影響を及ぼしてきた。ゴビノーの見解は、ギュスターヴ・ル・ボン（Gustave Le Bon, 1841-1931）、ジョルジュ・ヴァシェ・ド・ラプージュ（Georges Vacher de Lapouge, 1854-1936）、ピエール・ドニ（Pierre Denis, 1883-1951）といった他のフランス人思想家のそれと同様に、日本人移民に関する議論においてブラジルの政治家たちによってしばしば引用されていた。

他方、サンパウロにおける日本人労働者の初期の受け入れ経験を通じて、日本人移民の導入に肯定的な意見を表明するブラジルの政治家も存在していた。ヴァルジル・ニーマイヤー（Waldir Niemeyer, 1925）は、日本人労働者が、

当時一部の論者がアメリカの事例に基づいて主張していたような、労働市場における不当な競争や社会不安を引き起こす存在ではないと考えていた。ニーマイヤーによれば、ブラジルはアメリカ合衆国における経験をそのまま模倣するのではなく、自国の現実 に即して判断すべきであり、むしろ日本人移民を奨励すべきである。なぜなら、日本という「強大なアジア帝国」との貿易関係の発展において、日本人移民がブラジルにもたらす利益は極めて大きいと見なされたからである (Okamoto, 2016)。

1930 年代と移民割当制度をめぐる危機

1930 年の革命にともない、ブラジル国内においては政治的および経済的領域において顕著な変化が生じ、その結果として移民政策にも大きな影響が及ぼされた (Leão Neto, 1990)。要約すれば、地域主義的傾向が排除され、権力は連邦政府に集中されることとなった。その結果、各州は自律性を失い、中央集権的な政治運動によって課された方針に従わざるを得なくなった。

このような状況の下、1930 年の政令第 19.482 号および 1931 年の政令第 20.291 号の公布を通じて、ブラジル政府は外国人の入国条件に関する規定を改正し、移民の流入を制限するとともに、外国人労働者と国内労働者との関係を調整・規制するための労働関連の規範を整備した。これにより、外国人の受け入れに対する国家の統制が強化されると同時に、国民労働者の保護が図られることとなった。

日本移民に関して言えば、数々の議論を引き起こしてはいたものの、1930 年代初頭までは大きな軋轢もなく進行しており、また、当時におけるブラジルと日本との二国間関係も概して友好裡に展開されていた (Fujita, 2016)。実際、日本の当局者からは、ブラジルにおける移民の受け入れに対して好意的な評価がたびたび寄せられていた。1931 年には、イポリト・アウヴェス・ジアラウジョ (Hippolyto Alves d'Araújo, 1869-1946) およびグルジェル・ド・アマラル (Gurgel do Amaral, 1874-1961) の両大使が相次いで日本を訪問した際、昭和天皇 (1901-1989) は、ブラジルが日本人移民に対して友好的な対応を示していることに対し、大きな感謝と敬意を表明した。

このような状況のもと、ブラジルには 1932 年、1933 年、1934 年にそれぞれ 11,678 人、24,494 人、21,930 人の日本人移民が渡航しており、これらの数字からは、後に制定される移民割当制度に起因する移民政策の転換、すなわち危機的状況の到来を予見することは困難であった。総じてみれば、日本人移民は当時すでにアメリカ合衆国における日系人口を上回る規模でブラジルに定着しており、特にサンパウロ州に集中していたため、同州における農業生産において重要な労働力として位置づけられていた

しかしながら、日本人移民がブラジル社会に統合される可能性は、彼らが「コロニア (集落)」と呼ばれる独自の生活様式を維持していたことにより、一定の困難を伴っていた。これらの集中的な居住形態は、「村」という語の概念を再現するものであり、異なる社会的・文化的環境のなかで日本人共同体が選択した生活様式であった。日本人が「このような集中的な居住単位を『コロニア』と呼び、日本の村落の組織形態を再現したものであり、ほとんど自然発生的に、同質の者同士が集まり形成されたものである」とされている (Miyao, 2002, p. 9)。

このようなコロニアにおいて、日本人移民およびその子孫たちは、一般的に他の集団から隔絶された形で生活を送り、そこでは伝統が保持され、また民族的・文化的アイデンティティが強く表現されていた。そのため、彼らはブラジル社会の他の構成員からは、時に遠く隔たった存在、あるいは手の届かない存在として認識される傾向にあった。総じて言えば、

(...) 村相互の距離は極めて相対的であり、隣接するコミュニティが同じ価値観、信仰、言語を共有している限り、それは自らの共同体の延長として捉えられるため、より大きな調和と文化的一体感が生まれる可能性が高い。したがって、ブラジル人が同じ領域に居住していたとしても、日本人移民にとっては、ブラジル人共同体は異なる価値観、信仰、言語を有する遙か遠い村のように感じられたのである (Tomimatsu, 2014, p. 154)。

以上の点を踏まえ、一部のブラジル人政治家たちは日本人共同体の振る舞いに対して疑問を呈し、彼らがブラジル国家にとって潜在的な脅威となり得ることを強調しつつ、日本人は我が国の社会に適応も統合もできない集団であると主張した。こうした状況のもと、1933・1934 年の国民憲法制定議会 (Assembleia Nacional Constituinte) では、再び日本人移民に対する反対運動が顕在化することとなった。

この憲法制定議会は、ゲトゥリオ・ヴァルガス (Getúlio Vargas, 1882-1954) の召集により、「1930 年革命の理念を体現し、旧共和国期における州知事政治に代わる新たな憲法を制定する」(Fujita, 2016, p. 36) ことを目的に組織されたものであった。議論された諸課題のなかでも、とりわけ移民問題は白熱した議論を引き起こし、移民政策において割当制を導入すべきだとの意見が強調された。これは、いわゆる「同化不可能」な移民の流入を制限し、ひいてはブラジル社会の白人化という国家的理想の継続を目的としたものであった。

憲法制定議会において、日本人移民の受け入れ制限に積極的な立場をとったのは、ミゲル・クウト (Miguel Couto, 1865-1934)、アルトゥール・ネイヴァ (Artur Neiva, 1880-1943)、シャヴィエル・デ・オリヴェイラ (Xavier de Oliveira, 1892-1953) らの政治家であった。彼らはいずれも、「黄禍論」に対抗しなければブラジル国家の発展は望めないという論調をもって議論を展開した。その中でも、最も大きな影響力を有していたのはミゲル・クウトであった。

リオ・デ・ジャネイロ医学部出身のミゲル・クウトは、当時ブラジル医学アカデミーの会長を務め、ブラジル文学アカデミーの会員でもあった。彼は人種間の階層的序列を信奉しており、かねてより日本人移民に対して公然と反対の立場を取っていた。その理由は、彼が「有色人種」であるという人種的な側面に加え、日本人が日本帝国主義に対して極めて忠誠心を示すことから、国家的脅威とみなされていたためである。

1929 年に開催された「ブラジル優生学会議 (Congresso Brasileiro de Eugenia)」⁷における議論を踏まえ、ミゲル・クウトは1933年11月30日、以下のような憲法修正案を提出した。それは、「アフリカ人、またはアフリカ系

⁷ 1929 年 7 月、ミゲル・クウトの主導のもと、リオ・デ・ジャネイロ医科大学において第 1 回ブラジル優生学会議が開催された。同会議の目的は、移民に対する社会的統制に関する優生学的問題や、将来のブラジル国民の人種的資質などの諸課題について議論することであった (Okamoto, 2016)。

出身者の移民を禁止し、アジア系移民については、当該出身地域の移民総数に対し、年間 5 パーセントを上限としてのみ許可する」(Brasil, 1935, p. 492-493)である。本修正案の提出者であるクウト自身によれば、この提案はブラジル優生学会議の結論を法制化するものであり、同会議では、移民を「望ましくない民族的要素」とみなし、個人の健康状態や筋力の強靱さといった優生的価値だけでは不十分であり、より厳格な選別が必要であるとされていた (Brasil, 1935, p. 492)。

また、アルトゥール・ネイヴァも日本人移民の受け入れに明確に反対する立場を示し、日本の帝国主義の脅威および日本人移民の「同化不可能性」について論じた。ネイヴァは、日本が当時、国際連盟を脱退し、武力をもって満州を占領した事実を挙げ、アメリカ合衆国すら挑発する存在であることから、世界にとっての脅威となっていると主張した。同時に、日本人を同化不可能な民族と見なした彼は次のように述べている。

私は日本人を大いに賞賛するものであるが、それ以上に祖国への愛情を抱いており、異なる思考様式、異なる言語、異なる宗教を有する民族による植民に対しては、国家として警戒すべきであると考え。日本人はアジア地域内ですら、集中的に閉鎖的な共同体を形成し、他集団と融合することはない。これはすべてのアジア民族に共通して見られる現象であり、私自身、モーリシャスにおいて中国人、ヒンドゥー教徒、マレー人が百年以上にわたり、民族、宗教、集団ごとに完全に分離され、融合することなく生活している様子を確証した (Brasil, 1935, p. 214)。

さらに、シャヴィエル・オリヴェイラもまた優生学思想に基づき、移民政策は白人種に焦点を絞って進めるべきだと主張した。その目的は、「東アジアのいくつかの民族や、近東地域（小アジア）の民族など、多少とも退化した人種の残滓」と彼がみなす者たちの受け入れを回避することにあった (Brasil, 1935, p. 547)。

このようにして、シャヴィエル・オリヴェイラはアジア人を望ましくない存在、かつ同化困難な存在と位置づけ、ブラジルが真に偉大な国家となるためには人種の向上が不可欠であり、「弱い人間によって強い民族が構成されることはあり得ず、また劣等人種によって偉大な国家を築くことも不可能である」と断言した (Brasil, 1935, p. 549)。

憲法制定議会では、日本および日本人移民に対して肯定的な立場をとる代表者も存在し、たとえばブルーノ・ロボ (Bruno Lobo, 1884-1945) 教授などがその例として挙げられる。こうした激しい議論を経て、1934 年 5 月 25 日、憲法草案は最終的に制定議会により承認され、以下の条文をもって公布された。

外国人の本国領土への入国は、移民の民族的統合ならびに身体的・市民的能力の保障のために必要な制限を受ける。ただし、各国からの年間移民数は、過去五十年間にブラジルに定住した同国国民の総数の二パーセントを超えてはならない。連邦領土内のいかなる地点においても、移民の集中は禁じられ、外国人の選定・配置・同化に関しては法律によって規定されるものとする (Brasil, 1934)。

制定された憲法条文は、特定の国名を明記してはいなかったものの、その規定が明らかに日本人移民を対象としていると受け取られ、日本側からは極めて否定的に受け止められた。実際、憲法制定議会における代表者らの発言には、人種的優生思想の主張や日本人移民の性格・行動に対する否定的評価が含まれており、両国間の外交関係は極めて繊細な局面を迎えることとなった。

このような日本人移民に対する制限の可能性は、単なる移民政策にとどまらず、ブラジルと日本の関係全体に影響を及ぼすものであった。というのも、移民の継続的な受け入れこそが、両国関係の本質的要素であったからである (Leão Neto, 1990)。こうした背景の下、1934 年憲法の公布後、日本人移民の流入は徐々に制限されるようになり、日本人に対するイメージも同時に悪化した。

国際的には、大日本帝国は列強の一角として脅威と見なされており、ブラジル国内に居住する日本人移民も、時にその帝国の延長として捉えられ、ブラジル政府関係者の間に一定の警戒感を抱かせる要因となっていた。そして 1930 年代末、第二次世界大戦の勃発により、ブラジル国内における日本人集住地は、他の外国人コミュニティと同様に、政府による厳しい弾圧の対象となるのである。

第二次世界大戦中

第二次世界大戦 (1939-1945) の勃発をめぐる国際情勢において、幾つかの出来事は、ブラジル国内におけるジェトゥリオ・ヴァルガス政権の施策に大きな影響を与えた。ヨーロッパにおける緊張が高まるにつれ、アメリカ合衆国は、将来的な武力衝突に備えて、アメリカ大陸諸国との関係強化を模索するようになった。このような状況の中で、国家主義的傾向を持っていたヴァルガスもまた、アメリカ合衆国との外交・経済関係の強化を目指して接近を図った。

このような米国主導の外交方針の影響を受け、ブラジル政府は、国内に居住する枢軸国出身者⁸に対し、様々な制限措置を講じるに至った。たとえば 1938 年には、外国語による教育活動が全面的に禁止され、日本語学校もその対象となった。

さらに、外国語による出版・報道も強い抑圧を受けることとなり、「日本語以外の言語が理解できない者が多数を占めていた日本人社会においては、深刻な混乱が生じた」と指摘されている (Ninomiya, 2016)。このような状況下で、国内の不安感は次第に高まり、枢軸国出身の人々は敵とみなされる傾向が顕著になっていった。その状況について、トモオ・ハンダ (Tomoo Handa, 1987) は次のように記している。

パラナ州北部の **Três Barras** 支部の報告によれば、「野球の試合で勝利を祝うため、トラックの上で行進曲を歌っていた人々が、町に入った途端に扇動者とみなされ、90 千レイスの罰金を科された」、「路上で日本語新聞を読んでいた者が、突如反日的なブラジル人警官に新聞を奪い取られた」、「商業用カレンダーに日本語の文字を印刷することは禁止された」、「5 人以上の集会が禁

⁸ 第二次世界大戦期において、いわゆる枢軸国とは、ドイツ、イタリアおよび日本を指した。一方、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、ならびにソビエト社会主義共和国連邦 (ソ連) は、連合国と呼ばれる陣営を構成していた。

止された」、「日本語教育は全面的に禁止された」、「仲間でさえ、上から目線で『お前ら外国人は...』といった態度を取るようになった (Handa, 1987, p. 629)。

1941 年、日本とアメリカ合衆国との間で戦争が開始されたという公式発表がなされると、ブラジルにおける日本人移民の立場は一層不安定なものとなり、ブラジルと日本との外交関係も断絶へと向かっていった。

両国間の断交は、1942 年 1 月 28 日に正式に通達され、これにより日本人移民史において「空白」とされる時期が始まったとされる (Ninomiya, 2016)。この空白は、1950 年代に入ってようやく終焉を迎えることとなる。

日本が連合国との戦争状態に入ったことで、「敵国」のイメージは、日本人移民およびその子孫にも投影されるようになった。

この点に関して重要なのは、ブラジルの新聞報道がそのような敵視的イメージの形成と拡散において果たした役割である。先述の通り、既に一部のブラジル人政治家の間では、日本人を脅威とみなし、劣等な人種とする言説が流布されていた。

1942 年、新聞 *Diário Carioca* は、「ペルー・ハーバーの影、レジストロの運命に漂う：サンパウロ沿岸における日本人の浸透という重大問題 (A Sombra de Pearl Harbour sobre os Destinos de Registro. O Gravíssimo Problema da Infiltração Nipônica no Litoral de São Paulo)」と題した記事を掲載した。

同記事は、日本人が沿岸地域に居住していることが国家の安全保障にとって重大な危険をもたらすと警告し、ブラジルで以前より広く喧伝されていた「黄禍論」の言説を再強化する内容となっていた。

図① 黄色い仮面の裏側



出典： *Diário Carioca*, Rio de Janeiro, 1942 年 2 月 28 日, n. 4.203, p. 1; 13; 16.

取得先：http://memoria.bn.br/DocReader/093092_03/9310 (2025 年 8 月 3 日取得)

同年に掲載された別の記事（図 1）においても、*Diário Carioca* 紙は、サンパウロ州沿岸部に居住する日本人移民の子孫に対して直接的な懸念を表明していた。記事では、日本人移民の子どもたちの写真とともに「これが日系二世の顔である」との見出しを掲げ、さらに「日本人の子どもたちは、たとえブラジルで生まれていたとしても、ブラジルの要素は年齢証明書に記載された出生地のみであり、身体的にも精神的にも日本に属している」と断じていた。このようにして、日本人およびその子孫は常に疑いの目で見られ、先入観をもって潜在的な容疑者と見なされていたのである。「日本人の子どもであるというだけで、たとえブラジル生まれであっても、日本人と同一視され、結果的に同様に疑念の対象となったのである」（Ferreira, 2016, p. 105）。

したがって、第二次世界大戦という歴史的文脈のなかで、ブラジル社会における日本人の否定的イメージはさらに強化され、メディアを通じて世論においても正当化されるに至った。ブラジルの報道機関は、たとえば風刺雑誌 *Careta* に掲載された風刺画や戯画などを通じて、日本人に対する固定的なステレオタイプを強調し拡散させた。このように、「視覚的アイコンを告発の手段として用いる手法は、戦時下に流通していた反日的な文芸作品においても積極的に取り入れられていた」のである（Takeuchi, 2008, p. 179）。

図② 「無駄だ」



キャプション：兵士：「カモフラージュであります、中尉殿！我々は尻尾をつけました。アメリカ兵にはサルと日本人の区別がつきませんので。」

中尉：「なるほど！だから最近、死んだサルをよく見かけるのか……！」

出典：*Careta*, Rio de Janeiro, 1944 年 10 月 28 日。

取得先：<http://memoria.bn.br/DocReader/083712/78189>（2025 年 8 月 3 日取得）

風刺画「無駄だ（Não Adianta）」（図 2）では、二人の日本人軍人のあいだで交わされる会話が描かれており、彼らは自らのカモフラージュの技術につい

て語り合っている。両者ともにサルのような容貌で描かれており、そのうちの一人は自らの制服に尻尾を付け加えたことを中尉に報告する。これは、敵国のアメリカ兵にとって、日本人とサルの区別がつかないため、それを利用して彼らを混乱させるためであると語っている。この風刺画は、戦時下の一場面を描くと同時に、日本人の身体的特徴に対して極めて侮蔑的な言及を行っている。

このように、日本人をサルと結び付ける表象は、第二次世界大戦期のブラジルにおいて広く流布しており、実際に日本人移民が街中で「サル顔」と罵倒されるといった事例も報告されている (Takeuchi, 2008)。こうした風刺画における滑稽化・劣等化の表象は、単なる紙面上の演出にとどまらず、読者に対しても直接的な影響を及ぼしていた。すなわち、読者は「このようなステレオタイプ的な描写を日本人およびその子孫たちに対する印象として受け取り、日常的に接する日系人に対しても同様のイメージを重ね合わせるようになっていた」のである (Takeuchi, 2008, p. 181)。

戦争の終結が近づく中、ブラジルの新聞は、アメリカがポツダム宣言の条件に基づき「無条件降伏」を日本に求めていることを報道していた (Handa, 1987)。日本語新聞へのアクセスが断たれていたこと、ならびに在伯日本人移民が置かれた緊張した状況は、戦争終結の行方に対する不安と期待をさらに募らせた。このような中、日本の降伏により戦争が正式に終結した後も、ブラジルにおける日本人社会の内部には、日本の敗戦を信じようとしなかった者たちが存在していた。それについて次のような指摘がある。

同日付の *Diário de São Paulo* 紙には、記者が市内のホテルや商店を訪れて行った取材記事が掲載されていた。その記事によれば、多くの日本人が「何も知らない」と答える中、ついにある一人が次のように語った。「日本が降伏したなんて、考えられません。絶対にありえないことです。」

記者がさらに尋ねた。「しかし、東京ラジオがそう伝えていますよ?」、「今の時代、アメリカの日本語放送は非常に精巧です。信用できませんよ。」

「では、天皇の玉音放送も信じないのですか?」、「そんな放送があったとは思えません。天皇が発されたことに間違いがあるはずがない」 (Handa, 1987, p. 643)。

このような不確実性の中で、日本人社会内部において新たな「戦争」が展開されることとなった。すなわち、「勝ち組」と「負け組」⁹による対立である。勝ち組にとって、日本の敗戦を信じる者は天皇への冒瀆を犯すものであり、死に値すると考えられていた (Ninomiya, 2016)。彼らは、日本が戦争に敗れたとは一切認めず、日本の「大勝利」を宣伝すべく、組織的に宣伝活動を展開していったのである。

多くの勝ち組は、超国家主義的団体「臣道連盟」¹⁰にも参加しており、日本語新聞の廃刊によって情報が著しく制限された時期にあって、戦争終結に関する虚偽情報の流布に寄与した。Lesser (2001) は次のように説明している。

⁹ 「勝ち組」とは、日本の勝利を信じる在伯日本人移民の一派を指す呼称であり、すなわち日本が戦争に勝利したと確信していた者たちである。これに対し、「負け組」は、日本が既に無条件降伏を受け入れ、戦争に敗北したという現実を認識していた移民の集団であった。

¹⁰ 臣道連盟は、旧日本軍の退役軍人らによって結成された組織であり、日本の第二次世界大戦敗戦を認めず、日本の降伏を信じる者たちに対して暴力的な襲撃を行っていた団体である。臣

1946 年半ばには、臣道連盟の宣伝には、トルーマン大統領が裕仁天皇に対して頭を下げるように加工された写真や、日本軍がサンフランシスコに上陸しニューヨークへ向けて進軍しているとする「報道」、さらにはゲトゥリオ・ヴァルガス大統領が東京を訪れて降伏文書に署名するとのニュースまでもが含まれていた。[……] 暗殺事件は 1946 年 3 月初旬に始まり、特攻隊と呼ばれる 5 人の構成員がバストス協同組合 (Cooperativa de Bastos) の理事を銃殺したことで幕を開けた。翌月には、日本当局を長年悩ませていた『日伯新聞』の元編集長も殺害された。[……] 1946 年 3 月から 9 月にかけて、16 名の「覚醒者 [負け組]」が殺され、[……] 30 名が重傷を負い、さらに数百名が、交差した骨の上に頭蓋骨を描いた臣道連盟の脅迫状によって殺害を予告された。絹、綿、ミントを栽培していた多くの農家の家屋や農地も破壊された。(p. 243–244)

臣道連盟によって引き起こされた一連の事件は、当時の反日感情の再燃にも寄与した。1946 年憲法に盛り込まれる諸規定をめぐる議論の中では、引き続き「国民の民族的構成」に重きを置く姿勢が見られ、1945 年の政令第 7.967 号においては、外国人の入国に関する規制が定められた。この政令は、「ヨーロッパ系祖先のより望ましい特徴の保持」という思想に基づいていた。

その一方で、「臣道連盟の勝ち組メンバーによる犯罪的活動をはじめとした一連の襲撃事件が相次ぎ、ブラジル世論における反日感情は、当然のごとく高まりを見せた」(Nogueira, 1992, p. 296)。そのため、1946 年憲法の制定に際し、日本からの移民が完全に禁止される寸前にまで至った。

しかしながら、日本人移民の流入は 1953 年以降に本格的に再開され、1973 年までに約 6 万人の移民が記録されている (Ninomiya, 2016)。1960 年代から 1970 年代にかけては、いわゆる「日本の高度経済成長」と呼ばれる好況期にあたり、日本経済は大きな成長を遂げた。この経済的背景は、すでにブラジルに居住していた日本人移民およびその子孫にも大きな影響を与え、戦後に来伯した移民たちにとっては、従来とは異なる統合のあり方が可能となる状況をもたらした。

総じて言えば、今日において日本人移民およびその子孫は、社会統合および社会的上昇の模範とみなされており、その成功は努力、教育、そして規律といった、日本文化と深く結びついた価値観によって達成されたものとされている。しかしながら、本章において見てきたように、このような肯定的なイメージは常に存在していたわけではなく、第二次世界大戦期を中心として、日系社会は極めて困難な状況に直面してきたのである。加えて、長年にわたり日本人は「同化不可能な存在」として見なされ、ブラジル国家の統合に対する脅威と捉えられてきたため、20 世紀前半の大半において、民族・人種に関する政治的議論の中でたびたび取り上げられてきたのである。

道連盟は、少なくとも 23 名を殺害し、さらに 147 名に負傷を負わせたとされている (Morais, 2000, p. 331)。

リオ・ブランコ学院におけるエリート主義

日本人移民をめぐる民族・人種的な議論の歴史的経緯について、19世紀末から第二次世界大戦終結までを概観した上で、本書の次章では、イタマラチー（ブラジル外務省）において歴史的にどのような外交官像が形成されてきたのかを分析し、その制度的特徴とブラジル政府および外務省（MRE）によって採られてきた施策を検討する。これにより、1970年代にエジムンド・ススム・フジタがブラジル外交官として任用された過程を歴史的・制度的文脈の中に位置づけ、よりの確に理解することを目的とする。

対外関係の舞台に立つ「文明化され、白人化された」ブラジル

旧共和国期（1889-1930）において、ブラジルの知識人、政治家、外交官らから成るエリート層は、国際社会におけるブラジルのイメージを向上させるべく多大な努力を払った（Skidmore, 1974）。その一環として、混血の否定、国民の「白人化」政策、そしてヨーロッパが提示する「文明」という理念に基づいた国民的アイデンティティの構築といった姿勢が採られた。

19世紀末から20世紀初頭にかけての時期には、ブラジルにおける奴隷制度の廃止が重要な転換点となり、人種問題をめぐる政治的議論が大きく浮上した。アフリカ系住民およびその子孫の統合をめぐる議論は、しばしば黒人を劣った人種と見なす分離主義的な方向へと進んでいった。このような文脈の中で、19世紀末には、ヨーロッパ系移民の受け入れによってブラジルの人口が「白人化」され、それにより国民の「退化」が抑制されるとの信念が広く共有されていた（Skidmore, 1974; Schwarcz, 1993）。

このように、「文明化された」ブラジル社会のイメージ構築は、人種問題と密接に結びついていたのである。エリック・ホブズボーム（Hobsbawm, 1988）によれば、人類は歴史的に人種という観点から分類されてきた。すなわち、ある人種が他の人種よりも本質的に優れているというヒエラルキーの観念が長く保持されてきた。国家の進歩もまた、しばしば生物学的要因によって説明され、とりわけ自らの人種的または民族的優越性を信じる人々の間でこの観念が強調される傾向にあった。

このような「白人化」イデオロギーは、ブラジルの政治的および知的エリート層の間で広く受け入れられており、ヨーロッパ的な文明の規範に照らして、国家が望ましい発展を遂げるための最良の手段として認識されていた。ホブズボームは次のように説明している。

ラテンアメリカの諸共和国においては、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国を変革した革命に触発されたイデオログや政治家たちが、彼らの国の進歩は「アーリア化」、すなわち異人種間結婚（ブラジルの場合）あるいは白人ヨーロッパ人の大規模な移住による人口の「白人化」（アルゼンチンの場合）に依存していると考えていた。支配階級は当然ながら白人であり——少なくとも彼ら自身はそう信じていた——ヨーロッパ系移民の子孫のうちイベリア

系以外の姓を持つ者たちは、現在に至るまで政治的エリートの中で不相応なほど高い割合を占めている (Hobsbawm, 1988, p. 34)。

移民政策の分野において、ブラジルは「労働機会と社会的上昇を求めてアメリカ大陸に渡った数百万のヨーロッパ人およびアジア人を受け入れた国の一つであった」(Fausto, 1995, p. 275)。1887年から1914年の間に、ポルトガル人、イタリア人、スペイン人、ドイツ人を含むおよそ 274 万人の移民がブラジルに入国した。

1888年の奴隷制廃止によりコーヒー農園において労働力が不足したことに加え、ブラジル社会の「白人化」を目指す意図も、ヨーロッパ系移民に対する需要の背景にあったと考えられる。国家的アイデンティティの構築において重要な役割を果たしたサンパウロ州の大農園主たちは、黒人労働者に代わる労働力として、ヨーロッパ系移民の受け入れを選択したのである (Andrews, 1998)。

このような文脈の中で、国際舞台におけるブラジルのイメージは、「かつての植民地であり、ヨーロッパの補完的経済を担う後進国、さらに混血によって退化した国家」として位置づけられていた (Okamoto, 2016, p. 18)。西欧諸国の間では、人種の混交が人種的退廃をもたらすとする見解が支配的であり、そのような見方はブラジルのエリート層に劣等感と自己のアイデンティティへの不満を生じさせた。

このような傾向のもとで、当時のブラジルの政治的・知的エリートが構想した国民的アイデンティティのモデルは、先に述べたように、主にフランスを中心とする外国の思想に依拠しており、ブラジル社会の特性をヨーロッパ社会と比較することで、ブラジルを「文明国」として描出することが企図された。

伝統社会を想起させる習慣や慣行の否定、支配的社会の「文明的」イメージを損なう恐れのあるあらゆる民衆文化的要素の排除、市中心部から民衆層を厳格に排除する都市政策、この地域はほぼ完全にブルジョワ層の享受のために隔離されることとなる、そしてパリの生活様式に深く同化した攻撃的なコスモポリタニズム (Sevcenko, 1983, p. 30)。

このような近代化の過程において、ブラジルのイメージ刷新に向けた提案は、当時の首都リオ・デ・ジャネイロ市の再開発を通じて、より具体的に可視化されることとなった。都市の日常生活は、ブラジル共和国における新たな政治的・文化的志向を反映するものでなければならず、これを実現するため、都市空間の建築的改変と一部住民の生活様式の変容が進められたのである。その目的は、旧大陸における文明モデルを追従し、「植民地的過去およびアフリカ的影響を否認することによって、欧州の資本家および移民に対して好印象を与えること」にあった (Okamoto, 2016, p. 100)。

首都を国際的で活気ある近代都市として示そうとする欲望は、公的空間の構造そのものにも影響を与え、やがてそれは、リオ・デ・ジャネイロのエリート層が希求した力強い発展と、新たな都市空間に居場所を見出せず、定職に就くことのない不安定な層の増加という、相反する現実の間にあるジレンマとして顕在化していった (Carvalho, 2012)。このようにして、「公共空間の構造、生活様式、そしてリオ市民の精神性が、全く新たな規範に基づき変容していったのであり、もはやそれに対抗しうる存在はなかった」(Sevcenko, 1983, p. 30)。

この時期における代表的な都市改造プロジェクトの一つが、Avenida Central（中央大通り）の再整備事業であった。1904年に着工され、約1年をかけて完成したこの事業により、数百軒に及ぶ住宅が取り壊され、その跡地には国立劇場、国立図書館、国立美術館など、近代国家としてのブラジルを象徴する施設が次々と建設された。Lessaによれば、「ブラジルは未来の国であるという意識を抱いており、Avenida Centralはその象徴的な舞台であった」（Lessa, 2001, p. 15）。

図③ 1907年のリオ・デ・ジャネイロのAvenida Central



取得先：<https://www.ronald.com/arte/uma-inacreditavel-av-rio-branco-o-rio-de-janeiro-do-inicio-do-seculo-xx>（2021年7月18日取得）

20世紀初頭のブラジル社会は、Sevcenko（1983）が指摘するように、当時のエリート層によって主導される中で、都市の中心部から大衆文化および都市下層階級の住民を排除する方向へと進んでいた。その空間は、ちょうど当時のパリの地方都市風の雰囲気を想起させるようなものとされるべきであり、それを実現するため、遅れや貧困を想起させるあらゆる痕跡は取り除かれ、その跡地には、明らかにヨーロッパ建築の影響を受けた優美な建造物が建設された。

現在のアヴェニダ・ヒオ・ブランコ（Avenida Rio Branco）として知られる Avenida Central の開通は、ブラジルが「文明国」であることを世界に示すための象徴的事業であり、共和国の「顔」として都市を再構築するうえで大きな役割を果たした。「この時代には、フランスのベル・エポックの精神が全面的に取り入れられ、その最盛期は20世紀最初の10年間にあった」（Carvalho, 2012, p. 40）。

このような近代化の潮流の中、リオ・デ・ジャネイロに所在した外務省（MRE）の本部、イタマラチー宮殿もまた、当時のリオのエリート層が追求した進歩と洗練の象徴的空間として位置づけられていた。1902年にリオ・ブランコ男爵が外相に就任して以降、同宮殿は共和国初期のエリート層における社交の主要空間の一つとなり、ブラジルにおける「文明化プロジェクト」の一翼を

担う存在となった。イタマラチーに必要とされるすべての物品、たとえば、公文書用の用紙から室内装飾品に至るまではヨーロッパから輸入されており、その建築自体も宮殿風の外務省としての威厳を備えるよう設計されていた (Vasconcellos, 1954)。

図④ 20 世紀初頭のイタマラチー宮殿の内部庭園



取得先：<http://www.funag.gov.br/chdd/index.php/equipe/57-institucional/76-palacio-do-itamaraty> (2021 年 7 月 18 日取得)

イタマラチー宮殿は、ブラジル外交の中心であり、いわば「ブラジル外交の館」であった。同宮殿では、外国元首の公式訪問や、国内の主要な政治関係者との会合など、ブラジル国家の主要な外交的・政治的行事が執り行われていた。「ブラジル国家の『社会的表象』に捧げられたこの空間は、その担い手たちが、世界に対するヴィジョンとその区分原理を体現し、可視化し、意味づける場でもある」(Gobo, 2016, p. 46)。

したがって、ブラジル外務省の本部であるイタマラチー宮殿は、国際政治・外交の舞台において、ブラジルがヨーロッパの提唱する近代化および文明化のプロジェクトに歩調を合わせていることを示そうとする、ブラジルの政治的・知的エリートたちの試みの場でもあった。

このように、20 世紀初頭においてブラジルのエリート層が志向した「文明化の過程」は、ブラジル外交の領域においても明確に表出していた。外務省本部としてのイタマラチー宮殿は、国家の象徴的表象空間として、国際社会におけるブラジルの肯定的なイメージの確立に重要な役割を果たしていたのである。同宮殿の建築に見られる威厳と洗練の雰囲気は、ブラジル外交を担う政治エージェントたちの人格的資質や地位にも投影されていた。このようにして、イタマラチー宮殿という空間は、ブラジル外交官の特異性と社会的威信を象徴的に示す場として機能していたのである。

ブラジル外交官キャリアの黎明

ブラジルを近代化および文明化の模範とすべくなされた諸努力は、外交分野においても明瞭に認められる。よく知られているように、イタマラチー（外務省）は連邦行政府のなかでも最も伝統的な機関の一つであり、外交官の職は公務員制度の中でもとりわけ高い威信を有する職種である。これまでにアロイジオ・アゼヴェード（Aluísio Azevedo）、オズヴァルド・アラニーヤ（Oswaldo Aranha）、ジョアキン・ナブーコ（Joaquim Nabuco）、オリヴェイラ・リマ（Oliveira Lima）、ジョアン・ギマランイス・ローザ（João Guimarães Rosa）といった著名な人物がブラジル外交を担ってきた。かかる人々を輩出した公的機関は、ブラジルに限らず世界的に見ても稀有である（Lafer, 2002）。

歴史的に見て、ブラジル外交は平和的な手法による国際関係の構築で知られており、とりわけ隣接諸国との友好関係維持に寄与してきた。19世紀以降、ブラジルは周辺国との間で武力衝突に至ることなく、領土の確定に際しても、地域的な対立感情や長期的な懸案を回避するため、さまざまな外交交渉を通じて領土的枠組みを形成してきた（Pimentel, 2013）。

このような調和的な関係は、他の要因に加え、国際的に国家を代表する外交官たちの活動によって支えられている。外交官は、国家を代表し、他国との交渉を担うと同時に、国外においてブラジルの国益を擁護する責務を負っている。

ブラジルの外交官は、行政組織上、外務省に所属しており、同省はもともとドン・ジョアン 6 世（1767-1826）によって「外務・戦争省（Ministério dos Negócios Estrangeiros e da Guerra）」として創設された機関である。このことから、外務省はブラジル国家の主権の存在および独立国家としての地位を体现する制度であると言える。すなわち、「ハンナ・アレントの言説を援用して、政治共同体の創設という行為に根ざした制度である」と語ることも可能である（Lafer, 2018, p. 152）。このような観点からすれば、イタマラチーが常に国家の政治的および知的エリート層の優秀な人材を擁してきたことは、むしろ必然であるといえる。

現在、外交官としての採用は「外交官キャリア採用試験（Concurso de Admissão à Carreira de Diplomata, CACD）」として知られる公開競争試験を通じて行われている。しかしながら、外交官の任命が試験によって規定されるようになったのは比較的最近のことであり、1934年に選抜試験制度が導入される以前には、外務省における採用方法は多岐にわたっていた。そうした採用方法の多くに共通していたのは、歴史、法学、政治地理学に関する卓越した知識の保持、そして特に英語およびフランス語を中心とした外国語能力が求められていた点である。

外交官採用の制度的変遷をより適切に理解するためには、ブラジル外交制度の歴史的発展におけるいくつかの制限を踏まえる必要がある。この観点からすれば、外交官制度の歴史は、ブラジルが独立国家として歩み始めた 1822 年を起点とすることができよう。すなわち、1822 年は、ブラジル独立と同時に外務省が国家行政機構の一部として正式に設置された年であるとみなすことができる（Cheibub, 1984）。ここではこの 1822 年を起点として、ブラジル外交官制度の歴史的展開を検討する。

独立国家としての国際的承認を獲得する必要に迫られていた当時のブラジルにとって、外交政策の強化は喫緊の課題であった。そのため、ブラジルの外交

官組織は、当時のラテンアメリカ諸国と比較しても、その規模および人数の両面において著しく大きなものとなっていた。この背景には、1808年から1821年にかけてブラジルがヨーロッパの王政の本拠地として機能していたという歴史的事実がある。独立後も、この王政的性格はさまざまな側面において保持されようとし、外交においても例外ではなかった。この点について、「皇帝はヨーロッパの宮廷に倣い、ブラジルの威信を高めるために多数の外交官団を維持した」と指摘されている (Seckinger, 1978, p. 121)。

要約すれば、帝政期 (1822-1889) におけるブラジル外交団の構成は、主として貴族的エリート層の出身者によって占められており、必ずしも専門的能力を有する人材の採用が指向されていたわけではなかった。「外交官という職業は自律的なキャリアとして確立されておらず、すべての公職と同様に推薦によって充てられていた。政治的により重要な地位へと至るための腰掛けとして機能していたのである」 (Alonso, 2007, p. 60-61)。このように、ブラジルの対外政策の領域においても、国家官僚機構全体に見られたパトリモニアリズム (家産制的支配) が再生産されていたといえよう。

公的領域と私的領域との明確な境界が存在しなかったことは、ブラジル外務省においても顕著であり、大貴族出身の家系に属する人物へと職務や官職が委任される状況を生んでいた。官吏の選定に際しては、国家の運営に深く関与している名家の出身者が優先されるのが慣例であった。このような状況下で、Cheibub が指摘するように、領事は必ずしも固定給を得ていたわけではなく、その業務への報酬は、勤務先の領事館が得た収益から配分されるかたちで支払われていた。「官職は、国家が分配する一種の聖職俸給のようなものとして扱われていた」 (Cheibub, 1984, p. 117)。

その一方で、外交官として国家を代表する職務に内在する要請に鑑みれば、候補者には、広範な世界知の修得が求められており、そうした知的資本に容易にアクセスできるのは、ブラジル社会の中でも政治的・知的エリート層に限られていた。Belém Lopes が指摘するように、貴族的基準に依拠した選抜過程においては、客観的かつ非人格的な選考を行うことは極めて困難であった。その貴族的基準とは、

たとえば家系の出自、交友関係、ヨーロッパ諸国への渡航歴、さらには特定の知的リソース (欧州の大学、法学系高等教育機関、北半球において影響力を持つ文芸出版物) へのアクセス、あるいは特定の外交技術 (外国語の運用能力、ヨーロッパ式の礼儀作法の再現能力) ということである (Belém Lopes, 2011, p. 4)。

したがって、外交官への任命には、文化資本に加えて社会資本の保有も求められており、これはピエール・ブルデュー (Bourdieu, 1989) が概念化した「象徴資本」の体現とも言えるものであった。この観点から見ると、外交官の登用は、出自や社会的関係性に基づいてなされていたといえる。「したがって、外交官の採用形態は、たとえリオ・ブランコ男爵期 (1902-1912) においても、パーソナリズムに基づいた伝統的な様式に則っていたと考えることができる」 (Gobo, 2013, p. 8)。

加えて、帝政期および第一共和政期 (1889-1930) においては、イタマラチーは候補者の選定に際し、文化資本や社会資本のみならず、肌の色や外見的特

徴といった他の要素も評価基準としていた (Gobo, 2018)。このような外見的基準に基づく選定は、ブラジルが「文明化された」「ヨーロッパ化された」国家であることを対外的に示すための手段であった。なぜなら、「長きにわたり、ブラジルという国家は、混血によって退化した民族というイメージに苦しめられてきた」ためである (Okamoto, 2016, p. 139)。このように、外交を担う代表者たちには、「良い外見」、とりわけヨーロッパ的な身体的特性に合致することが求められていたのである。

図⑤ 在ロンドンのブラジル外交団



キャプション：左から右へ、グラッサ・アラーニャ (Graça Aranha)、シルヴィーノ・グルジェル・ド・アマラウ (Sylvino Gurgel do Amaral)、ジョアキン・ナブーコ (Joaquim Nabuco)、ドミシオ・ダ・ガマ (Domício da Gama)、オリヴェイラ・リマ (Oliveira Lima)。

出典：*Kosmos*, Rio de Janeiro, n. 3, mar. 1904.

以上の図 (図 5) は、20 世紀初頭のブラジル人外交官数名を写したものであるが、そこには彼らの身体的特徴に一定の共通性が見出される。イタマラチーの外交官たちは、西洋的な視点から「文明化され発展した国家」に属する人々を体現する存在として位置づけられていた。すなわち、彼らの身体的特徴は、ブラジル社会においてしばしば「問題」とされた混血による退化的な要素を否定するものであった。

したがって、長きにわたり外交官の職に就く者たちは、ヨーロッパ的な洗練・優雅さ・教養と結びつけられるだけでなく、白人で、背が高く、体格が良いといった一定の身体的類型を示していた (Lima, 1937; Amaral, 1947; Gouvêa, 1976; Alonso, 2007; Azambuja, 2011; Okamoto, 2016; Gobo, 2018)。

このように、外交官の選抜は、主としてブラジルの政治的・知的エリート層の利益に連動するかたちで行われていた。共和国初期においては、いわゆる「文明国」として国際社会に肯定的なイメージを与えることを目的とし、欧州的な行動様式および身体的外観との親和性が重視された。外交官は、対外政策の担い手として、この国際的なイメージ戦略の中核的存在であった。

このように、イタマラチーは、ブラジル国家の威信を象徴的に体現する中枢機関であると同時に、国内エリートの姿をも映し出す鏡であった。大使マルコ

ス・アザンブジャ（Marcos Azambuja）の言葉を借りれば、それはまさに「エリート中のエリート」である。

ブラジルの外交官たちは互いに似ているだけでなく、世界中の外交官とも似ていた——もっともその世界とは、実質的に影響力を持つ40カ国程度に限られていたが。私たちは、様式や慣習を共有する国際的エリート・コミュニティの一員であり、その「最上層の精華（*crème de la crème*）」は外交言語としてのフランス語を通じて意思疎通を図っていた。この種のエリート主義的部族性は、理解可能である。同一のコードのもとに行動し、文字通りにも比喩的にも同じ言語を話すことは、実用的であった[……] イタマラチーは、当時において——そして何よりも——「エリートの館」であった。さらに言えば、それはエリート中のエリートを集約した場であり、その正統性は、質と卓越性の中核として自己認識され、またそのように認識されることに依拠していたのである（Azambuja, 2011）。

このように、ブラジル外交官は国家エリートの縮図として位置づけられ、外交の場は貴族的出自を持つ人物や有力家系の人々によって占められていた。「要するに、帝政期から共和国初期にかけて外交官となるための変数は、個人的資産と象徴資本（家系および蓄積された文化資本）であった」（Gobo, 2013, p. 9）。

このようなパーソナリズムに基づく外交官の選抜過程に変化が見られるようになるのは、1930年代以降のことである。この時期から外交官の採用に公開競争試験が導入されるようになり、さらに1945年には、外交官の選抜および養成を専門とする機関である「リオ・ブランコ学院（Instituto Rio Branco, IRBr）」が創設された。同研究所は現在に至るまで、ブラジル外交官育成の中核を担っている。

最初の採用試験とリオ・ブランコ学院の創設

外務省（MRE）の制度的歴史の中で、ブラジル外交官のプロフィールは、主に採用方法の変遷により、幾度となく変化してきた。現在では、外交官キャリア採用試験（Concurso de Admissão à Carreira de Diplomata, CACD）¹¹はブラジル国内で最難関の試験の一つとされており、この名称で公式に導入されたのは1996年であるが、その起源は1931年に遡る¹²。1934年には、同試験がブ

¹¹ Gobo（2016）によれば、現在の形に近い形での外交官キャリアへの採用における公開競争試験の義務化は、1930年代以降に初めて確立されたものである。しかしながら、旧共和国期においても、一定の規則に基づく選抜過程が存在した時期があった。最初の事例は1903年であり、領事、在外公館書記官および国務省書記補の職に対する募集が行われた。もう一つの顕著な例は1917年であり、より客観的な選抜基準が制定された時期である。ただし、こうした選抜試験は不定期に実施されていたため、外交官キャリアに入った者の過半数は、正式な試験を経ずに採用されていた。

¹² 1931年以降、Friaça（2018）によれば、暫定政権下のゲトゥリオ・ヴァルガス政権のもと、アフラニオ・ヂ・メロ・フランコ（Afrânio de Mello Franco, 1870-1943）外相によって、外務省内におけるメロ・フランコ改革が開始された。この改革は、官僚制の近代化の一環として、公務員制度の構造に複数の改革をもたらし、行政職キャリアの標準化を推進するものであった。イタマラチー内では、これにより官職体系の一本化が進められ、これまで存在していた書記官

ラジル初の行政機関の一つである国家公務員行政局（Departamento Administrativo do Serviço Público, DASP）によって実施され、公的職業への就任にあたっての必須選抜手段として制度化された。

1930年代以降、外交官キャリアへの選抜過程において、「メリトクラシー」の言説が次第に重視されるようになった。これは、選抜過程に具体的な規則を設ける公開告示を通じて実現されたものである。選抜をより能力本位のものとするために、いくつかの重要な措置が講じられた。たとえば、応募者の氏名を伏せたうえで実施される論述試験の導入や、政治家および外務省上層部の手から採用権限を取り除く措置がそれにあたる。こうした変化により、「公開競争試験は、血縁、縁故、友人関係によって支配層と結ばれていない新興都市中産階級に対し、同省への門戸を開くことになった」と Farias (2013, p. 846) は指摘している。

しかしながら、Karla Gobo (2018) の見解によれば、選抜試験の導入とキャリアの「民主化」が進んだとはいえ、実際に合格を勝ち取った者の多くは、依然としてブラジル社会の中でも限られた特権的集団に属していた。選抜制度改革が実施されたにもかかわらず、試験で求められる高度な知識の性質が、結果的に外交官の人材像に大きな変化をもたらさなかったというのが実情である。Gobo は次のように述べている。「選抜過程において高度な文化資本を有する者を選び出すという目的は依然として不変であり、変化したのは社会資本が選考過程に与える影響力の低下である」(Gobo, 2018, p. 445)。

国家公務員行政局によって整備された選抜制度は、外交官キャリアへの採用方法において大きな進展を意味していたものの、当時の外務省内では必ずしも好意的に受け止められたわけではなかった。というのも、国家公務員行政局はしばしばイタマラチーの伝統やその特有の性格を十分に理解し得ないと見なされていたためである。こうした状況の下、外交官キャリアの採用制度を外務省の利益により即した形に改めようとする動きが生じ、1934年から1945年の間にいくつかの改革案が提起された。そして1945年、外交官の選抜および養成を専門的に担う機関として、リオ・ブランコ学院が創設されるに至ったのである。

当時の外交官採用制度において、新たに導入された選抜規則により外交官の出自が変化しつつあったが、それに対する調整策の一つとして「業績審査による選抜」が導入された。この方式は、従来の公開競争試験によらずに特定の候補者を登用する手段として知られるようになり、「窓からの入省」と揶揄された。すなわち、正式な試験合格者を差し置いて「縁故関係」にある人物を登用する手段として機能しうるものであった (Cheibub, 1984)。国家公務員行政局の管理下においては、この業績審査方式は大きな成果を上げなかったものの、1938年に外務大臣に就任したオズワルド・アラニーヤ (Oswaldo Aranha, 1894-1960)¹³は、この選抜方式をイタマラチーにおいてより頻繁に導入することに成功した。これについて、Guerreiro (1992) は次のように記している。

職が廃止され、新たに外交団および領事団が創設された。これらの改革は、外交官の採用プロセスに直接的な影響を及ぼした。

¹³ オズワルド・アラニーヤは、1938年3月5日から1944年8月23日までブラジルの外務大臣を務めた。彼がイタマラチーにおいて推進した主要な施策の一つが、いわゆる「オズワルド・アラニーヤ改革」(1938年10月14日付政令第791号)である。この改革においては、他の諸改正とあわせて、領事団と外交団の職階が統合され、「外交官キャリア」として一本化され

当局は国家公務員行政局においてまず業績審査による選抜制度を考案したが、国家公務員行政局側は全候補者を不合格とした。そこで、オズワルド・アラニーニは強引に、外務省においてこの制度を実施した。だが、業績審査によってキャリアに登用するのはなかなか難しい。どのような業績が対象となるのか？各候補者の提出した業績や主張は官報に掲載された。結果として、多くの事務職員や、当時人脈を有していた人物たちがこの制度によって任命されたのである（Guerreiro, 1992, p. 46）。

さらに、選抜過程には「面接」も含まれており、これは候補者の知識や準備状況を評価するだけでなく、特定の社会集団のキャリア進出を制限する機能も担っていた。Gobo によれば、「外交官としての『適性』がない」と見なされたのは、女性、黒人、同性愛者などであり、試験段階ですでに同制度の排他的・選別的な性格が明らかであったという（Gobo, 2016, p. 78）。したがって、制度上はキャリアの多様化や変革を促すような措置が存在していたとはいえ、当時のブラジル外交官の構成的同質性に大きな変化は見られなかった。むしろ、イタマラチーが導入した業績審査や面接といった制度的介入は、外交官キャリア内部の同質性を維持する方向に作用していたといえる（Cheibub, 1984）。

外交官の資質向上の分野において、アンドレ・アマード（André Amado, 2013）によれば、イタマラチーはその職員の専門職化を進めるための一環として、1934年に「当時初任の外交官を指して用いられていた『三等領事』に対する訓練の形態に関する議論を開始した」（Amado, 2013, p. 31）という。この文脈において、外交官ジョルジ・ラトゥール（Jorge Latour）は1934年、外務省に附属する学校の設立について提案を開始した。この学校は、新任外交官の養成と研修を担うことを目的としており、新たな選抜制度によって生じた省内の人材間の格差を是正することを意図していた。

ラトゥールによって提起された外交官の能力向上に関する議論は、1945年、すなわちリオ・ブランコ男爵の生誕百周年の年に、リオ・ブランコ学院の設立という形で結実した。同学院は、1945年4月18日付政令第7.473号によって設立された。その任務は以下の通りであった。

国家および国民の内部的維持と統合、ならびに対外的発展と国際的投影の観点から、外交政策および国際関係の諸側面に関わるあらゆる事項についての教育と訓練を行うこと（Latour *apud* Cheibub, 1984, p. 127）。

さらに、創設の根拠となった政令の第一条によれば、リオ・ブランコ学院は、外務省職員の養成および研修、外交官試験の志願者の準備、大学等の要請または自主的な判断に基づく特別講座の実施、国内外の諸問題に関する知識の普及、そして政治的・外交的歴史に関する研究への貢献を目的として設立された。したがって、当初リオ・ブランコ学院は研修・訓練を担う機関として発足したが、創設翌年の1946年には外交アカデミーとしての地位を確立し、外交官志望者の選抜も担うようになった（Castro, 2009）。

このように、外交官への登用は、リオ・ブランコ学院によって実施される筆記試験による選抜に加えて、「外交官養成課程（Curso de Preparação à

た。この措置は、1931年に実施されたメロ・フランコ改革において書記官職が廃止されたことを契機に始まったキャリア統合の流れを継承・発展させるものであった。

Carreira de Diplomata, CPCD)」の修了を通じて行われるようになった。外交官養成課程の受講生は、最終試験に合格すれば自動的に任命される仕組みであった。Cheibubによれば、このような選抜方式の導入は、外交官キャリアに対するリオ・ブランコ学院の独占的地位を示すとともに、「国家公務員行政局による採用への対抗措置であり、外交官自身による新規採用者の選抜を維持するための方策であった」(Cheibub, 1984, p. 127)。

したがって、リオ・ブランコ学院によるこうした画一化の方針は、1930年代初頭に導入された公開競争試験による選抜制度によって生じた新任者の社会的出自の多様化を抑制するために、外務省が講じた施策の一つであった。大使マルコス・アザンブジャ (Azambuja, 2011) の言葉を借りれば、リオ・ブランコ学院の創設以後、イタマラチーは「貴族的選抜によるエリートの館であることをやめ、知的選抜によるエリートの館ともなった。エリートという概念は存続したのみならず、より強固なものとなった」のである。

このようにして、外務省による多様化傾向の中和を目指した諸施策は、当時のブラジルにおいて外交官が、最も均質性と連携性の高い職業集団の一つであり続けることに寄与したのである。

ブラジル外交官団における変化

先に見たように、1930年代以降に導入された選抜制度の改革は、当時の外交官キャリアにおける新規採用者の属性に大きな変化をもたらすことはなかった。実際のところ、外務省自身が採用制度に介入した結果、既存の制度下で既に見られた人材像と極めて近い候補者が選抜され続ける傾向にあった (Cheibub, 1984)。

イタマラチーにおける人材構成の多様化に資するより実効的な施策が見られるようになるのは、ブラジルの再民主化以降、特に 1990 年代以降のことである。この時期には、口頭試験の廃止、アフロ系ブラジル人を対象としたアフーマティブ・アクションの拡充、女性の昇進促進の奨励など、複数の制度的政策が導入された (Gobo, 2018)。

歴史的に、ブラジルの外交官団は、ブラジル社会のその他の集団とは異なる、極めて同質的な集団として存続してきた。長らくイタマラチーはエリート層のための空間とされ、主として白人男性によって構成されていた。

しかしながら、外務省の歴史の中には、女性、黒人、そして 1975 年以降はアジア系 (黄色人種) といった、制度上は少数派とされる集団のキャリア参加が見られる時期もあった。ただし、その参加は非連続的であり、影響力という観点からもきわめて限定的であった。

イタマラチーにおける女性の参入

女性に関しては、マリア・ジョゼ・ヂ・カストロ・ヘベロ・メンデス (Maria José de Castro Rebello Mendes, 1891-1936) が先駆的な存在であったことが広く知られている。彼女は 1918 年にブラジル初の女性外交官となったのみならず、同時にブラジルにおける最初的女性公務員となった。

同年の外交官採用選考に際して、メンデスは当時の外務大臣ニロ・ペサーニャ (Nilo Peçanha, 1867-1924) に対し、自らの受験申請を認可するよう求める請願書を提出した。これを受け、外務大臣は以下のような見解を述べた。

法律顧問官の意見を聴取した上で、本件を認可し、総務局長が当該受験登録を指示することを許可する。ブラジル共和国憲法には、女性が公職に就くことを禁止するいかなる規定も存在しない。現行民法典も、私法上の権利の享受および行使において、男女の完全なる平等を定めている。その一条には、「公職にある女性は、夫から常に許可を受けているものとみなされる」と規定されている。**外交という職務が、慎重さと高度な能力を要するものであり、女性がそれを適切に遂行し得るかについて私は判断しかねる——もつとも、これらの資質は男性の専有物ではない——が、応募者がこの外務省において地位を得るに足るかどうかは、選考試験の結果によってのみ判断されるべきである。**既存の法が女性の権利を制限も否定もしていない以上、私がその権利を制限または否定することはできない。君主制国家において女性が皇后や女王となり得るのであれば、共和制国家において行政職への道が閉ざされる理由はない。**確かに、公的生活に伴う数々の失望を思えば、家庭の運営に専念することが女性の威信にとって望ましいかもしれない。**しかし、女性が公的職務を志望し、かつその適性が実証されるのであれば、その希望を拒む理由はない。¹⁴

ニロ・ペサーニャによる発言は、女性の官僚機構への参入に対する彼自身の見解を示すのみならず、当時の支配層、特に政治家や外交官といったエリート層において共有されていた、国家の重要な官職、とりわけ外交官の職務は、男性によってより自然かつ効果的に遂行されるべきであるという思想をも反映している。マリア・ジョゼ・ヂ・カストロ・ヘベロ・メンデスの受験申請に対してペサーニャは明確に反対の立場を取らなかったものの、その言説には、女性がイタマラチーの職員として加わることがもたらすであろう違和感や動揺が如実に表れている。

マリア・ジョゼ・ヂ・カストロ・ヘベロ・メンデスは、その選抜試験において首席で合格し、この成果によって、他の女性たちも国家公務における活躍を志向する契機となった。ニロ・ペサーニャの決定は、女性が国家行政職に就くことを法的に妨げる根拠は存在しないことを確認した点でも重要であった。彼女の合格を契機として、1919年から1938年の間にさらに18名の女性がイタマラチーに採用されたが、1938年には外交官採用試験への女性の応募が正式に禁止されるに至る。

1938年に制定された「オズワルド・アラニャ改革 (Reforma Oswaldo Aranha)」(1938年10月14日付政令第791号)は、領事職と外交官職を「外交官」という単一の職制に統合した点で画期的であったが、同時に外交官採用試験に女性が応募する道を閉ざす契機ともなった。1931年の「メロ・フランコ改革 (Reforma Melo Franco)」においてすでに、当時外務省に在籍していた女性たちは領事部門へと転属され、外交官部門には男性のみが残された¹⁵。アラ

¹⁴ 強調は引用者。ニロ・ペサーニャによる、マリア・ジョゼ・ヂ・カストロ・ヘベロ・メンデスの受験申請に対する決裁文書(1918年8月28日付)。マリア・ジョゼ・メンデス・ピニエイロ・ジ・ヴァスコンセロス個人文書綴。イタマラチー文書館(ブラジリア所蔵)。取得先：http://memoria.bn.br/pdf/348970/per348970_1918_02411.pdf (2021年8月20日取得)。

¹⁵ 外交官部門の職務は、領事部門の職務と比較して、はるかに政治的性格を帯びており、かつ、より高い威信を有すると見なされている。

一ニヤ改革においては、この動きがさらに制度的に明確化され、政令第30条において、男性のみが応募可能であると明示されたのである。

この点について Friaça は次のように指摘している。

本政令は、外交官キャリアへのアクセスを男性に限定した。Hahner (1990) によれば、1938 年の試験にすでに出願していた 12 名の女性たちは、何の説明もなく一方的に不受理とされた。1938 年 10 月 15 日付の *Jornal do Brasil* 紙は、「イタマラチー改革が発効——多数の重要な革新が導入」と題した記事を掲載し、その小見出しには「外交官採用試験から女性が排除される」との文言が掲げられていた (Friaça, 2018, p. 150)。

かくして 1938 年の改革は、外務省における女性統合の可能性を断ち切り、女性の外交官キャリアからの公式な排除の始まりとなった。その後 1954 年に女性の受験が再び許可されるまでの間、女性の外交官としての活動は、Friaça (2018) が「20 人のグループ」と呼ぶ限られた存在に留まることとなった。

本グループは、ブラジル初の女性外交官であるマリア・ジョゼ・ヂ・カストロ・ヘベロ・メンデスをはじめ、1919 年から 1938 年の間に採用された 18 名の女性外交官、そして 1945 年に外交官職へ転属されたマリア・ジョゼ・モンテイロ・ヂ・カルヴァーリョ (1907-1992)¹⁶を含む、先駆的な女性外交官たちによって構成されている。この「20 人のグループ」は、1954 年に女性の再び外交官職への応募が許可されるまで、外務省における唯一の女性代表であった。

Friaça (2018) によって紹介された「20 人のグループ」には、ブラジル外交における重要な人物であるオデッチ・ヂ・カルヴァーリョ・エ・ソウザ (1904-1970) も含まれる。彼女はブラジルで初めての女性大使であり、かつ、世界初のキャリア大使となった女性である¹⁷。イタマラチーで 20 年間のキャリアを持ち、外交官職の最高位にまで登り詰めたにもかかわらず、彼女は「ドナ・オデッチ (オデッチおば様)」と呼ばれていた。この呼称の用法は、すべての男性外交官に対しては階級称号が氏名の前に付けられていたことと対照的であり、性差別的な姿勢が当時存在していたことを如実に示している (Friaça, 2018, p. 197)。

「ドナ・オデッチ」という呼称は、彼女の人生を通じて、そして大使としての在任中においてさえも一貫して用いられていた。一方で、彼女と同等の地位にあった男性の同僚たち、すなわち一等書記官に対しては、常に「大使」という敬称が使用されていた。

このような呼称のあり方に表れた排他的かつ偏見的な扱いは、当該機関において支配的であった思考様式を如実に示している。こうした状況の中で、女性として外交官の職にあった彼女は、その容姿までもが職業上の同僚であったマノエル・ピオ・コヘイア (Manoel Pio Corrêa, 1918-2013) によって言及され

¹⁶ マリア・ジョゼ・モンテイロ・ヂ・カルヴァーリョは、1945 年 12 月 28 日付で外交官キャリアの初任ポストに任命された。彼女はイタマラチーにおいて 15 年間公務に従事しており、その間、文書係として勤務していたが、同日付で第三等領事の職へと転任された。

¹⁷ キャリア外交官としての大使とは、外交官としての昇進過程における全階級を順次経て、最終的に最高位の職に就任した者を指す。Friaça (2018) によれば、オデッチ・ヂ・カルヴァーリョ・エ・ソウザ自身が、自らを世界で初めてのキャリア大使であると明言しているという。

ることとなった。彼は、彼女の外見的魅力は、その優れた知性には見合わない
と述べている。

さらに同氏は次のようにも語っている。「この好ましくない、時に痛ましい
ほど風刺的にさえなる外見の背後には、明晰な知性、高度な専門的教養、深い
温情、そして羨望に値するユーモアのセンスが宿っていたのである」(Corrêa,
1994, p. 151, *apud* Friaça, 2018, p. 201)。

図⑥ ジュセリーノ・クビチェック元大統領（1902-1976）と外交官オデッチ・
ヂ・カルヴァーリョ・エ・ソウザの会談（1956年）



出典：イタマラチー歴史アーカイブ

取得先：<https://obarao.damasio.com.br/baronesa-do-mes-odette-de-carvalho-e-souza/>. 2021年10月2日取得)

オデッチ・ヂ・カルヴァーリョ・エ・ソウザ、マリア・ジョゼ・ヂ・カスト
ロ・ヘベロ・メンデス、マリア・ジョゼ・モンテイロ・ヂ・カルヴァーリョ、
ならびに「20人のグループ」に属するその他の女性外交官たちは、20世紀後
半に至るまで、イタマラチーにおける唯一の女性職員としてその地位を保ち続
けた。1952年、女性が司法的保護手続きを通じて外交官採用試験への出願を認
められたことにより、女性に対するイタマラチーの門戸開放が再び動き出すこ
ととなった。1945年以降、採用試験を管轄していたリオ・ブランコ学院¹⁸は、
女性の出願を一貫して拒否していた。しかしながら、1952年に暫定的な差止命
令が認められたことを受け、同学院は女性の出願を受理せざるを得なくなった。
この年、110名が試験に応募し、最終的に26名が口頭試験を経て合格した。そ
の中で、マリア・サンドラ・コルデイロ・ヂ・メロ（1932-1975）は総合順位
第12位を獲得していた。

試験合格後、マリア・サンドラ・コルデイロ・ヂ・メロが正式に外交官とな
るためには、外交官養成課程（CPCD）への進学が必要であった。しかしなが

¹⁸ 1945年にリオ・ブランコ学院が設立された後、女性の受験を認める可能性が一時的に検討さ
れた。しかしながら、1946年4月26日に公布された政令第9.202号により、この動きは否定
されることとなった。同政令は、外交官採用試験に応募できるのは男性の出生によるブラジル
国民に限ると明記していた。

ら、彼女が実際にリオ・ブランコ学院での学修を開始できたのは、1953年半ばになってからであった。これは、彼女の暫定的な司法命令がその後取り消され、最終的な判決を待つ必要があったためである。1953年には、イタマラチーにおける女性の地位向上においても一つの重要な前進が見られた。それは、女性のリオ・ブランコ学院への入学を認める法案に対する上院の賛成であった。

この法案は、1952年にマリア・サンドラ・コルデイロ・ヂ・メロの出願を支援したモザールト・ラーゴ (Mozart Lago, 1889-1974) 上院議員によって提出され、1954年1月18日に法律第2,171号として公布された。同法第1条には次のように記されている。それは、「外交官キャリアの初級職への登用にあたっては、性別にかかわらず、出生によるブラジル国民の全員が応募資格を有する」のである。この法律の公布により、「少なくともキャリアへのアクセス権という点において、女性は男性と対等の条件を得た」のである (Friaça, 2018, p. 192)。

イタマラチーにおける黒人

イタマラチーにおける黒人の歴史は、女性の場合以上に分析が困難である。女性の場合、その排除はより明示的であり、20世紀においては女性の外交官としての採用を明確に禁止する法規や規定が存在していた。そのため、ブラジル外交における女性の参画については、その歴史的経緯を法的条件に基づいて比較的明確に把握することが可能である。

一方で、イタマラチーにおける黒人の排除は、法的根拠に基づくものではない。むしろ、その排除は、経済的・文化的資本を持たない者にとってきわめて困難な選抜制度のあり方に起因しており、それが結果的にブラジル人口の大部分、特に非白人層を排除する構造となっている。このように、外交官職における白人のほぼ独占的な歴史的関与の実態は、同制度が特定の人種集団を制度的に優遇する規範を再生産してきたことを示している。この点において、本制度のあり方は、シウヴィオ・ヂ・アルメイダ (Silvio de Almeida, 2019) が指摘するように、「人種差別は制度自体によって創出されるものではなく、制度によって再生産される社会秩序の一部である」 (Almeida, 2019, p. 47) という視座と一致するものである。

外交官キャリアにおける黒人の低い参加率をめぐる議論において一つの大きな問題は、選抜過程における差別の訴えが常に、特定の人種集団のアクセスを法的に阻む規定は存在しないという主張によって退けられてきた点にある。すなわち、外務省は、人種や肌の色を理由に応募資格を制限することはしておらず、それゆえに人種差別的偏見の告発からは常に免責されてきたのである。

しかしながら、1946年に新聞 *Diário Carioca* に掲載された記事 (図7) によれば、女性の場合のような明示的な法的根拠は存在しないにせよ、外交官選抜過程において人種的差別が存在していたことを示唆する証拠が見出される。これは、法制度の不在をもって差別の不存在を主張する論理の限界を明らかにするものである。

図⑦ リオ・ブランコ学院における有色人種学生への排除



出典：Diário Carioca, 1946年10月17日

マティアス・オリンピオ上院議員（Matias Olímpio, 1882-1967）の発言の一節によれば、リオ・ブランコ学院の存在は「独裁の温室内においてのみ可能であり、そこには依怙最良と肌の色による偏見が横行している」とされている。また同氏は、「混血の社会によって実践される民主主義という開かれた環境において、肌の色を理由に生徒を排除するような機関は容認されるべきではない」とも述べている。このようなオリンピオの批判は、1941年にアミルトン・ノゲイラ上院議員（Hamilton Nogueira, 1897-1981）によって公式に提起された人種差別の告発と軌を一にしている。ノゲイラは、当時の外交官選抜試験において、応募者数と実際に次の試験段階に進んだ者の数との間に大きな乖離があることに疑問を呈し、イタマラチーが採用に際して用いた基準に不信感を表明した（Farias; Carmo, 2015, p. 59）。

その後、1978年には、ブラジル・メディアにより外交官採用試験における人種差別の可能性が公に議論される中、初の黒人女性であるモニカ・ヂ・メネゼス・カンポス（Mônica de Menezes Campos）がリオ・ブランコ学院への入学を果たした。この出来事は、ブラジル外務省において初の黒人外交官が誕生する可能性を高め、期待を集めることとなった（Conde, 1978）。

メネゼス・カンポス以前に、ブラジルにおいて黒人が外交官として正規のキャリアを積んだ例は存在しなかったことは、ここで改めて想起されるべきである。ブラジルの歴史において、他にも黒人外交官の記録は存在する。たとえば、ドミシオ・ダ・ガマ（Domício da Gama, 1862-1925）は、リオ・ブランコ男爵の政権下で外交官として活動し、後にはワシントン駐在ブラジル大使（1911-1918）を務めた人物であり、ブラジル初の黒人外交官とする見解も一部に存在する。また、ジャーナリスト・作家であったハイムンド・ソウザ・ダントス（Raymundo Souza Dantas, 1923-2002）は、1961年にガーナ駐在ブラジル大使に任命され、ファビオ・コイフマン教授（Fábio Koifman, 2021）によれば、ブラジル初の黒人大使とされている。しかしながら、これらの人物はいずれも「キャリア外交官」ではなく、すなわち公務員制度に基づく明確な選考試験を経て正規に任用された者ではない。正式な手続きを通じた公的ポストの獲得と

いう意味において、メネゼス・カンポスこそが初の黒人外交官と見なされるのである。

図⑧ ブラジル初の黒人女性外交官



出典：Jornal do Brasil, 1978年8月2日

モニカ・ヂ・メネゼス・カンポスは、ブラジルにおいて初の黒人女性外交官となり、その業績は当時、イタマラチーにおける進歩の象徴として記録された。彼女の外交官としての経歴は非常に短く、1985年に脳動脈瘤により逝去した¹⁹。しかしながら、既存のパラダイムを打破した彼女の入省については、当時のブラジル国内の報道やイタマラチーによる言説がどのようなものであったか、またその承認がブラジル政府にとっていかに都合のよいものであったかという点を含め、歴史的文脈の中で位置づける必要がある。

1970年代のブラジルは、軍事政権（1964-1985）の統治下にあり、自国の国際的イメージを高めるべく、あらゆる人種や肌の色にかかわらず平等な機会を提供する偏見のない国家として国際社会に自らを印象付けようとしていた。同時に、政治的・経済的利害に基づき、アフリカ諸国との関係強化が進められ、同地域には複数の新たな大使館が設置された。こうした文脈において、軍事政権は外交的利益を背景に、政治的ツールとして「人種民主主義」概念を再導入し、民族的・人種的対立の存在しない国家というイメージを喧伝するに至った（Guimarães, 2001）。

すでに見たように、排他的な性格に対して厳しい批判を受けていたイタマラチーにおいて、初の黒人女性の合格というニュースは、ブラジルの新聞各紙によって大々的に報道された。この件に関して、アブディアス・ド・ナシメント（Abdias do Nascimento, 1980）は、当該報道がセンセーショナルなキャンペーンとして展開されたことを指摘している。

¹⁹ モニカ・ヂ・メネゼス・カンポスの経歴は、ドキュメンタリー *Foreigner – Brazilian Women At Diplomacy* で詳しく語られている。取得先は <https://www.youtube.com/watch?v=wLysBpHjyc8&t>（2021年10月2日取得）である。

最近、イタマラチー傘下のリオ・ブランコ学院は、黒人女性モニカ・メネゼス・カンポスを受け入れた。これを受けて、同機関に人種差別が存在しないことを示そうとするセンセーショナルな報道キャンペーンが展開された。以下に挙げるイタマラチーによるプロパガンダの見出しはいずれも象徴的である。「外交を学ぶために合格した初の黒人女性、国連勤務を希望」(*Jornal do Brasil*, リオ・デ・ジャネイロ、1978年8月2日付)、「イタマラチーのモニカ：ブラジル外交政策にとって必要な一幕の女優」(同紙、1978年8月3日付)、「イタマラチーに黒人女性：ブラジル外交界における人種差別の終焉」(*Diário de Notícias*, バイーア州、1978年8月5日付) (Nascimento, 1980, p. 218-219、強調は引用者)。

ここで使用されている「初の黒人女性」、「ブラジル外交政策にとって必要な一幕の女優」、「人種差別の終焉」といった表現は、軍事政権が主張していた公式的言説を支持し、それに同調するかたちでブラジル国内の大半の報道機関が姿勢を取っていたことを示しており、それは同時にイタマラチーの利害とも一致していた。

1978年に掲載された記事において、ジャーナリストのカルロス・マルチ(Carlos Marchi)は、エルネスト・ガイゼル政権(1974-1979)の発足以降、アフリカとの関係を強化していたブラジルの外交政策が、自国の外交官養成制度に人種差別が存在しないことを証明することを切望していたと報じている。イタマラチーは、「ブラジルが権力構造の中でも最もエリート的な領域である外交において、黒人を擁している」(Marchi, 1978, p. 29)ことを示そうとしていたのである。マルチはさらに次のように述べている：

ジャーナリストに「ある黒人の小娘 [*crioulinha*] が合格した」という非常に示唆的な情報を提供したのは、外交官自身——おそらく上層部の指示によるものと思われる——であった。興味のある記者には、モニカの住所と電話番号もすぐに渡された。TV グローボ放送局も、非公式ながらイタマラチーから直ちに招集された。そしてモニカは、瞬く間に全国的な有名人となり、ブラジルの対外政策にとって極めて都合の良い芝居の主役となったのである (Marchi, 1978, p. 29)。

このようにして、モニカ・カンポス・ヂ・メネゼスの存在は、単にブラジルの外交政策にとって「必要な」存在——すなわち、政府が求めていた具体的な証拠——であるにとどまらず、人種差別の告発に直面していた1970年代末のイタマラチーにとって、極めて「都合の良い」象徴的存在でもあった。

さらに、当該機関における人種差別の告発と軌を一にして、長きにわたり外交官採用における面接試験が、肌の色を理由に「エリート中のエリート」にふさわしくないと見なされた者たちを排除する手段として機能していたと推察される (Gobo, 2018)。

このような排除的实践の一例として、ジョアキン・バルボーザ (Joaquim Barbosa, 1954-) ²⁰によるイタマラチーでの外交官採用試験への挑戦が挙げら

²⁰ 1954年に生まれた彼は、ブラジリア大学にて法学を修め、同大学において国家法の修士号を取得した。1976年から1979年にかけて、ブラジル外務省にて儀典官として勤務した経歴を有する。その後、リオ・デ・ジャネイロにおいて連邦検察官を務め、またリオ・デ・ジャネイロ

れる。元連邦最高裁判所長官であるバルボーザは、1976年から1979年にかけて外務省の儀典官として勤務し、在フィンランド・ブラジル大使館（ヘルシンキ）においても職務に従事した経歴を有する。しかしながら、1980年に外交官採用試験を受験した際、同省より人種的差別を受けたと彼自身が証言している。

バルボーザが受験した年、筆記試験には合格したものの、口頭試験で不合格となった。2013年に *O Globo* 紙に寄せたインタビューにおいて、彼は次のように語っている。「筆記試験には通ったが、面接で落とされた。面接とは、不適格とみなされた者を排除するために設けられていた制度だった。そう、私は差別を受けた。しかし、ある意味で恩恵でもあった」。そして彼は最終的に、外務省を「ブラジルにおいて最も差別的な機関の一つ」²¹と評している。

1980年にジョアキン・バルボーザが受験した試験に関して、ジャーナリストのラウロ・ジャルジン（Lauro Jardim）は、雑誌 *Veja* のコラムにおいて、彼の面接を担当した評価者の報告書に記載されていた評価基準を公にしている。心理適性検査における評価者の報告書には、同候補者が「否定的な自己像を抱いており、それは部分的には *colored* という彼の属性に起因している可能性がある」²²と記されていた。また、バルボーザの態度について「外交官としては鋭すぎる」と評価されており、さらに外見に関する評価も実施され、5人の外交官によって「普通」との判定が下されていた。

この報告書の記述は、バルボーザが自身の身体的特徴、特に肌の色に起因して選考から排除されたとする彼の訴えを裏付けるものである。“*Colored*”という英語表現は、かつて黒人を指す際に用いられていたが、今日では差別的と見なされており、選考面接が恣意的な排除の手段として機能していたこと、さらには評価者による人種的偏見を如実に示している。とりわけ、自己像の否定的評価を肌の色に結びつけるという記述は、その差別性を顕著に表している。

ブラジル外交史において初の黒人女性外交官の登用およびジョアキン・バルボーザをめぐる一連の出来事の数年後、黒人の外交官として新たに重要な人物が登場する。ベネディクト・フォンセカ・フィーリョ（Benedicto Fonseca Filho, 1963-）は、ブラジルの外交史上初の黒人のキャリア大使として、2010年に外交官として最高位にあたる一等書記官（Ministro de Primeira Classe）に昇進し、その先駆的存在としてイタマラチーの歴史に名を刻むこととなった。

興味深いことに、初の黒人女性外交官であるモニカ・カンポス・ヂ・メネゼスが逝去した1985年と同年に、ベネディクト・フォンセカ・フィーリョはイタマラチーにおいて外交官としてのキャリアを開始している。同氏は選抜試験において第2位で合格し、外交官としての道を歩み始めた。*Folha de São Paulo* 紙のインタビューにおいて、フォンセカ・フィーリョ大使は、当時の合格者名簿が発表された際、ブラジリアのある新聞が次のような見出しで自身の合格を

州立大学では公募により教授職に就いた。2003年には、ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルヴァ大統領政権下において連邦最高裁判所（STF）の判事に任命され、2012年には同裁判所初の黒人長官として全国的な注目を集めた。

²¹ “Itamaraty rebate Joaquim Barbosa e nega racismo”を参照されたい。取得先は、<https://www.cartacapital.com.br/politica/itamaraty-rebate-joaquim-barbosa-e-nega-racismo-6543/>（2021年10月2日取得）である。

²² “Como e quando o Itamaraty discriminou Joaquim Barbosa”を参照されたい。取得先は、<https://espaco-vital.jusbrasil.com.br/noticias/100637202/como-e-quando-o-itamaraty-discriminou-joaquim-barbosa>（2021年10月2日取得）である。

報道したことを語っている。それは、「女性と黒人がリオ・ブランコで首位合格」²³のである。

フォンセカ・フィーリョ大使が言及するこの報道の見出しは、外交官採用試験において非白人が合格した際、いかにメディアが注目を集めるかを改めて示している。イタマラチーにおいて人種が排除の装置として機能していたことを強調するような報道姿勢は、長らく外交官という職業に付随していた制度的人種主義的イメージを浮き彫りにするものである。同様の文脈において、フォンセカ・フィーリョはさらに、2004年に国連を初めて訪問した際、あるカリブ諸国出身の外交官が「ブラジルの代表団に黒人の外交官を見るのは初めてだ」²⁴と驚きを示したというエピソードも披露している。

ジョアキン・バルボーザ、モニカ・ヂ・メネゼス・カンポス、ベネディクト・フォンセカ・フィーリョの各事例は、イタマラチーにおける人種差別の存在についての議論を再燃させるものであるが、それらのみで問題が尽きるわけではない。実際、黒人の統合に関する制度的な議論が実質的に力を帯び始めたのは、20世紀末になってからである。このようにして、20世紀後半において支配的であった「メリトクラシーの言説は、特に1990年代半ば以降、再民主化の流れの中で代表性の言説と結びつくこととなった」(Gobo, 2018, p. 442)。

したがって、イタマラチーにおける黒人の参画は決して直線的あるいは自明なものではなかった。そして、イタマラチーをより民主的な機関とする試みは、実際には2002年²⁵にフェルナンド・エンリケ・カルドゾ政権下で導入されたリオ・ブランコ学院におけるアフーマティブ・アクション・プログラムの実施、さらに2011年の第一次選考段階²⁶における人種別クォータ制の導入により、ようやく明確な形を伴って現れるようになった。これにより、外務省はようやく、ブラジル社会のより広範な層を外交官人材に反映させる必要性に対する一定の関心を、具体的な政策として示すに至ったのである。

²³ 取得先は、<https://www1.folha.uol.com.br/fsp/mundo/ft0601201107.htm> (2021年10月2日取得)である。

²⁴ 取得先は、<https://blog.clippingcacd.com.br/cacd/o-primeiro-embaixador-negro-e-o-racismo-na-diplomacia/> (2021年10月2日取得)である

²⁵ アフーマティブ・アクション・プログラム (Programa de Ação Afirmativa, PAA) は、「外交官志望奨学金 (Bolsa-Prêmio de Vocação para a Diplomacia)」としても知られており、外交官を志望する黒人系ブラジル人の受験環境を拡充し、ブラジル外交官制度における多様性の促進を目的として、総額2万5千レアルの奨学金を提供している。この点については、イタマラチー自身も明言している。取得先は、<http://www.institutoriobranco.itamaraty.gov.br/programa-de-acao-afirmativa> (2021年5月8日取得)である。

²⁶ イタマラチーは、ブラジルにおいて公務員採用試験へのクォータ制を導入する法律 (第12.990号、2014年) に先立ち、2011年の時点で自らの選抜試験にクォータ制度を導入していた。取得先は、http://www.planalto.gov.br/ccivil_03/ato2011-2014/2014/lei/l12990.htm (2021年5月8日取得)である。

イタマラチーの壁を越えて：エジムンド・ススム・フジタの歩み

これまでに、ブラジル社会における日本人のイメージおよび 1970 年代ブラジルの歴史的文脈、さらには長年にわたり外交官として形成されてきた支配的な人物像について考察してきた。本章では、こうした背景を踏まえたうえで、エジムンド・ススム・フジタの人生の軌跡に焦点を当てる。

本章は、フジタの生い立ちに始まり、学生時代、国際的なキャリアの選択、そしてその後の外交官としての主要な職務経験に至るまで、その人生の全体像を明らかにすることを目的としており、読者がこの卓越した外交官の人物像により深く触れることができるよう構成されている。

太陽堂：フジタ家の営む書店

フジタ家がブラジルの地を踏んだのは、公式な日本人移民の開始から 26 年後にあたる 1934 年のことである。エジムンド・ススム・フジタの父、藤田芳郎（1920-2014）は、1920 年に福島県で出生し、14 歳のときにブラジルへと移住した。ブラジル到着後、彼はまずサンパウロ州のコーヒー農園で 1 年間労働に従事し、その後、家族とともにパラナ州北部のアサイ市（Assaí）に移り住み、1938 年まで同地に滞在した。

当時、ブラジルにおける日本人移民の数は、アメリカ合衆国を上回っており、移民たちは主にサンパウロ州に集中して居住していたため、日本人は同州における農業生産の労働力の重要な一翼を担っていた。

このような状況のもとで、当時の多くの日本人移民家庭と同様に、フジタ家も農業を主たる生計手段としていた。芳郎は 18 歳まで農業に従事していたが、その後、日本企業の輸入業者に勤務するためにサンパウロへと移住した。勤務の傍らで会計学を学び、1945 年には会計士の資格を取得している。

第二次世界大戦の勃発に伴い、藤田芳郎が勤務していた日本企業は業務の継続を余儀なく断念し、代替手段として彼は日本語の中古雑誌や書籍の販売を開始するに至った。

このような経緯を経て、1949 年、芳郎は起業家精神のもと、「太陽堂」をリベルダージ地区の発祥地であるコンデ・デ・サルゼダス通り（Rua Conde de Sarzedas）に創設した。同書店は、日本から輸入された書籍等を通じて在伯日本人移民が母国文化と直接触れることを可能にしたという点において、日本人コミュニティ内で極めて重要な役割を果たした。

太陽堂の創業過程は、当該時期における多くの日本人移民による事業展開のあり方と軌を一にしている。すなわち、当初は州内の地方部に定住していた移民たちが、次第にサンパウロ市内へと移動し、新たな商機を求めて都市部に根を下ろしていったという歴史的流れに重なるものである。

アルリンダ・ホシャ・ノゲイラ（Arlinda Rocha Nogueira, 1984）によれば、当時のサンパウロ市における人口集中は、都市の発展に伴って生じた需要に応えるべく、新たなビジネスの創出を不可避なものとしていた。このように、サ

ンパウロは「磁石のような役割を果たし、多くの日本人がその周辺に定住することとなった」(Nogueira, 1984, p. 176)。

こうした経済的展望のもと、移民たちはコンデ・デ・サルゼダス通り周辺に定住し、日本人社会に特化した多様な事業に従事した。具体的には、日本雑貨店、飲食店、旅館、ホテル、理髪店、薬局、さらには医療機関などを次々と開業し、都市における日系コミュニティの基盤を形成していったのである。

図⑨ 藤田芳郎に関する新聞記事



出典：新聞の切り抜き、2004年1月。エジモンド・ススム・フジタ個人コレクション

まさにこのような時代背景の中において、太陽堂はその姿を形作っていった。図9に示される新聞記事にも見られるように、太陽堂はブラジル国内における最も伝統的な日本語書店の一つと見なされており、日本人移民社会が日本からの原書資料への自由なアクセスを回復し、日本語の教育および学習の再活性化を志向していた時期において、際立った存在感を放っていた。

第二次世界大戦中、ゲトゥリオ・ヴァルガス政権は、すべてのコラム、社説、および主要記事について、ポルトガル語への翻訳と掲載を義務づけた。この時期、教育に対する厳格な監視体制が敷かれ、結果として日本語初等学校のうち219校が閉鎖されるに至った (Handa, 1987, p. 626)。この政策は、ブラジルにおける日本語との接触およびその発展に深刻な打撃を与えたものであり、日本語教育にとって極めて困難な時代を象徴するものであった。

特に、ブラジル政府は、アメリカ合衆国の取った措置の影響を受けつつ、ブラジル国内に居住していた枢軸国出身者に対して一連の抑圧的政策を実施した。たとえば1938年には、外国語による教育がブラジル全国で全面的に禁止され、日本語学校もその対象となった。さらに、外国語による報道機関も厳しく規制されることとなり、「大多数が日本語以外の言語を読み書きできなかった日本人社会に混乱を引き起こした」と指摘されている (Ninomiya, 2016)。

第二次世界大戦の終結後、1950年代から1960年代にかけては、日本からブラジルへの新たな移民の到来が再開され、日本語学校の再開および新設、さら

には日本語新聞の復刊が進められた (Handa, 1987)。この動きは、ブラジル国内における日本語読者の数の著しい増加をもたらした。

かかる状況下において、当時の日本語読者の多さを背景に、太陽堂はその専門的な市場における地位をいっそう強固なものとし、日本人社会において極めて重要な役割を果たすようになった。その結果、同書店は当時、月あたり 15 トンにも及ぶ印刷物を日本から輸入するに至ったのである。

アメリカ銀行 (Banco América)

1960 年から 1976 年にかけて、日本人移民およびその子孫によるブラジル社会への急速な上昇と、日本の経済的ブームを背景に、ブラジル国内にはおよそ 537 社の日本企業が進出していた。この時期、日本はブラジルにおける第三位の直接投資国となり、その投資額は約 29 億ドルに達した (Lesser, 2008, p. 48)。かかる状況において、日本市場のブラジル経済への参入は、日系ブラジル人社会にきわめて肯定的な影響を与えることとなった。

経済分野においては、1940 年にサンパウロにおいて「南米銀行 (Banco América do Sul)」が設立された。同銀行は、ブラジルにおける日本人社会において重要な役割を果たす金融機関として、1950 年代から 1960 年代にかけて高い評価と信頼を獲得した。

この銀行は、日本人移民史に名を残す宮坂国人 (1889-1977) によって創設されたものであり、当時の日本人およびその子孫が抱えていた経済的ニーズに応えるべく誕生したものである。

宮坂は、次のように述べている。「農場主および在住邦人一般の経済状況に関する直接の接触と個人的観察を通じて、彼らのために奉仕する銀行機関の必要性を痛感するに至った」 (Miyasaka, 1960, p. 21)。

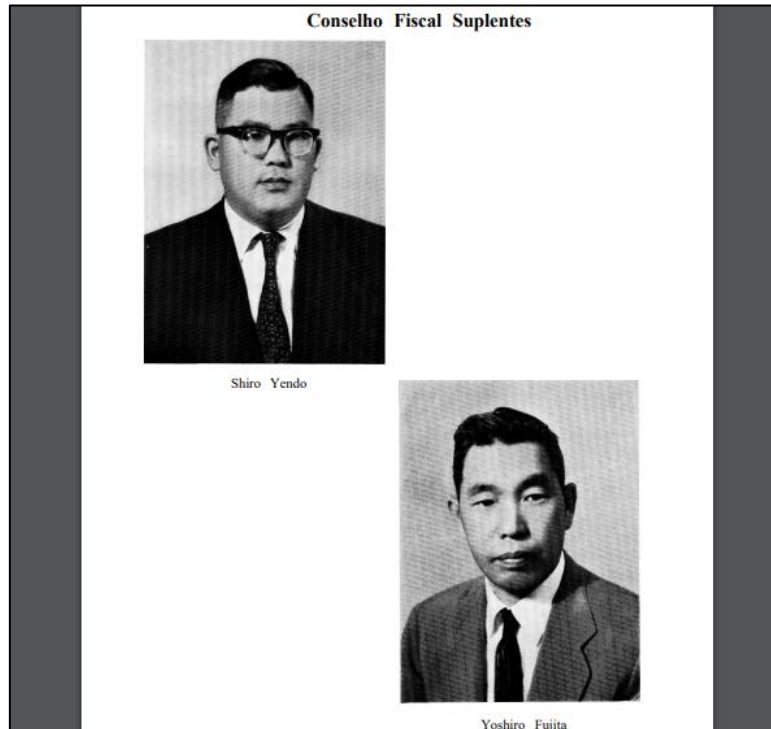
このようにして、日系移民に対する銀行信用の円滑化を目的とし、同銀行は戦後の日本の経済成長の歩みに呼応しつつ、サンパウロにおける重要な金融機関へと発展していったのである。

コチア産業組合 (Cooperativa Agrícola de Cotia, CAC)²⁷および南伯農業協同組合中央会 (Cooperativa Agrícola Sul-Brasil)²⁸と並び、南米銀行は、タニグチ (Taniguchi, 2015) が指摘するように、歴史的に見て日系ブラジル人による主要な事業の一つとして位置づけられている

²⁷ 1927 年に日本人移民によって設立されたコチア産業組合は、サンパウロ州における主要な農業協同組合の一つであり、1994 年にその活動を終了した。

²⁸ 日系移民によって設立された農業協同組合としては第二の規模を誇ったが、本組織も同様に 1994 年に活動を終えている。

図⑩ 1960 年における南米銀行監査役会の構成員



出典：BANCO AMÉRICA DO SUL S.A. *Breve história do Banco América do Sul S.A.* Tokyo: Gráfica Hossokawa, 1960.

南米銀行の構成員の中には、当該銀行の歴史において重要な役割を果たした日系社会の著名人が多数名を連ねているが、その中でも特に注目すべき人物の一人が、藤田芳郎である。藤田はサンパウロ市に居住し、日本製品を取り扱う書店として広く知られた「太陽堂」の創設者であり、同銀行の監査役会に補欠委員として参画していた人物である。彼の姿は、同行創立 20 周年を記念して 1960 年に刊行された書籍 *Breve história do Banco América do Sul S.A.*にも写真入りで記録されている。このように、太陽堂を通じて日系社会に貢献した業績に加え、藤田芳郎はブラジルにおける日系社会の主要な経済的取り組みの一つである南米銀行の歴史にも、その名を刻んだのである。

藤田芳郎と山室千代子の長男

藤田芳郎はブラジルで家庭を築き、長野県飯山市出身の山室千代子と結婚した。千代子の両親である山室茂次とくめは、1917 年 6 月 20 日に神戸港を出発し、長男・新太郎、姪・菊江、くめの妹である笹原ツルとともに河内丸に乗船し、同年 8 月 9 日にサントス港に到着した。こうして彼らはブラジルでの生活を始めた。

ブラジル到着の同月、山室一家はサンパウロ州の Vale do Ribeira 地域にあるレジストロ (Registro) へ向かい、農作業を始めた。レジストロでは、茂次とくめの間にさらに 3 人の娘が生まれた：真理子、百合子、そして千代子 (エジムンド・ススム・フジタの母) である。成人後、娘たちは夫とともに他の都市へ移住し、一方で茂次とくめは 1930 年代にアサイ (Assaí) 市で自営の商店を営んでいた。

日本から両親とともに移住した長男・新太郎はアサイ市に留まり、1971年6月に家族とともにサンパウロ州のレジストロへ転居。高齢となっていた両親も同行し、後に同地で永眠した。山室くめは1971年11月25日に逝去し、数年後の1975年7月28日には山室茂次も死去した²⁹。

山室茂次とくめの娘である千代子は、藤田芳郎と結婚し、3人の子をもうけた：エジムンド・ススム・フジタ、ロベルト・オサム・フジタ（Roberto Ossamu Fujita）、エニオ・ジュン・フジタ（Enio Jun Fujita）である。以下の写真（図11）は、1957年当時の藤田一家を写したものである。

図⑪ 1957年のフジタ家



キャプション：左から右へ、山室千代子、エニオ・ジュン・フジタ、藤田芳郎、ロベルト・オサム・フジタとエジムンド・ススム・フジタ。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

藤田芳郎の長男であるエジムンド・フジタは、1950年3月7日、サンパウロ市にて生まれ、幼少期をリベルダーヂ（Liberdade）地区で過ごした。その多くの時間を、父が経営する書店である太陽堂にて過ごし、日本語で書かれた数多くの書籍や雑誌に親しんだ。妻であるマリア・リガヤ・フジタは次のように述懐している、「彼のお父さんは、リベルダーヂにある太陽堂という書店を営んでいました。日本からたくさんの本を輸入していて、エジムンドは子どもの頃、その店で本やマンガなどをよく見ていたんです」³⁰。

子どもの頃に日本語を習得したエジムンド・フジタであったが、当時の多くの日系二世とは異なり、日本語学校には通わず、サンパウロ市内の名門校であるリセウ・パストゥール（Liceu Pasteur）学校で学んだ。ブラジルにおける日本人移民の第二世代においては、日本語学校に通い、日本語教育を受けると同時に、祖先の風習や伝統にも触れることが一般的であった。日系二世は概して、日本人コミュニティにおける価値観が優勢な環境で育つため、ブラジル社会の他の部分、たとえばブラジルの学校に通う際には、「ポルトガル語の習得、異

²⁹ 山室千代子の姪であるクララ・ミエ・ヤママロによって、2022年3月2日に提供された山室家の歴史に関する簡略な記録。

³⁰ 2017年4月24日に実施された、マリア・リガヤ・トレンティーノ・アベレダ・フジタ氏によるインタビュー。

なる教育制度への適応、さらには同級生や友人との関係構築」といった面で、統合に困難を抱えることが多かった (Cardoso, 1959, p. 104)。

しかしながら、若きエジムンド・フジタの幼少期はやや異なるものであった。二つの異なる環境での生活は、彼にとって特段の障害とはならず、幼少期より他文化への接触機会を得ていたのである。「少し違っていたのは、彼が常にブラジルの学校に通っていたことです。両親は日本文化だけに重点を置くのではなく、彼にさまざまな文化に触れる機会を与えたのだと思います」(2017 年 4 月 24 日インタビュー)。

リセウ・パストゥール校で学んでいた時期の幼少期において、フジタは外国語能力を養うとともに、ピアノ演奏や絵画など多様な活動に取り組み、また幼少期の友人たちと楽しい時を過ごしていた。レイナルド・ポリカール (Reynaldo Policar)³¹は 1959 年にエジムンド・フジタと知り合い、アウグスト・マツォーラ (Augusto Mazzola)³²と並んで、青年期における親しい友人の一人であった。彼らは皆、フジタの自宅近くに所在するクラブの会員であり、同クラブにおいて水泳や陸上競技を共に行っていた。

さらに、彼らの幼少期におけるもう一つの共通した活動は、互いの家を日替わりで訪れ、当初の目的は——少なくとも建前上は——勉強することであった。しかし、実際には長く会話を交わし、共に楽しい時間を過ごしていた。「私たちは成長する中で、勉強したり、あるいは勉強しているふりをしたりしながら、場所を変えて、私の家や彼の家で集まっていた。両者の家は比較的近かったのです」³³。

フジタとポリカールは、しばしば共に旅行をする仲であった。ポリカールの証言によれば、フジタには一風変わったあだ名がつけられたという。それは、フジタがポリカールの伯父宅を訪ねてリオ・デ・ジャネイロに滞在した際のことであった。「街を歩いていると、カリオカたちが立ち止まって彼を見ていた。当時、そこには日本人がほとんどおらず、いそこたちは彼を『珍しい生き物』と呼んでいた」。リオ・デ・ジャネイロ以外にも、二人はイタニャエン (Itanhaém) 市への旅行を常としていた。そうした際、フジタの両親は他の子どもたちと共にアパートに滞在し、長男であるフジタはしばしば車内 (アエロ・ウィリス・イタマラチー、Aero Willys Itamaraty) で寝泊まりしていた。ポリカールはその時の思い出を誇らしげに語り、「彼は、そのうち本物のイタマラチーに入ることになるとは夢にも思わなかっただろう」と付け加えている。

リセウ・パストゥール校において、フジタは英語とフランス語を学び、さらにピアノとリコーダーの演奏を習得し、当時ワルテル・ロウレンソン (Walter Lourenção)³⁴指揮の少年合唱団にも所属していた。フジタの幼少期の友人であるイライ・ジ・パウラ・ソウザ (Iraí de Paula Souza) によれば、合唱団の

³¹ レイナルド・ハリー・ポリカール (Reynaldo Hary Policar) は、エジムンド・ススム・フジタの幼少期の友人であった。

³² アウグスト・セザル・マツォーラ (Augusto Cesar Mazzola) は、フジタと初等教育課程で共に学んでいた時期の幼少期の友人であった。

³³ 本記述は、2020 年 3 月 6 日にレイナルド・ポリカールより提供された回想である。

³⁴ ワルテル・ロウレンソン (Walter Lourenção) はブラジルの指揮者であり、サンパウロ市立交響楽団およびサンパウロ州交響楽団、さらにリオ・デ・ジャネイロの各オーケストラにおいて指揮を務めた経歴を有する。また、サンパウロ美術館 (MASP) 室内管弦楽団の創設者であり、サンパウロ市のリセウ・パストゥール校における少年合唱団の指揮も担った人物である。

活動は週三回、二時間ずつ行われており、英語・フランス語・イタリア語・ラテン語による多様なレパートリーを歌っていたという³⁵。「彼は非常に確かな音楽的素養を持っていた。幼少期にピアノを学び、合唱団の頃には歌うだけでなく、バロック・フルートであるリコーダーも演奏していた」(2017年4月25日インタビュー)。

マリア・リガヤは、エジムンド・フジタが幼少期に受けた高度な教養教育を、その母である山室千代子の影響によるものと述べている。

お母様はとても教養のある方で、本をよく読み、[……] いつも教育や人前に出ること、文化、知識の重要性について話していたように思います。そして、幼いころからピアノを習わせたり、外国語を学ばせたりと、あらゆる機会を与えていたのは母親であったと思います(2017年4月24日インタビューより)。

山室千代子は、息子の教育において、学習や音楽との接触の機会を与えるだけでなく、自らもピアノを学び、エジムンド・フジタのレッスンに付き添いながら共に学び、彼を助けることに努めていた。

フジタは、特にクラシック音楽を好んだが、それだけでなく、哲学や美術にも大きな関心を寄せていた。幼少期の友人であるアウグスト・セーザル・マッツォーラの証言によれば、フジタは学業期間を通じて常に非常に熱心な学生であり、全ての教科において優れた成績を収めていたという³⁶。

時を経るにつれ、若きフジタは次第に人文科学分野への嗜好を自覚するようになり、リセウ・パストゥール校での進路選択において、友人とは異なる道を歩むことを決意した。同校のカリキュラムでは、生徒は理科系か古典系のいずれかを選択する必要があるが、エジムンド・フジタは古典系を選び、そこでフランス語の学習を深化させるとともに、アウグスト・マッツォーラによれば「より自らの思想を表現することができた」(2017年4月24日インタビュー)という。また、高等学校においては、サン・ルイス学校(Colégio São Luís)にも在籍し、1967年に同校で中等教育を修了している。

フジタは人文学分野に強い関心を示していたものの、他の科目においても常に優れた成績を収めていた。マッツォーラは次のように述べている。「エジムンドはとても聡明でした。私たちも勉強はしましたが、彼は授業中、私たち以上に集中して聞いており、すべてを理解していました。そして、私たちの助けにもなってくれました」(2017年4月24日インタビュー)。マッツォーラによれば、フジタは日本人の子孫は非常に賢いという一般的な固定観念から外れることはなく、むしろ彼との長年の友情を通じて、その印象は強化されたという。

この点に関して注目すべきは、ブラジルにおいては歴史的に、人種が個人の資質を決定づける要因であるという観念が存在してきたことである。すなわち、皮膚の色や身体的特徴に基づき、道徳的・知的・心理的特質が遺伝的に伝達されるとみなされてきた(Guimarães, 2003)。この文脈の中で、ブラジルの日系

³⁵ 本記録は、2017年4月25日に実施されたイライ・ジ・パウラ・ソウザへのインタビューに基づく。ソウザはフジタの幼少期からの友人であり、リセウ・パストゥール校での在学期間中に知り合った。両者は、同校でワルテル・ロウレンソン指揮の少年合唱団に共に参加していた。

³⁶ 本記録は、2017年4月24日に実施されたアウグスト・セーザル・マッツォーラへのインタビューに基づく。

人社会は一定のステレオタイプと結びつけられてきた。特に第二次世界大戦後、移民一世の子どもたちが社会的地位を向上させる過程で、「教育の重視、——家族全員による支援、規律、努力を含む——が、ブラジルにおける日系人子弟の肯定的イメージ形成に決定的に寄与したとされる。その結果、彼らは『優等生』や『知性』といったイメージと結びつけられるようになった」(Konigame, 2011, p. 55)。

このように、日本人の子孫は真面目で勉学に励む人物であるという観念は、フジタの幼少期の友人たちへのインタビューの中にも見出される。そしてこの評価は、イライ・ジ・パウラ・ソウザがフジタについて語る際にも再び示されている。彼女はフジタを「常に学問を非常に重んじる人物であった」と述べている(2017年4月25日インタビュー)。

また、友人たちの証言によれば、知的能力の高さに加え、フジタは幼少期から発言すべき時とそうでない時をよく心得ていた人物であったという。アウグスト・マツォーラは、彼が授業中は比較的静かにしていたものの、内向的というわけではなく、会話を好む性格だったと述べている。「話すことは多く、表現力もあった。決して無口な人ではなかった。当然、授業中はきちんと集中していた。私たちがふざけている間も、彼はしっかり授業に注意を払っていた」(2017年4月24日インタビュー)。

このような性格から、一部の人々はフジタを内気だと感じた可能性がある。しかし、友人たちの証言によれば、「内気」というよりも「控えめ」と表現する方が適切であろう。すなわち、フジタは自らが発言すべき時と慎むべき時とを的確に判断していたのである。これに関して、イライ・ジ・パウラ・ソウザは次のように述べている、「[エジムンド・ススム・フジタは]若い頃から他者への配慮に富み、社会的な均衡感覚に優れた人物であった。[……]礼儀正しく、その知性は実に輝かしいものであった」(2017年4月25日インタビュー)。

なお、フジタは在学していた学校において唯一のアジア系子孫であった。リセウ・パストゥール校の同級生には、母親が日本人で父親がドイツ人という女子生徒が一人いたが、両親ともにアジア系である生徒はフジタのほかにはいなかった。このため、彼は学校という多くの時間を過ごす環境において、日本人子孫との接触はほとんどなく、非日系の同級生たちとも完全に打ち解けていた。

この点に関して、友人に日本的な文化的表現が見られたかどうかを問われたアウグスト・マツォーラは、フジタは常にその点において控えめであったと述べている。そして実際には、彼の「日本的な側面」は、母親である山室千代子と共に過ごし、日本語を用い、日本文化の要素に触れている場面において認められたという。

日本語能力に関して、エジムンド・フジタは幼少期に個人教授を受けていた。マリア・リガヤによれば、「彼は日本語を正式に学んでいたが、通っていたのは常にブラジルの学校であった。日本語の先生がいて、その先生は現在も存命である。カワムラ先生である」(2017年4月24日インタビュー)。学校においてフジタは英語とフランス語を学んでいたが、家庭環境では日本語の使用を継続していた。

この家庭内における日本語使用の継承という点に関して注目すべきは、1950年代当時、ブラジル在住の日本人移民の過半数が、家庭内のコミュニケーションにおいて日本語を選択していた事実である。日本人植民地国勢調査委員会

(1964)³⁷によれば、1958 年には農村地域に居住する移民の 75%が家庭内の主要言語として日本語を保持していた。

さらに、都市部においても大多数、すなわち約 59%の移民が、家庭内の公用語として日本語を採用していた。したがって、当時の日本人コミュニティにおける家庭内日本語使用の優勢は、以下の表に明示される通りである。

表② 1958 年における日本人移民およびその子孫の家庭内使用言語（農村地域に関する数値）

世代	総計	日本語	日本語とポルトガル語	ポルトガル語
移民	27.610	20.847	5.760	1.003
子孫	2.861	1.300	1.010	551

出典：Comissão de Recenseamento da Colônia Japonesa, 表 225, p. 302, 1964.

表③ 1958 年における日本人移民およびその子孫の家庭内使用言語（都市地域に関する数値）

世代	総計	日本語	日本語とポルトガル語	ポルトガル語
移民	22.841	13.568	7.465	1.808
子孫	4.210	1.273	1.690	1.242

出典：Comissão de Recenseamento da Colônia Japonesa, 表 225, p. 302, 1964.

上記のデータ、とりわけ都市部に居住していた日本人移民に関する数値——これは藤田家の場合にも該当する——を踏まえると、フジタの両親は、日本文化に限らず複数の文化に触れる機会を息子に与えた一方で、日本人移民社会において当時一般的であった価値観や行動様式、例えば家庭内における日本語での意思疎通の維持といった点を保持していたことがうかがえる。

オーグスト・マッソーラによれば、フジタの母は常に息子と日本語で会話しており、彼女のポルトガル語能力の程度については全く知らないという。さらに、彼女は非常に感じがよく親しみやすい人物であったが、「常に少し距離を置く、日本人女性らしい方であった。彼女がどの程度ポルトガル語を話せたのかは全く分からない。なぜなら、私たちとポルトガル語で話したことは一度もなく、エジメンドとは常に日本語で会話していたからだ」（2017 年 4 月 24 日インタビュー）と述べている。

また、日本的な活動の実践に関して、マッソーラは友人宅での最も印象的な体験の一つを回想している。ある日、フジタは幼なじみのカルロス・ケーラー

³⁷ 日本人植民地国勢調査委員会（Comissão de Recenseamento da Colônia Japonesa）は、1958 年に、日本からブラジルへの移住の動向を収集・記録することを目的として設立された。同委員会は、1958 年に全国規模の国勢調査を実施し、移民およびその子孫に関する多様な数量的情報を収集した。本調査はまた、1908 年の第一回移民船到着以来 50 年間にわたり、ブラジル国内の日本人社会が経験した変容についても分析を行っている（Suzuki, 1969）。

(Carlos Köhler) とマッゾーラに対し、母が茶道の稽古をしており、息子の友人たちを相手にその実演を行いたいと考えていると告げた。

ある日、これはよく覚えている、彼が私たちに言ったんだ。「あのね、母が茶道の練習をしているんだ。講習を受けていて、実際にやってみないといけないから、今日は僕たちが茶をいただく番だよ」ってね。そこで私たちは、離れにある特別な部屋に行った。そこは普段は卓球をする広い部屋で、下が開放的になっていて「……」畳が敷かれていて、我々凡人はそこに正座して座ったんだ。すると、彼女はきちんとした和服姿で現れ、正式な茶道の作法に則って点前を行い、私たちに茶を振る舞ってくれた。それは私にとって、衝撃的なほど印象深い体験だった (2017 年 4 月 24 日インタビュー)。

藤田家の住宅は、エジムンド・フジタにとって、その「日本的側面」が最も色濃く表出する場であった。すなわち、リセウ・パストゥール校における西洋的な文化・芸術活動から離れたとき、彼は家庭という環境において日本語を使用し、祖先の伝統に触れる経験を重ねていたのである。

したがって、フジタは、白人ブラジル人エリート層の教育モデルと見なされる学校環境の中で「ブラジル化」された教育を受けつつも、同時代の日本人移民が伝えてきた価値観や伝統とも頻繁に接触していたことになる。Okamoto (2019, p. 88) が指摘するように、彼の生活には全く性質の異なる二つの環境が併存しており、その結果、彼のアイデンティティは複数の文化が結び合わされたものとなった。これは、デニ・キュシュ (Denys Cuche, 1999) が「シンクレティックなアイデンティティ」と呼ぶものであり、「一人の人間に二つのアイデンティティが加算されること」(Cuche, 1999, p. 193) を意味する。

このようなシンクレティックなアイデンティティは、フジタが生涯の様々な局面において、二つの異なる文化的環境を極めて自然に行き来することを可能にし、外交官としての経歴を歩むうえでも大きな助けとなった。フジタのアイデンティティがシンクレティックなものであったか、すなわち自らを「一部に日本的価値をもつブラジル人」と認識していたのかという問いに対し、イライ・ジ・パウラ・ソウザは、フジタが常に自らの日本的出自を意識していたと答えている。さらに彼女は次のように付け加えている、「[……] 彼は常に、日本的な出自を肯定的なものとして捉えていたと思うし、それは彼の人格の中に非常に強く根付いている」(2017 年 4 月 25 日インタビュー)。

さらに、イライ・ジ・パウラ・ソウザは、エジムンド・フジタのこうした特性が外交官としての彼の人生に大きく寄与したと考えている。すなわち、幼少期から異なる文化に触れる機会を有していたことにより、彼は赴任先のいかなる土地においても容易に根を下ろすことができたのである。

このようなフジタの特性は、彼が国際関係の分野に強い親和性を有していたことをも示唆している。アウグスト・マッソーラによれば、フジタは自分たち三人の友人関係において、その祖先的背景を踏まえた愛称をつけていたという。すなわち、フジタは自らの小さなグループを「枢軸」と呼び、「イタリアは僕 (マッソーラ)、カーロス・ケーラーはドイツ、そして彼 (フジタ) は日本」と述べていた (2017 年 4 月 24 日インタビュー)。友人の目から見ても、幼少期のフジタはすでに国際政治や歴史に関わる事柄に強い関心を抱いていたのである。マッソーラの証言によれば、「枢軸」は毎日集まり、学習や卓球

に興じ、さらにはフジタの父が書店である太陽堂に所蔵していたビートルズのレコードを聴いて過ごしたという。その際、山室千代子はいつも少年たちのために盛大な軽食を用意していた。

以上のように、フジタの生い立ちには、同時代の在ブラジル日本人二世の多くとは異なる側面が認められる。おそらくこうした教育、経験、学習活動のすべてが、彼の職業選択に影響を及ぼしたものと考えられる。

幼少期より、フジタは多様な文化に接する機会を数多く有していた。フランス系学校での教育を通じて外部文化に触れる一方、家庭では日本語を学び、さらに父が経営するリベルダーヂ地区の書店において日本の書籍を読むことで、日本文化のみならず多文化的な素養を培ったのである。こうした多文化的教養は、藤田に幼少のころから外交官的資質を備えさせる要因となった。

職業選択

当時の日本人社会が経験していた都市化の流れに沿って、フジタは二世として、都市部における職業を志向する傾向を有していた。この傾向は、一般的に大学教育を通じて形成されるものであり、ルーチ・カルドーゾ（Ruth Cardoso, 1995）によれば、職業選択においては農村的出自よりも都市的出自の方が強く影響を及ぼすとされる。すなわち、「移民世代とその子孫との間には相違が存在し、ブラジル生まれの世代においては都市化志向がより顕著に見られる」（Cardoso, 1995, p. 70）のである。

このような文脈のもと、フジタは若年期より人文学分野に関心を示していた。政治、歴史、哲学が彼の最も強い関心領域であり、リセウ・パストゥール校における学業では古典系コースを選択した。さらに、彼はサンパウロ大学（USP）法学部およびサンパウロ・カトリック大学（PUC-SP）哲学科の双方の入学試験を受験し、いずれにも合格した。特に USP の入学試験においては合格者名簿の第 8 位に名を連ね（図 12）、これにより幼少期からの友人たちの間で「優秀な学生」としての評価を一層確固たるものとした。

図⑫ 1968 年サンパウロ大学法学部合格者リスト

APROVADOS NA FACULDADE DE DIREITO ESTÃO AQUI			
UNIVERSIDADE DE SÃO PAULO FACULDADE DE DIREITO			
Lista dos aprovados nos vestibulares			
1 Roberto Zacris	89 Gerda Schoder	254 Antonio Carlos Fernandes	409 Aníbal de A.
2 Manoel Joaquim Pereira dos Santos	90 Ieda Verra	255 Antonio Lebra	410 Aníbal
3 Maria Helena de Barros Pimentel	91 Lucia Rinaldi	256 Cleide Perero Previtalli	411 Aníbal
4 José de Oliveira Costa	92 Marcia Dancilene	257 Eduardo Miura	412 Cecília
5 Eliane Hayn de Camargo	93 Maria Cecilia Leonil	258 Irajá de Souza	413 Dayr
6 Reynaldo Farah	94 Neide Montesinos Escrivano	259 Julio Cesar Cardoso	414 Gley
7 Hugo Nigro Mazzilli	95 Paulo Sergio Miguel Urbano	260 Maria Carmen Espirito Santo	415 José
8 Eduardo Sussumu Fujita	96 Celso de Souza Azzi	261 Olga Misae Okuhara	416 José
9 Frederico Farias da Miranda	97 Custódio Martins da Silva	262 Renise Lúcia Fontana	417 Kili
10 Nirce do Amaral Marre	98 Ellen de Castro Quintanilha	263 Yara Fonseca de Andrade	418 Lúcia
11 Luiz Fernando Ferraz Slez	99 Estenor Pinto Santos	264 Carlos Alberto Rêlaye Carvalho	419 Lúcia
12 Sylvia Regina de Carvalho	100 Harry Nelson Bauer	265 Carmem Antunes	420 Nela
	101 Lúcia Lindquer Xavier	266 Emilia Carreira Dix	421 Nela
	102 Luiz Gonzales Filho	267 Fernando Antonio Ferreira	422 Nela
	103 Molisés Vilaca	268 Francisco Eduardo de Vasconcelos Fiomeno	423 Os
	104 Pedro Abrahão Filho	269 Gilberto Miezzi	424 Ra
	105 Pedro Aparecido Lino Gonçalves	270 Helio Eduardo Castilho de Toledo da Costa Mano	425 Sa
	106 Sonia Helena Pupo Helmeisler Novais		426 Sa
			427 W

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

フジタは最終的にサンパウロ大学法学部への進学を選択した。彼自身、「法学は多くの分野に通じる学問であり興味深い」（2017 年 4 月 25 日インタビュー

一) ³⁸と述べており、さまざまな知識領域に触れる機会を提供するとともに、他の専攻と比較して職業選択の幅を広げる利点があると考えていた。

ここで注目すべきは、フジタが大学進学によって達成したのは、単に本人および家族の個人的目標にとどまらず、当時ブラジルの日系移民社会において進行していた社会的上昇運動の一環でもあった点である。カルドーズが指摘するように、「一世はすでに農業労働者から都市部の土地所有者へと移行し、家族の社会的上昇における役割を果たした。移民の子である二世には、大学教育を含む専門職教育を通じて、移住の最終的目的を達成することが求められる」のである (Cardoso, 1995, p. 147)。フジタの両親はすでに農業従事者ではなく、サンパウロ市内で太陽堂という書店を経営していた。そのため、藤田家が子どもたちの教育に社会的上昇の希望を託していたことは自然な成り行きであった。

また、父・藤田芳郎は、長男であるフジタの進学先の選択に一定の影響を及ぼしていた。芳郎は当時、家業の発展を含む家族の期待に応えうる職業に息子が就くことを望んでおり、とりわけ法学部進学を強く勧めた。リガヤによれば、芳郎は「[……] せめて家族の中に弁護士は一人必要だよな。私たちは移民だし、ブラジル社会、とりわけ法律の部分を理解するのはとても難しいからね」(2018年9月22日インタビュー)と語っていたという。

フジタの父は、家族内に弁護士が必要であると主張し、長男である息子がその後継者となることを強く望んでいた。父からの期待と圧力は極めて大きく、長男エジムンド・フジタには家業を継承する責務が課せられていた。フジタは法学部在学中、両親の意向により日本へ派遣され、日本の取引先との面識を得るとともに、輸入業務の過程をより深く理解することを求められた。

長男が家業を継ぐという期待は、ブラジルに移住した日本人移民が持ち込み、在ブラジル日本人社会において色濃く残っていた日本的家族観によって説明することができる。カルドーズが述べるように、「伝統的に、日本の家族は父系的な血統原理に基づく階層的な制度として構成され、男子の長子が相続権および家督継承権を有する」のである (Cardoso, 1995, p. 83)。

法学の道を選ぶことは、藤田家にとって教育を通じた社会的上昇の達成を意味すると同時に、長男の法的知識を活用してブラジルの法律制度の理解や事業経営の改善に資する可能性をもっていた。法曹界でのキャリアは家族内で高く評価されるものであり、そのため両親はエジムンド・フジタの進路に反対することはなかった。さらに、この選択はフジタ自身の将来的な志向を妨げるものではなく、むしろ国際的な舞台での活動に繋がる道を開くものであった。したがって、法学部進学の見断は、藤田家長男の将来にとって重要かつ極めて好都合な転機であったといえる。

サマースクール

学業生活において、エジムンド・フジタは 1972 年、米国コネチカット州においてウィスコンシン大学が主催するサマースクールに参加する機会を得た。本プログラムは国際関係をテーマとするもので、Institute of World Affairs によって運営されており、フジタは奨学金を得て参加することとなった。この奨

³⁸ エジムンド・ススム・フジタとの最後のインタビュー (2016 年 3 月 6 日)。

学金はフジタが法学部在学中に獲得したものであり、同サマースクールの期間中に、彼は後に妻となるマリア・リガヤと出会った。

1971年、私たちが法学部4年次に在籍していた際、国際法学科は米国の大学における夏期講習への唯一の奨学金枠をかけた選考を実施した。私たち4年生の複数名が応募し、その結果、エジムンドを含む5名が同点首位となった。なお、フジタは当該学科の指導助手を務めていた。最終的に、残りの4名は全会一致で辞退し、フジタを最終候補として送り出すことを決定した。かくしてフジタは渡米し、そして何より重要なことに、そこでマリア・リガヤとの出会いを果たしたのである。³⁹

図⑬ 1972年 *Institute of World Affairs* コース参加者



キャプション：エジムンド・フジタは前列左から8番目に立っている。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

本コースの目的は、若年層におけるリーダーシップおよび国際理解の涵養にあった。そのため、取り上げられたテーマはきわめて多岐にわたり、紛争解決、比較的な世界的発展、地域主義と地球規模の政治、さらには平和の普及および世界的発展の展望など、内容的にも豊であった。

フィールドワークもまた非常に有意義であった。参加学生は国際連合総会を訪問し、当時の米国国連大使ジョージ・ハーバート・ウォーカー・ブッシュ（George Herbert Walker Bush, 1924-2018）による会議に出席する機会を得た。さらに、ボストン交響楽団の小澤征爾指揮による演奏会、ブロードウェイでの演劇、ワシントン D.C.訪問時の連邦議会およびホワイトハウス見学など、多様な文化的・政治的体験が組み込まれていた。

このサマースクールは、エジムンド・フジタにとって外交官という進路選択を再確認する重要な契機となった。全25か国から34名の学生が集い、6週間にわたり国際関係に関する諸問題に取り組んだのである。この環境下で、フジタは多様な文化との交流を通じて世界的視野を広げ、数週間にわたり国外における自国の代表としての役割を体験することができた。それは、国際的な場に

³⁹ 2020年3月4日、サンパウロ大学法学部でフジタの同僚だったフェルナンド・ジ・メロ・バヘット（Fernando de Mello Barreto）大使による報告。

において自国文化を発信・促進するという職務を、実地において経験する貴重な機会であった。

東京大学

1972年、米国でのサマースクール修了後に帰国したエジムンド・フジタは、学業を継続し、翌1973年にサンパウロ大学法学部を卒業した。その後、日本政府からの奨学金を受け、東京大学法学政治学研究科に留学することとなった。この奨学金は選考試験を経て授与されたものであり、応募には複数の条件が課され、その一つとして推薦状の提出が求められた。フジタは、サンパウロに所在する在日日本国総領事館に対し、斉藤広志⁴⁰によって執筆された推薦状を提出した。斉藤は同書簡において、候補者およびその家族をよく知っている旨を述べ、強く推薦している。

特に注目すべきは、斉藤がフジタの将来的志望に触れた一節である。すなわち、フジタは当時、日系人としては未だ誰一人として入省を果たしていなかったブラジル外務省への就職を明確な目標として掲げていたのである。

藤田君については幼少の頃よりその家庭や人となりを知っており、その稀にみる俊敏な才能に加えて、同君が極めて信誼に厚い性格の持主であることは必ずや将来有為な人材となることを保証するものと信じます。また同君は意志が強固で不屈の精神の持主であります。[……] 藤田君はまだ日系人が誰も志望し、或いは資格を獲得したことのないブラジル外務者のキャリアを目指しています。それも思いつきや単なる野心ではなく、すでに大学進学と共にそのことを計画し、慎重に準備を重ねてきました。同君がすでに英語、フランス語に習熟の上、日本語の上達に努力していることもその現れであります（斉藤, 1972, n.p.）。

日本留学期間中、フジタは外交官としての進路に対する関心を改めて強くしたものと推察される。東京大学における履修科目には日本外交史が含まれており、同国に関する知識を一層深化させるとともに、外交官という職業について理解を深める好機となった。滞在中には、同じく日本政府奨学金を受給していた二宮正人⁴¹教授と親交を深める機会にも恵まれた。

⁴⁰ 斉藤広志（1919-1983）は、社会学者であり、ブラジルにおける日本人移民研究の専門家であった。

⁴¹ 1948年に日本に生まれ、5歳の時に家族とともにブラジルへ移住した。1971年にサンパウロ大学法学部を卒業し、1981年には東京大学において同分野の博士号を取得した。現在、二宮正人はサンパウロ大学法学部教授であり、海外労働者情報援護センター（CIATE）会長を務めている。日本研究分野において多数の著作を有し、とりわけブラジルにおける日本移民に関する諸問題、特に日本国内におけるブラジル人労働者をめぐる諸課題の解決において重要な役割を果たしてきた。また、二宮は宣誓翻訳人でもあり、これまでに幾度も、日本政府関係者や日本皇室関係者がブラジルを訪問した際の通訳として活動してきた。

図⑭ 1973 年、東京大学にて



キャプション：左から右へ、二宮正人とエジムンド・フジタ
出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

当時、両名は、藤田の東京大学における指導教員でもあった北岡伸一（現・国際協力機構〔JICA〕理事長）と接点を持つこととなった。北岡は、両名との出会いについて次のように述懐している。

私が初めてブラジルと接点を持ったのは、40 年以上前の 1973 年、東京大学大学院在学中のことである。ある日、教授から呼び出され、ブラジルからの二人の奨学生と同僚になるよう依頼された。その二人とは、外交官のフジタさん（エジムンド・ススム・フジタ氏）と、当時若き研究者であった二宮さん（二宮正人博士）であった。私はフジタさんの日本語指導を担当することとなった。彼らは、日本に関する専門家を養成することを目的としてブラジル政府から派遣された若者たちであった（北岡, 2019, p. 6）。⁴²

この北岡の発言は、2019 年 11 月 4 日に東京大学法学部大講堂にて執り行われた「フジタ・ニノミヤ講座」開設記念式典における祝辞から引用したものである。同チェアは、JICA および三菱 UFJ フィナンシャル・グループ（MUFG）の支援を受け、サンパウロ大学法学部国際法・比較法学科に設置されたものであり、ブラジルと日本の交流促進を目的として、日本法に関する公開講座や講演会の開催、さらには両国の大学間における学生交流や共同研究の推進を目的としている。

サンパウロ大学における「フジタ・ニノミヤ講座」の創設についてであるが、これは二宮正人教授および外交官エジムンド・フジタを顕彰するものであり、二宮（2019）は次のように述べている。

フジタ氏、そしてその他多くの人物——日系人であるか否かを問わず——が日本文化への関心を生きた形で維持するために努力してきた。その歩みを継

⁴² 「フジタ・ニノミヤ講座」開設記念講演（2019 年 11 月 4 日、サンパウロ大学にて開催）。取得先は、https://www.jica.go.jp/brazil/portuguese/office/activities/c8h0vm0000f5z5e9-att/brazil06_01.pdf（2021 年 6 月 5 日取得）である。

ぐことのできる人材の養成を確保する必要があると私は信じている。それは法学部に限らず、日系人の強い存在感を有するサンパウロ大学全体においても同様である。⁴³

フジタは東京大学に研究員として在籍していた期間、日本に関する学術的知見を一層深化させた。この経験は、その後イタマラチーにおけるアジア関連部局での勤務において重要な助けとなった。また、この時期はフジタにとって、日本の外交政策を学ぶ機会であると同時に、日本研究の専門家としての形成に資する重要な過程であった。

「ブラジルに外交官として仕えたい」

フジタが外交官になることを決意した正確な時期を特定することは困難である。しかし、その決意を予兆させるいくつかの契機を彼の歩みに見出すことは可能である。2016 年に行われたインタビューにおいて⁴⁴、フジタは大学在学中に国際法分野への強い関心を抱くようになり、とりわけ 1972 年に米国で開催されたサマーコースへの参加を契機として、外交官という職業に強い興味を抱くようになったことを語っている。

さらに、当該サマーコースに応募する際、フジタは、参加の動機および目的を明らかにする選考過程を経ていた。マリア・リガヤ・フジタは自身の所蔵資料の中に、その応募書類の写しを保存しており、その中でフジタは、ブラジル外交官になる意志を有し、この交流プログラムがその目的達成に資するものであると記している。当該資料（図 15）は、当時の若きフジタの職業的志向を理解する上でも貴重な一次資料となっている。

図⑮ *Institute of World Affairs* 入会申込書（1974）

EDUCATION				
Name of institution attending a program		University of São Paulo Law School		
Major field of study		Law		
Vocational objective		Diplomatic Career		
Who suggested you apply? Mr. Thomas Banay Felsberg				
Names of institutions attended:				
Name	Address	Date attended	Degree	
Liceu Pasteur	São Paulo Brasil	from 1957 to 1960	Elementary	
Liceu Pasteur	São Paulo Brasil	from 1961 to 1966	High School	
Colégio São Luís	São Paulo Brasil	1967	High School	

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

フェルナンド・ジ・メロ・バヘットは、法学部時代のフジタの同級生であるが、1972 年の卒業後、フジタが東京に留学していた時期、彼自身はニューヨークの国際法律事務所ベーカー＆マッケンジーで研修生として採用されたという。事務所の共同経営者らは、バヘットに対し、日本語に堪能な日系ブラジル人弁護士で、同事務所で勤務可能な人物を知っているか尋ねた。

⁴³ 取得先は、<https://jornal.usp.br/institucional/faculdade-de-direito-inaugura-nova-catedra-fujita-ninomiya/>（2021 年 6 月 5 日取得）である。

⁴⁴ 2016 年 3 月 6 日に行われたフジタの最後のインタビューである。

私はエジムンドのことを話しましたが、その際、彼は日本から帰国後にブラジル外交官として奉職することを望んでいると付け加えました。それにもかかわらず、共同経営者らは面接を強く希望しました。日本語に堪能なアメリカ人弁護士が東京大学でエジムンドに面接を行い、大変好印象を受けたものの、ニューヨークの共同経営者らに対し、やはり彼は外交官志望を譲らない旨を伝えました（強調は引用者）。

日本での課程修了後、帰国したフジタは、外務省試験を待つ間、名門デマレスト・アルメイダ（Demarest Almeida）法律事務所に勤務した。彼の友人や家族は、法曹界での継続的なキャリアを、経済的により有利であるという理由から勧めた。バヘットも再び国際法律事務所ベーカー&マッケンジーへの入所を持ちかけ、さらにサンパウロ市イジェノーポリス（Higienópolis）地区に所在する同事務所の洗練されたオフィスを案内するなどして誘った。しかし、フジタは自身の職業的決意に揺らぎを見せなかった。「私の説得は全く効果がなく、彼は外交官としての道に進む意志を改めて強調しました」。

エジムンド・フジタの両親にとって、外交官という職は、経済的側面においては法曹界ほどの見返りがないように映っていた。それにもかかわらず、リガヤの言によれば、フジタはこう述べていたという。「もし私が金持ちになりたいなら、弁護士としての道を選ぶだろう。でも私は金持ちになりたいわけじゃない。それは私の人生の目的ではない。[……] **私は外交官としてブラジルに仕えたいのだ**」（2018年9月22日インタビュー、強調は引用者）。

外交官としての職業選択への強い志向は、後述するように、フジタ自身のアイデンティティを確立する一形態としても捉えることができる。リガヤによれば、フジタは自身の真のアイデンティティに関して、しばしば彼女と苦悩を共有していたという。例えば、フジタは「私の世代は少し迷っているように感じる。私は自分が東洋の文化を持っていることを知っているが、西洋的な部分も非常に強い。私はその中間にいると感じる」と述べたことがある（2018年9月22日インタビュー）。

これらのフジタの問いかけは、彼が当時の他の日系人と同様に、状況に応じて「よりブラジル人」あるいは「より日本人」と感じていたことを示している。このような状況は、Lesser（2001）が説明するハイフン化されたアイデンティティに見られるものであり、日系ブラジル人にも適用可能である。ハイフン化されたアイデンティティは、居場所や状況に応じて、個人の文化的選択の中に複数の文化的実践を顕在化させ、主張させる契機となる。

この文脈において、「日系」と「ブラジル人」という語を結ぶハイフンが両者の間に位置するように、フジタもまた、日本文化とブラジル文化のあいだに自らを位置づけていた。したがって、外交官という職業の選択は、彼に両文化を往還する多様な機会を与えることとなったが、この往還の可能性を彼が疑問視することはなかった。なぜなら、文化間の移動は外交官の職務において日常的な行為だからである。

リガヤは、フジタの苦悩が解消されたことについて、次のように述べている。「あの頃、私たちがやり取りしていたときには、彼にはそうした苦悩があったが、一度イタマラチーに入ってから、彼が自分の存在や生き方に関する不安や苦悩を語ることは二度となかった」（2018年9月22日インタビュー）。

結婚

エジモンド・フジタの生涯を語るにあたり、外交官としての彼の歩みにおいて最も重要な人物の一人であった妻、マリア・リガヤ・トレンティーノ・アベレダ・フジタについて言及しないわけにはいかない。大学時代からフジタの傍らにあったリガヤは、その後の外交官としての全職歴にわたり彼を支え続け、現在では彼の記憶を継承するうえで欠くことのできない存在となっている。

ブラジリアの自宅にある書斎の棚には、二人が共に過ごした40年以上の歳月のあいだに蓄積された文書、新聞の切り抜き、写真が、リガヤの手で丁寧に整理されている。これらの資料は、フジタが大学時代から保存していたものであり、彼の生涯を年代順に再構成する貴重な記録である。棚を埋め尽くす書籍のあいだには、夫妻の人生の章が収められており、1970年代初頭の交際初期に交わされた手紙も含まれている。妻によって愛情をこめて整理されたフジタの記憶は、懐旧の情を色濃く伝えると同時に、夫の個人史と職業的軌跡への誇りをも鮮明に示している。

「1972年、サマースクールで出会ったのです」。これが、フジタとの出会いについて問われたとき、リガヤが必ず口にする言葉である。この一言は、二人が米国コネチカット州ソールズベリーのツイン・レイクスで、**Institute of World Affairs** が主催したサマースクールに参加した時期へと聞き手を誘う。フジタはサンパウロ大学法学部の最終学年に在籍し、サンパウロから渡米していた。一方、リガヤはコロラド州デンバーから来ており、国際関係学の博士課程に在学中であった。彼女によれば、まず自分が同コースへの参加を許可された後、新たに発表された参加者名簿に「エジモンド・ススム・フジタ」という名前が加わっていた。当時ブラジルについてあまり詳しくなかった彼女は、その名簿に日系人の名前をもつブラジル人がいることに少なからず驚いたという。

出会った当時のフジタの印象について、リガヤは彼を、控えめで非常に慎重、かつ卓越した知性を備えた若者として称賛を込めて描写している。国際色豊かな学生グループのなかで、ブラジル人は一般に社交的で陽気な性格として知られていたが、日本人の両親をもつフジタは、他のブラジル人学生に比してより物静かな態度を示していたという。リガヤによれば、両者の距離が縮まったきっかけは、彼女が「アジア的親近感」と呼ぶものであった。彼は日本人移民の子であり、彼女はフィリピン系の出自をもっていた。

その後、二人はもう一人のフィリピン人学生、一人のイタリア人学生、そしてもう一人の日本人学生と共に、親密な友人グループを形成した。リガヤは、当初抱いていたフジタの「内気な人」という印象が、共に過ごす時間の中で急速に変化していったと述懐する。グループワークでは、フジタは政治的な事柄を風刺画にして説明するなど、ユーモアのセンスを発揮し、友人たちとの集まりでは、和やかな会話のなかでその知性を遺憾なく示していた。こうして、6週間にわたるサマースクール参加期間中、両者は深い友情を築き、互いに敬意と愛情を抱くようになったのである。

図⑩ 1972 年、*Institute of World Affairs* におけるフジタと仲間たち

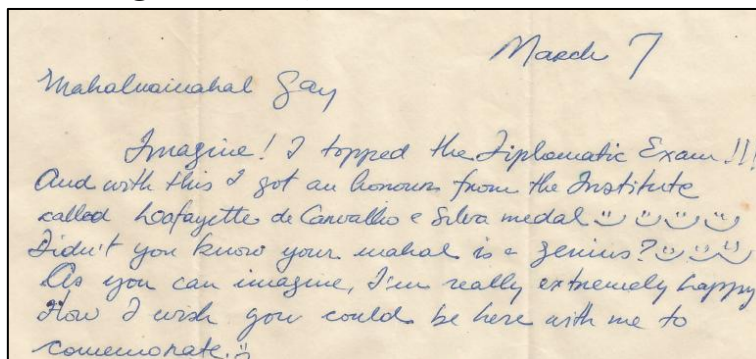


キャプション：左から右へ、千佐子山本（日本）、アナ・マリア・パタコニ（Ana Maria Pataconi, イタリア）、エジムンド・フジタ、マリア・リガヤと
アラン・ヘラウド（Alan Herald, フィリピン）

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

米国滞在期間を終えたフジタは帰国し、リガヤは引き続きコロラド州デンバーでの学業を続けることとなった。当時は、今日のように遠距離での通信や人間関係の維持が容易ではなかったため、二人は関係を深め、夏期講習で育まれた感情を保ち続ける手段として、ほぼ毎日のように書簡を交わすようになった。フジタは、英語の練習と上達を理由に、日々の生活について綴った手紙をリガヤへ送り、添削を依頼したという。この往復書簡はおよそ三年間続き、1972 年から 1975 年、すなわち二人が結婚する年までの間、互いに日常の出来事、外出先での体験、受けた試験、そして将来の計画などを語り合った。こうした交流を通じて両者の関係は一層強固なものとなり、フジタは自身の願望や喜びを余すことなくリガヤに打ち明け、手紙を通じて人生の出来事を共有していたのである。

図⑪ 1975 年、リガヤ宛のフジタの手紙



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

1975 年 3 月 7 日（エジムンド・フジタの誕生日）付でマリア・リガヤ宛に送られた書簡において、リオ・ブランコ学院の試験に合格したばかりのフジタは、

外交官採用試験の入学試験において首席を獲得した喜びを率直に表明している。曰く、「想像がつくと思うが、私は本当にうれしいんだ。あなたがここにいて、一緒にお祝いできたらどんなに良いだろうと思う」。フジタとリガヤは、夢や希望、そして達成した成果を互いに分かち合っており、この言葉からは、その栄誉が単にフジタ個人のものであるだけでなく、二人にとっての成果であったことがうかがえる。この瞬間は、二人が共に歩む未来の構築の始まりでもあった。というのも、ブラジル外務省の一員となることは、フジタにとって、学部学生であった時代には得られなかった可能性を切り拓くものであったからである。

二人の主な連絡手段は手紙であったが、夏期講習終了から結婚までの間に、実際に何度か再会する機会もあった。1973年から1974年にかけて、フジタは東京大学の研究生として日本に滞在したが、その折にリガヤにも博士課程の一部を日本で履修するよう勧めた。結果として、彼女は国際交流基金の奨学金を得て東京大学の研究員となり、フジタの日本滞在期間の後半を共に過ごすことが可能となった。

興味深い逸話として、日本滞在中、フジタは将来の妻の家族に会うため、フィリピンを訪れたことが挙げられる。ブラジルに帰国する少し前、リガヤは、もし自分と結婚したいのであれば、両親に直接会って話すべきだとフジタに提案した。しかし、彼女自身は渡航費がなかったため同行できず、フジタはリガヤの言うところの「非常に勇気ある行動」として、単身マニラへと旅立ったのである。

マリア・リガヤによれば、当時彼女はフジタとの結婚を現実的に考えてはいなかった。遠距離恋愛、外国人との結婚、両親からフィリピンでの挙式を求められていたこと、さらには海外居住の可能性など、将来を共に築くには多くの障害があったからである。しかしフジタは粘り強く、外務省に合格すれば結婚の計画を立て、実現させることができると述べていた。そして外交官養成課程の開始直後には、実際にブラジリアを訪れ、下掲の文書に見られるように、リガヤとの結婚許可を正式に申請している（図 18）。

図⑱ 1975 年、リガヤとの結婚許可申請書

EDMUNDO SUSSUMU FUJITA, aluno do 1º ano do Curso de Preparação à Carreira de Diplomata, do Instituto Rio-Branco, a baixo assinado, vem respeitosamente requerer a Vossa Excelência, de acordo com o § 2º do artigo 1º do Regulamento/ do Instituto Rio-Branco, combinado com a Lei Nº 1.542 de 5 de Janeiro de 1952, se digne autorizá-lo a contrair matrimônio com MARIA LIGAYA TOLENTINO ABELEDA, cidadã filipina nascida em Calapan, província de Mindoro Oriental, solteira, com 29 anos de idade, filha de Jesus Villar Abeleda e Purificacion Tolentino Abeleda. Esclarece, outrossim, que o casamento é previsto para o mês de agosto vindouro, durante o período de férias do Instituto Rio-Branco, e que a cerimônia será realizada em Manila, nas Filipinas.

キャプション：外国籍者との婚姻を目的としてブラジル外務大臣に提出された申請書。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

外交官が外国籍者と結婚する場合には、当時の法制度上、大臣の許可を得ることが義務付けられていた。この規定は1952年制定の法律第1,542号に明記されており、その第1条において、外交官職にあるすべての者は、外国籍者との婚姻に際して外務大臣の許可を要すると定められていた。これを受け、藤田は当時のブラジル外務大臣宛に正式な申請を行い、1975年6月12日付で発給された下掲の文書に示されるとおり、その許可が下りた（図19）。

図⑲ 1975 年、リガヤとの婚姻許可証

— DEPARTAMENTO ADMINISTRATIVO DO PESSOAL CIVIL
— Exposição de Motivos
(*) Nº 228, de 10 de junho de 1975. Tabela de Empregos de Pessoal regido pela Consolidação das Leis do Trabalho, do Ministério dos Transportes, aproveitando servidores contratados que vêm prestando serviços naquele Ministério. Opina favoravelmente, nos termos da presente Exposição de Motivos. "Aprovo. Em 13-6-75"
Nº 231, de 12 de junho de 1975. Admissão pela Universidade Federal de Goiás, sob o regime CLT, de candidatos habilitados em concurso, para os empregos que especifica. "Aprovo. Em 16.6.75"
Nº 236, de 12 de junho de 1975. Requisição pelo Governo do Estado do Rio de Janeiro do servidor da PETROBRAS Fernando Perlingeiro Lavaguiol. "Autorizo. Em 16.6.75"
— MINISTÉRIO DAS RELAÇÕES EXTERIORES
— Exposição de Motivos
Nº 167, de 12 de junho de 1975. Autorização para que Edmundo Sussumu Fujita, aluno do C.R. de Preparação à Carreira de Diplomata, possa contrair matrimônio com Maria Ligaya Tolentino Abeleda, de nacionalidade filipina. "Autorizo. Em 16.6.75"
— MINISTÉRIO DOS TRANSPORTES
— Exposição de Motivos
Nº 11, de 7 de abril de 1975. Majoração dos tetos tarifários para carga geral e de passageiros da Rede Ferroviária Federal S.A. "Autorizo a majoração de 25% nas tarifas propostas. Em 13.6.75"

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

婚姻許可の交付を待つ間、両者は1975年8月9日を結婚式の日取りと定め、リオ・ブランコ学院の休暇期間中に挙行する計画を立てていた。当時、リガヤ

は米国デンバーに滞在しており、フジタとはおよそ 1 年間直接会うことがなかった。

1975 年 6 月 12 日に婚姻許可が発給されると、両者は急ぎ結婚式の準備を進め、挙式の 1 週間前にマニラで再会した。婚姻手続き上の煩雑な要件により、二人は合計 3 度の婚姻を行うこととなった。フィリピンでの宗教婚では、宗教婚証明書と民事婚証明書の双方が発行される。しかし、ブラジルへの入国ビザを取得するためには、判事の執行による民事婚の成立が必要であった。このため、1975 年 8 月 5 日に第 1 回目の婚姻（民事婚）が行われた。

第 2 回目の婚姻は、リガヤのビザ申請のために書類を提出する際、同年 8 月 7 日に執行されたものである。第 3 回目の婚姻である宗教婚は、1607 年に建設されたフィリピン最古の教会であるサン・アグスティン教会にて挙行された。フィリピンの伝統に従い、式は夜明け時の午前 7 時に開始された。

図⑳ 1975 年マニラでの結婚式



出典：エジモンド・ススム・フジタ個人コレクション

挙式および婚姻成立のための必要な公証手続を終えた後、夫妻はリオ・デ・ジャネイロへ赴き、フジタが外交官養成課程を修了する間、初めて同居生活を開始した。1976 年から 1979 年まではブラジルに居住した。このブラジルでの日常生活への適応期間において、リガヤはポルトガル語の習得を余儀なくされ、同時に学業を継続するためブラジルの大学への入学も検討していた。リガヤの証言によれば、このときフジタは、未修了であった博士課程を米国で修了するよう彼女に提案し、その費用を負担することを約束したという。こうして夫妻は再び遠距離での生活を余儀なくされ、約 9 か月間、異なる国で暮らすこととなった。

米国で博士課程を修了した後、リガヤの職業的活動は主として、フジタの外交官としての任地に同行する中で展開された。彼女は海外赴任先で、プロジェクトの立案・監督・評価分野におけるコンサルタントとして活動したほか、ブラジルにおける国連開発計画（PNUD）副代表、ニューヨークの国連人口基金（UNFPA）副局長補佐官として人口問題関連プログラムを担当するなど、重要な職務を歴任した。

リガヤとフジタの歩みは、出会い以来、幾度かの距離的隔たりと再会を繰り返してきた。地理的には地球のほぼ反対側に位置する国々の出身でありながら、米国で邂逅し、その後も離れていながら歩みを共にしてきたのである。3年間に及ぶ書簡のやり取り、外国での再会、そしてフィリピンでの結婚式は、フジタの伴侶としてのリガヤの適性をも示す出来事であった。フジタの幼馴染であるイライ・ジ・パウラ・ソウザは、「エジムンドの妻として、彼女以上にふさわしい人物を私は知らない。外交官としてのエジムンドの妻としても、まさに理想的な人物である」と述べている（2017年4月25日インタビュー）。

日本人移民と戦後期

フジタがイタマラチーに入省する経緯を論じる前に、まず戦後期、特に1950年代からフジタが外交官となった1975年半ばまでの間、ブラジルにおける日本人およびその子孫の一般的状況について概観する必要がある。この作業は、ブラジル外交官団において初めて日系人が任用された時期に、日本人コミュニティが置かれていた社会的状況を理解する助けとなるとともに、フジタ個人の歩みと、20世紀後半のブラジルにおける他の日系人の歩みとの関係を明らかにする上でも重要である。

日本人移民のブラジル渡航および日伯関係樹立から既に100年以上が経過し、その間、日本人移民とその子孫はブラジル社会のさまざまな職域に進出してきた。1960年代から1970年代にかけては、日本国総領事館の資料によれば、サンパウロ州だけでも日系人は560名のエンジニア、1,350名の医師、5名の判事、450名の弁護士を擁していた（Lesser, 2008, p. 45）。一方で、アジア系の人材がほとんど存在しない分野もあった。外務省もその一例であり、1975年当時、その外交官団は主として白人エリート層、とりわけリオ・デ・ジャネイロ出身者によって構成されていた。

エジムンド・フジタがブラジル外務省に入省したのは、ブラジルが日本との関係を大きく深めつつあった時期であり、日本は経済的絶頂期を迎えていた。また、ブラジル国内では日本人移民とその子孫が急速な社会的上昇を遂げ、都市部、大学、政治分野においてより大きな役割を占めるようになっていた。加えて、この時期のブラジルでは、人種問題に関する議論の中で人種的偏見は存在しないという言説が高まりつつあり、日本人コミュニティがその成功例として、この言説の正当化に利用される事例も見られた（Taniguti, 2015）。

長期間にわたり、日系人はコミュニティ内部で生活し、初期移民が持ち込んだ多くの伝統を保持しつつ、他のブラジル人社会から隔絶された閉鎖的な暮らしを営んでいた。しかし、世代を重ねるにつれ、日系人がブラジル社会とより広範に統合されると同時に、母国の文化とは大きく異なる文化的要素を徐々に取り入れ、同化していく過程が認められる。人類学的観点からすれば、この問題は「同化」と「文化変容（アカルチュレーション）」の概念を通じて説明可能であり、とりわけ「国民性」や「文化的同質性」といった二項対立的な論理に着目する必要がある（Ennes, 2001）。

このことは、すなわち少数民族的集団として位置づけられる移民およびその子孫が、時間の経過とともにその民族的特徴を喪失し、支配的社会の一員として完全に統合されうるという前提を含んでいる。日本人移民の同化および文化

変容について、エゴン・シャーデン (Egon Schaden) は次のようにブラジル社会における日本人の統合過程を要約している。

〔文化変容〕に関して、日本人の場合 [……]、文化的対立の様相を明確に呈している。なぜなら、両者の文化的構成は互いに著しく隔たっているからである。さらに言えば、日本人移民を国民社会から隔てる人種的距離が混血を困難にし、かえってエスノセントリックな評価を強める傾向を示す。言語、宗教、家族制度、政治的観念、衛生習慣、料理、その他無数の生活慣習はきわめて異質であり、そのため文化変容は、日本人や日系ブラジル人にとって、ヨーロッパ系移民に比べ、より急進的かつ深層的な文化的解体の段階を経ることを不可避とするのである (Schaden, 1973, p. 517)。

このようにして、日系ブラジル人のイメージは、日本人移民社会に対する認識や、移民およびその子孫とブラジル社会の他集団との関係性を基盤として形成されるようになった。カンディス・サカモト・ソウザ・ヴィアナ (Candice Sakamoto Souza Vianna, 2008) によれば、日系人に関するイメージは多分にステレオタイプに依拠しており、それはブラジル社会に特有のものではなく、ラテンアメリカの他国においても繰り返し見出されるものである。すなわち、日系人は「勤勉で、誠実で、几帳面であり、経済的上昇を目指し、学業を最優先にする人々」として定義されてきたのである (Vianna, 2008, p. 47)。しかしながら、このような「肯定的」性質を帯びたイメージが定着したのは常にそうであったわけではなく、主として 20 世紀後半以降に顕著となった点を看過してはならない。

この点に関連して、第二次世界大戦後に展開された日本人移民は、20 世紀前半の移民とはいくつかの点で異なる特徴を有していた。すなわち、戦後の移民は必ずしも家族単位でブラジルに到着したのではなく、1958 年の日本人移民総調査によれば、1952 年以降に移住した者のほぼ半数が単身で渡伯していたのである。この点に関してルーチ・カルドーゾ (Ruth Cardoso, 1995) は、1950 年代以降にブラジルへ到来した日本人移民の性格にはすでに変化が見られると指摘している。すなわち、初期の時期には家族的移民および入植者として契約された移民が圧倒的多数を占めていたのに対し、戦後にはその様相が異なっていたのである。

もう一つ注目すべき重要な点は、初期移民の多くが土地所有者となり、帰国の展望を持たずにブラジルに定住したことである⁴⁵。その典型例が、エジムンド・ススム・フジタの両親にあたる藤田家および山室家であった。かかる移民たちは、自らの子女が成長する土地であるブラジル社会へのより良き統合を目指し、その教育に力を注ぐようになったのである。二世たちは、より高い教育水準に到達しうる条件を与えられ、さらに都市部の職業に従事する可能性を得た。したがって、「第二世代は、疑いなく子どもたちに資産と『より良き生活』を提供することを目標とするこれら家族の社会的上昇過程を継承していくのである」 (Cardoso, 1995, p. 70)。

⁴⁵ Saito (1961) によれば、1939 年当時、ブラジル在住の日本人移民およびその子孫の 9 割が本国への帰還を希望していた。しかしながら、1952 年から 1953 年にかけては、ほぼ 9 割が日本へは帰還せず、ブラジルに永住する決意を固めていたのである。

この過程は、藤田家においても顕著に確認される。エジムンド・フジタの父藤田芳郎（1920-2014）は、当時の日本人移民社会の大勢とほぼ同様の道歩んでいる。すなわち、初期においては農業に従事し、のちにサンパウロ市に移り住んで生活の向上を図り、自ら事業を営むことで、子どもたちが良質な教育を受け、将来的に都市的職業に就くことが可能となる環境を整えたのである。さらに、戦後期においては、もはや日本への帰還を意図しない日本人移民の間で、二世教育（エジムンド・ススム・フジタもその一人である）は極めて重要視されていたことも付記すべきであろう。

その結果、日本人移民の子孫たちはブラジルの大学へと次第に多数進学するようになり、特にサンパウロ市においては、高等教育機関における「日本人の侵入」という感覚を引き起こすまでに至った（Miyao, 2002）。このようにして、1960年代から1970年代にかけて、日系人はサンパウロ州の人口全体のわずか2パーセントにすぎなかったにもかかわらず、大学入学者数の1割を占めるに至り（Lesser, 2008）、そのことが、日本人移民の子孫＝真面目で勤勉で学問に励む存在という一般的なイメージの形成に寄与したのである。

さらに、日本人およびその子孫は商業活動や自由業の分野においても進出し、都市空間においてますます目立つようになった。かくして20世紀後半以降、日本人は「もはや『日本人脅威論』の対象ではなく、労働と努力が成功を生むという肯定的評価の対象へと転換されるようになった」のである（Sakurai, 1993, p. 17）。

この過程と並行して、国際的文脈における日本は、第二次世界大戦後の復興成功の典型的事例として注目されるようになった。経済面においては、日本は「高度経済成長」あるいは「日本経済の奇跡」と呼ばれる急速な発展期を経験し、戦後わずか20年余りの1968年には、米国およびソ連に次ぐ世界第三位の経済大国となったのである。このような状況のもと、日本は国際社会において主要な役割を担う存在となり、結果として日本人を高度に発展した国民として印象づけることに寄与した。

アレクサンドレ・ウエハラ（Alexandre Uehara）は次のように述べている。

「日本経済の奇跡」と呼ばれるこの時期の発展は、戦後において初めて重要な役割を担った首相である吉田茂の政策に帰せられる。吉田は国家の力を経済開発に注ぐことによって、日本の発展を実現したのである。同首相は、日本が従来型の国防、すなわち軍事力によって安全保障を確保する必要はなく、それを担う用意のある米国の存在があることを見抜いたのである（Uehara, 2003, p. 83）。

したがって、従来は主として軍事開発に向けられていた努力が経済開発へと転換され、日本の産業は急速に発展し、とりわけ電機・電子および自動車産業において世界的な模範とみなされるに至った。同時期、多くの日本の多国籍企業がブラジルに進出し、その一部は今日に至るまでブラジル社会の日常に深く根付いている。たとえば、ホンダ、パナソニック、サンヨー、シャープ、ソニー、センプ・東芝、ヤマハなどがその代表例である⁴⁶。さらに、1970年代から

⁴⁶ ブラジルに進出した日本企業に関するさらなる詳細については、ブラジル日本商工会議所（Câmara de Comércio e Indústria Japonesa do Brasil）において確認することができる。取得先は、<http://www.camaradojapao.org.br>（2021年10月2日取得）である。

1980年代にかけて、両国はブラジル経済の強化と発展を目的として、数多くの技術協力および経済協力協定を締結した。

日本の経済的繁栄と当時の日本に対する肯定的なイメージの文脈において、多くの日本人移民は単なる商人としての立場を超え、ブラジル産業界において名声ある地位を獲得するようになった。この時期には農村から都市への移動という過程も進行した (Ohno, 2008)。また、戦後期においては、ブラジル在日日系社会の基礎教育にも変化が見られた。長らく日本人およびその子孫は、いわゆる日本人学校において日本語や祖先の文化習俗に触れる教育を受けてきた。しかし、第二次世界大戦後には、ブラジル社会への統合を望む日系人の関心が高まったことから、ブラジル国内の一般学校で実施されていた教育課程が採用されるようになったのである (Handa, 1987)。

このようにして、1950年代以降の日系ブラジル人は、日本の高度経済成長と直接的な関係を有していなかったにもかかわらず、日本における経済的・技術的発展の恩恵を間接的に享受することとなった。したがって、ブラジル社会においても日本という国そのものに注目が集まり、それに伴い、ブラジルに暮らす日本人およびその子孫に対する肯定的なステレオタイプ⁴⁷は一層強化されていったのである。当該過程に関して、Denys Cuche (1999) は「ヘテロ・アイデンティティ」あるいは「エクソ・アイデンティティ」という概念を提示している。これは、自らによってではなく他者によって規定されるアイデンティティを意味し、通常は否定的な性格を帯びるが、しばしば肯定的なものへと転化することもあるとされる。

このような文脈において、ブラジル人一般は現在に至るまで、日本人およびその子孫を知的で、責任感が強く、勤勉で、礼儀正しく、控えめな人々として認識する傾向を有している。この観念は、特に戦後期において強化された。すなわち、日系ブラジル人が国内の主要大学、特に法学、医学、工学といった分野において高い合格率を示したことにより、長らく日系人は優秀であるという「肯定的な」評価が定着し、その延長として「今日、日本人を一人殺せば、明日、大学の席が一つ保証される」という言い回しさえ流布したのである (Lesser, 2001)。

したがって、1960年代以降、ブラジルにおける日本のイメージはきわめて肯定的なものとなり、日系人はそれ以前には参入し得なかった多様な専門領域において地位を占めるようになったといえる。また、この時期には、日系人として初めての大臣の任命がなされている。すなわち、実業家ファビオ・ヤスダ (Fábio Yassuda, 1922-2011) がメディシ政権期 (1969-1974) において工業通商大臣に指名されたのである。さらに、20世紀後半には、他の二名の日系人もブラジルにおける要職を担うに至った。すなわち、ゲイゼル政権期 (1974-1979) に鉱山エネルギー大臣を務めたシゲアキ・ウエキ (Shigeaki Ueki, 1935-)、およびサルネイ政権期 (1985-1990) に保健大臣を務めたセイゴ・ツヅキ (Seigo Tsuzuki, 1932-) である。

⁴⁷ 「現実の編成という観点からすると、社会的ステレオタイプとは、現実を範疇化する一つの形式であり、強い評価的・情動的な色彩を帯びたものである。それはしばしば否定的であるが、肯定的な内容を伴って現れる場合もある。[……] ステレオタイプの機能は、不確実性を減少させ、周囲の現実を組織化することにより、かくしてステレオタイプ自体が当該環境の「現実」を構成する要素となると同時に、自らを根拠づけ強化する社会的効果を生み出す傾向を有するのである」 (Baptista, 1996, p. 13)。

政治的・社会的上昇

政治領域において、サンパウロの日本人移民の子女の中には、ブラジルの立法府において選出されることにより先例を開いた者がいた。ユキシゲ・タムラ (Yukishigue Tamura, 1915-2011)⁴⁸は、1947年に日系人として初めて市議会議員に当選し、さらに1951年には州議会議員、1955年には連邦下院議員に選出されるなど、三度にわたり先駆的役割を果たした。その後、他の日系人も政治的地位を獲得するに至り、1970年にはサンパウロ州において、すでに1名の連邦下院議員、3名の州議員、11名の市長、17名の副市長、12名の市議会議員、そして200名を超える日系市議会議員が存在していた (Lesser 2008, p. 47)。

コスタ・エ・シルヴァ政権期 (1967-1969)、アントニオ・デウフィン・ネット (Antônio Delfim Netto, 1928-2024) が財務大臣に就任することとなった。デウフィン・ネットは、当時の一部政治家と同様に、日本との関係にブラジル経済成長の好機を見だし、また日系人に対して強い好意を示した。財務大臣就任に際し、彼は顧問団の一員としてパウロ・ヨコタ (Paulo Yokota, 1938-2021) およびアキヒロ・イケダ (Akihiro Ikeda) を登用し、いわゆる「デウフィン・ボーイズ」と称されたテクノクラート集団の内部に「日本チーム」を形成した。日系人ヨコタは、サンパウロの日系紙 *Diário Nippak* において「デウフィン・ネットの最も忠実な側近の一人」と評され、1971年には中央銀行 (Banco Central) 理事、1979年には国立入植農地改革院 (INCRA) 総裁に任命された。

さらに、イケダおよびヨコタに加え、連邦行政府にはもう一人、日系社会でよく知られた人物が登場することとなった。すなわち、ファビオ・リョウジ・ヤスダ (Fábio Riodi Yassuda, 1922-2011) である。ヤスダは1969年、メディシ政権において工業通商大臣に任命され、ブラジルで初めて閣僚ポストに就任した日系人となった。この前例のない出来事は、ブラジルと日本におけるその意義を強調すると同時に、ヤスダの民族的背景に光を当てる形で、多くの新聞紙上を賑わせたのである。

重要な点として指摘すべきは、当時のブラジルの報道機関が日本人移民に「成功」の性格を付与し、日本人がブラジル社会に極めて良好に統合されたと論じ、その論拠としてファビオ・ヤスダや「デウフィン・ボーイズ」の事例をしばしば取り上げたことである。ヤスダの場合、1969年に *Jornal do Brasil* 紙は紙面を割いて移民史を紹介し、メディシ政権下で新たに工業通商大臣に就任したヤスダに関する記事を「ザ・ニッセイ (O Nissei)」という見出しとともに掲載した。その記事には、ヤスダの写真が「ファビオ・ヤスダはブラジルにおける日本人社会の政治的上昇を実証する」との説明文付きで掲げられていた (Taniguti, 2015)。

人種論的議論の次元においても、ブラジルにおける日系人の政治的要職への登用は、ブラジル社会がより良い方向に変化しつつあることを正当化し、また同国には人種的偏見が存在しないとする言説を補強するものとして利用された。これにより、当時の軍事政権が唱導していた「人種民主主義」の神話がいつそう強化されたのである。1976年、東京においてブラジル大統領エルネスト・ガ

⁴⁸ 取得先は、<http://www.imigracaojaponesa.com.br/index.php/entrevistas/politicos-nikkeis/yukishigue-tamura/> (2021年10月2日取得) である。

イゼルと日本の三木武夫首相（1907-1988）との会談が行われた際、ブラジルにおける日系人の政治的権力ポストへの顕著な進出は日本側からも称揚され、三木首相はこの事実を「ブラジルにはいかなる人種的偏見も存在しない」ことの証左であると述べている（Lesser, 2008）。

イタマラチーにおける壁の打ち破り

20 世紀後半のブラジルにおいては、日本との関係強化が大きな潮流をなしていた。主要メディアの言説は、日本人社会の「成功裡の統合」や、同国における人種的偏見の不存在を強調していたのである。このような「親日主義的」雰囲気の中で、日本人社会は、ファビオ・ヤスダ、シゲアキ・ウエキ・、パウロ・ヨコタ、ユキシゲ・タムラといった人物が、従来の日系ブラジル人が到達し得なかった地位に就くことを目の当たりにした。

そしてまさに同じ文脈において、日系社会およびブラジルの新聞各紙の注目を集めるもう一つの前例のない出来事が生じた。それは、イタマラチーの採用試験において、初めて日系ブラジル人が合格を果たしたという事実であった。

「若き二世、イタマラチーの壁を打ち破る」1974 年 *Folha de São Paulo* 紙はこの見出しとともに、エジムンド・ススム・フジタが同年の外交官候補者採用試験の第一次試験に合格したことを報じた。この見出しに選ばれた言葉は、単に若き二世がブラジルでもっとも厳格な競争試験の一つに合格した事実を伝えるにとどまらず、当時のイタマラチーに存在していた一つのパラダイム、すなわち打ち破られるべき「壁」の存在を読者に暗示するものであった。フジタ以前、イタマラチーの人員には日本人出自の者はおらず、ブラジル外交団は主として白人男性、とりわけブラジルのエリート層出身者によって構成されていたのである。

ここで言及されている「壁」とは、厳格な選抜過程と難関試験を意味すると同時に、民族的・人種的障壁として理解することもできよう。そのため、日系ブラジル人として初めてリオ・ブランコ学院の試験に合格した事実は、当時の外交官の典型的な人物像を覆すものとして注目を集め、白人エリートに独占されていた外交という職業に日本人子孫が参入する端緒を示す出来事となった。

したがって、フジタが外交官となったことは、単なる個人的な目標の達成にとどまらず、イタマラチー内部に存在していた既存のパターンに変化をもたらす画期的な出来事であり、後に他の日系ブラジル人が外交官としての道を歩むための先例を開いたのである。

さらに広い文脈においては、フジタは当時の多くの二世と同様、移民である両親が学業専念と都市型職業追求のために提供した環境を享受しつつ、日本人社会の社会的上昇過程を継承する存在であった。同時に、個人的側面においては、日本語のみならずフランス語や英語といった外国語の習得を含む彼の多文化的教養が決定的な要素となり、フジタがブラジル外交界において初の日系人として認められるに至ったのである。

リオ・ブランコ学院の試験を受験した当時、フジタは自身の合格がブラジルの新聞各紙によって大きく取り上げられたことに驚きを覚えたようである。*Folha de São Paulo* に掲載された記事において、彼は自らの合格について特段の特別な出来事とは考えておらず、むしろブラジルは多人種国家であり、すべての人種が統合される場であるとの認識を示している。こうした彼の発言は、

一見すると、自身がイタマラチーの試験に合格した初の日系ブラジル人であることの重要性を意識していなかったことを示唆し、同時に当時流布されていた「人種民主主義」の言説とも一致していた。しかし、フジタ自身はブラジル外交界に日本人出自の者が存在したことは一度もないという事実を十分に理解していた。

さらに、1974年12月にマリア・リガヤ・フジタに宛てた書簡の中で、フジタは外交官候補者採用試験の第一次試験における経験や、サンパウロの報道機関が彼の合格をどのように扱っていたかについて述べている。

ここ数日は非常に出来事が多く、慌ただしいものでした。月曜日に知ったのですが、外交官試験の第一次試験に全国で合格したのはわずか14名とのこと。まさに虐殺のようでした！240人の受験者のうち14人だけ！募集定員は30名あるにもかかわらず、外交官養成所は基準を下げて合格者を増やすことを拒みました。この調子では、最終合格者はわずか7、8名になるだろうと見られています。私はサンパウロからの二人の合格者の一人で、第一次試験の一位と二位を占めました（私は「日本人」として識別されました）。サンパウロの新聞は大いに関心を示し、非常に気まずい状況となっています。**地元の日系新聞は私を「日系社会の誇り」とまで表現しています。**しかし私は大いに不安を抱えています。なぜなら、第二次試験、第三次試験がまだ残っているからです。1月2日にはリオ・デ・ジャネイロに行き、身体検査を受ける予定です。これから最も難しい段階が始まろうとしています。外交官審議会の前で行われる口頭試問こそが最難関であり、何の説明もなく不合格となる可能性があるといわれています（強調は引用者）⁴⁹。

2016年に行われた最後のインタビューにおいて外交官という進路の選択について問われた際、フジタは、若き日に外交官という職業に関心を抱いていたものの、日系二世が外交官となった事例を一度も見ることがなかったために多少の不安を感じていたと振り返っている。彼は次のように述懐している、「その職業にはとても関心がありましたが、『二世が外交官になったなんて聞いたことがない。だから自分には関係のない話だろう』と思ったのです」（2016年3月6日インタビュー）。さらに、イタマラチーの試験に日系二世が合格することを「特別なことではない」と述べた彼の発言は、一見すると自身の偉業を軽視するようにも映る。しかし、注意深く読めば、それは謙遜を示し、自らの成果を誇張しすぎないよう配慮した「外交的」言い回しであったとも解釈できる。すなわち、フジタは当時「初の二世外交官」という立場を前面には出さなかったものの、自らの達成が社会的に持つ先駆的意義については十分に認識していたと推察される。

また、2009年に駐韓ブラジル大使に任命された際、フジタは韓国国際放送財団（Korea International Broadcasting Foundation）が提供するテレビ局Arirang TVの番組である *Diplomacy Lounge* に出演し⁵⁰、インタビュアーであるシン・ヒョングク（Shin Hyun-gook）から、彼がブラジルとアジア諸国との関係において果たしてきた重要な役割を紹介された上で、「イタマラチーに入

⁴⁹ 1974年12月19日、フジタからマリア・リガヤに宛てた書簡。原文は英語。出典は、エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

⁵⁰ 出典は、エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

った最初の日本人の子孫」であることについて質問を受けた。その際フジタは、誇らしげに、自身の世代においてブラジル外交官採用試験に合格した最初の人物であったことを認めつつも、現在では多くのアジア系子孫がイタマラチーの一員として活動していると述べている。

フジタがリオ・ブランコ学院の試験合格に付与された社会的意義について、本人自身が積極的に広めることはなかったものの、その先駆的業績は生涯を通じて、また同僚外交官の間でも常に記憶され続けた。外交官としてのキャリアを歩んだホナウド・モタ・サルデンベルグ (Ronaldo Mota Sardenberg, 1940-) ⁵¹は、フジタがイタマラチーにおいて初めて日本人の血を引く人物となったことにより、ブラジル外交に一つの遺産を残したと証言している。サルデンベルグによれば、その遺産の大きさは、彼の業績が持つ「初」の意義にこそ由来するという。したがって、フジタ自身が自らの先駆性や「初の日系外交官」という呼称を受け入れる際に慎重さや控えめな態度を示したとしても、その事実は彼の経歴の初期から明確な特徴として刻まれていたと言える。実際、数多くの新聞記事が彼の偉業を称賛し、彼がブラジル外交史上初の日系となったことを繰り返し報じていたのである。

図21 1975年 *São Paulo-Shinbun* でのインタビュー



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

1975年3月14日付(図21)の *São Paulo-Shinbun* の記事は、フジタの誕生日およびイタマラチー入省試験合格の公式発表から一週間後に掲載されたものであり、同紙は誇らしげにその温厚な二世がブラジル外交官として初めて日系人の道を切り拓いたと報じた。ブラジル社会において従来日本人が経験したことのなかった専門的・社会的領域に進出した他の日系人と同様に、フジタの

⁵¹ 2018年9月に行われたホナウド・モタ・サルデンベルグによるインタビュー。サルデンベルグ大使はイタマラチーにおけるフジタの同僚であり、両者はロシアにおいて、また米国では国際連合(ONU)において、さらにブラジル大統領府戦略問題事務局(SAE)において共に職務を遂行した。

達成は広く注目を集め、当時の日系人社会が経験した社会的上昇過程の一環として位置づけられた。

このように、イタマラチーにおける初の日系人合格の社会的意義は、主として新聞報道の中で顕在化しており、そこでは常に「イタマラチーの初の二世」として彼が描かれていた。*São Paulo-Shinbun* や *Folha de São Paulo* に加え、*Jornal do Brasil* もまた、1975 年 3 月 5 日付の記事において同年のリオ・ブランコ学院入試合格者を紹介し、フジタをブラジル外交官試験に合格した唯一の日系人として強調した。

先述の通り、当時のブラジル政府は、伝統的に制限的とみなされてきた社会的・職業的領域に「非白人」が進出する事例を欠いており、長らくそれはブラジルの「国の顔」を必ずしも反映してはいなかった。この点に関して、イタマラチーは黒人外交官が存在しない理由を問われると、それは国内の社会経済的格差に起因するものであって機関内には人種差別は存在しないと主張していた。

さらに 1978 年 4 月、あるブラジル人記者が「外交官に黒人が存在しないのは人種差別の結果である」と指摘した際、ブラジル外務省はこれを否定し、3 年前にアジア系出自のエジムンド・ススム・フジタを外交官として採用したことを例に挙げた (Nishida, 2018)。この意味において、「黄色人種」の採用は、同省が外交官採用過程における人種差別の不存在を主張する論拠としても利用されたのである。

選考過程

フジタの合格は、ブラジル日系社会の歴史およびイタマラチー自体の歴史において重要な意義を持つのみならず、彼がブラジルの公務員制度における最も厳格な試験の一つに合格した事実としても特筆されるべきである。外交官候補者採用試験は年を追うごとに要求水準を高め、受験者にはポルトガル語のみならず、フランス語および英語の高度な運用能力が求められたほか、地理学、ブラジル史、世界史、国際法の試験に合格する必要があった。さらに、受験者は身体検査や心理検査に加え、生活習慣や人物に関する調査も受けねばならなかった。

1974 年度においては外交官職として計 30 名の募集が行われたが、234 名の応募者のうち、第一次試験の語学試験を通過したのはわずか 14 名であった。その中でも最も多くの受験者を不合格に追い込んだのはフランス語試験であり、フジタは辛うじて合格に必要な最低点 (100 点満点中 50 点) を獲得して通過した。一方で、英語試験においては同年度の最高得点となる 90 点を記録した。

語学試験におけるフジタの成績を考察すると、幼少期からの外国語学習および学業生活における国際的経験が、受験者の多くが脱落した語学試験において彼を際立たせたことが理解できる。当時の日系人にとっては決して一般的ではなかったものの、リセ・パストゥール校およびサン・ルイス校といった名門校での教育に加え、アリアンス・フランセーズ (Aliança Francesa) およびカルトゥラ・イングレーザ (Cultura Inglesa) での学習を通じて、フジタはすでに青年期の段階でリオ・ブランコ学院試験に求められる言語能力を十分に培う機会を得ていたのである。

当該年度においては、第一次試験終了後、最終的な合格に至るまで直接的な競争関係は存在しなかった。というのも、本来 30 名の欠員補充を目的とする試

験であったにもかかわらず、第一次試験を通過したのはわずか14名にすぎなかったからである。その後の試験段階において、適性検査で1名、地理試験でさらに1名が不合格となり、最終合格者名簿は計12名となった。なお、第一次から第二次にかけて不合格となった適性検査（心理・精神医学的検査）の受験者はフジタの同僚であった。

昨日、第二次試験の結果を受け取りましたが、幸いにも私の名前は合格者名簿に載っていました。第三次試験は2月3日に地理試験から始まるので、これまで以上に勉強しようと思っています。私にとって非常に不愉快な驚きであったのは、第一次試験で首位であったサンパウロの同僚が名簿から外されたことです。試験委員会が示した理由は、「極めて優秀であるものの、心理・精神医学的検査において人格的葛藤が認められ、また知性は卓越しているが散漫である」との判定でした。これは極めて理解し難いものです。第一に、合格には知性が必要不可欠であり（イタマラチーは、仮に最終的に合格者が1名しか残らなくとも水準を下げないと明言しています）、しかし「知性が過度に高すぎる」と不合格になるのです。あたかも雷が周囲に落ちたかのように、皆が恐怖を覚えました。これで残ったのは13名となりました。果たして最終まで到達できるのは何名なのか、想像せずにはいられません。⁵²

全ての選考過程を経たのち、エジムンド・ススム・フジタは総合成績において第一位となり、その功績によりラファエッテ・ジ・カルヴァーリョ・エ・シルヴァ賞（Prêmio Lafayette de Carvalho e Silva）⁵³——銀メダルを授与された。当該年度に提示された30名の募集枠のうち、実際に充足されたのは12名のみであり、残り18名は空席のままに終わった。この結果は、外務省において人的資源の拡充を目的とした直接採用試験の導入可能性に関する議論を惹起することとなった。

想起すべきは、1945年にリオ・ブランコ学院（IRBr）が設立されて以来、外交官候補者の採用は、外交官養成課程（Curso de Preparação à Carreira de Diplomata, CPCD）への進学を可能とする試験を通じて行われていたという点である。この課程は2年間にわたり、修了時に最終試験に合格すれば自動的に外務省の職に任ぜられる仕組みであった。フジタは1974年にリオ・ブランコ学院入学資格試験で首席合格を果たし、さらに翌1975年には、養成課程を経

⁵² フジタからマリア・リガヤ宛の書簡（1975年1月23日付）。原文英語。出典は、エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

⁵³ リオ・ブランコ学院年鑑によれば、「ラファエッテ・ジ・カルヴァーリョ・エ・シルヴァ賞は、同学院の初期の所長の一人を顕彰するものである。本賞は1956年、当時外交官養成課程（CPCD）入学試験における『法学基礎知識』の試験官であったエルマーノ・クルス（Elmano Cruz）大臣によって創設され、同選抜過程において第一位および第二位に入賞した者を、それぞれ銀メダルおよび銅メダルによって表彰することを目的としていた。1978年には、本賞の対象範囲が拡張され、それまでに実施された筆記試験型の選抜において同様の成績を収めた者にも遡及的に授与されることとなった。外交官養成課程入学試験自体は1996年に廃止されたものの、本賞は依然として外交官キャリア採用試験（CACD）の首位合格者に授与され続けている。」「取得先は、<http://www.institutoriobranco.itamaraty.gov.br/images/pdf/Anuarios/anuario-2020.pdf>（2021年11月5日取得）である。

ずに外交官として直ちに任用され得る「直接採用試験」にも合格し、直ちに外交官職に就く資格を獲得したのである。

1970年代には欠員の多さゆえに、外交官養成課程を免除し、合格者を直ちに任命する直接採用制度が次第に一般化しつつあった。しかしながら、その時期においてもリオ・ブランコ学院入学試験、あるいは直接採用試験のいずれにおいても、外務省が課す厳格な基準を満たすことのできる者はごく少数に限られていた。特に高度な外国語能力が強く求められていたためである。したがって、英語およびフランス語に堪能であった日系二世のフジタは、当時においてリオ・ブランコ学院への入学および外交官職への就任の双方を実現し得た稀少な人材であったといえる。

フジタ以後のイタマラチーにおける日系人

フジタのイタマラチー入省がブラジル外交官における日系人の歴史の端緒を画するものであったことは周知の通りである。しかし、次に日本人の子孫が外交官として採用されるのはそれからおよそ 15 年後の 1990 年であり⁵⁴、最初の女性日系外交官となったファチマ・ケイコ・イシタニ (Fátima Keiko Ishitani)⁵⁵の合格によってであった。さらに彼女は 2020 年には日本人の血を引く女性として初めて一等公使 (大使階) に昇進している。ファチマ・イシタニの合格以後、ようやく外交官試験において日系人合格者数の漸増が確認できるようになる。

1990 年代から 2010 年代末までの間に、およそ 25 名の日系人がブラジル外交官団の一員となった。近年では、リオ・ブランコ学院の年鑑に記録されている合格者名簿を見ても明らかなように、外交官採用試験の合格者の中に少なくとも一人は日本人系の姓を持つ者が含まれることが通例となっている⁵⁶。なお、ファチマ・ケイコ・イシタニのほか、イシタニ家からはさらに二人の外交官が外務省に加わっており、それは現在一等公使のセシリア・キク・イシタニ (Cecília Kiku Ishitani)、そしてクラウジア・キミコ・イシタニ・クリストフォロ (Cláudia Kimiko Ishitani Christófolo) である。

フジタの合格と、次なる日系人の外交官登用とのあいだに生じた時間的空白の理由を理解しようとするため、また、日本人子孫の外交官としての登用が 1990 年代以降、すなわちイタマラチーにおける同集団の歴史が始まってから約 15 年を経て、より頻繁に見られるようになった要因を明らかにするためには、1974 年のフジタの時代と、1990 年のファチマ・イシタニの時代における選考過程の差異と共通点を分析することが重要である。

⁵⁴ INSTITUTO RIO BRANCO. Anuário do Instituto Rio Branco (1989-1990), p. 324. 取得先は、http://www.institutoriobranco.itamaraty.gov.br/images/pdf/Anuarios/anuario_irbr_89-90.pdf (2021 年 3 月 21 日取得) である。

⁵⁵ ファチマ・ケイコ・イシタニは、1990 年に外交官採用試験に合格し、翌 1991 年にリオ・ブランコ学院の外交官養成課程 (CPCD) に入学した。2020 年には一等公使 (大使階) に昇進し、同職に就任した初の日本人子孫女性として、ブラジル外交史における画期的な業績を成し遂げた。

⁵⁶ INSTITUTO RIO BRANCO. Anuário do Instituto Rio Branco (2020). 取得先は、<http://www.institutoriobranco.itamaraty.gov.br/images/pdf/Anuarios/anuario-2020.pdf> (2021 年 3 月 21 日取得) である。

表④ フジタとファチマ・イシタニの選考過程の比較

	フジタの試験（1974）	ファチマ・イシタニの試験（1990）
募集人員	30 名（ただし最終合格者は 12 名のみ）	20 名（全員が充足）
受験年齢（下限／上限）	19 歳／30 歳	20 歳／32 歳
学歴要件	大学在学中（学士号未取得可）	大学在学中（学士号未取得可）
試験形式	予備選考試験：ポルトガル語、フランス語、英語の筆記試験	初期入学試験：ポルトガル語、フランス語、英語の筆記試験
—	健康・身体・心理能力検査、社会調査、面接	健康・身体・心理能力検査。
—	入学試験：世界史、ブラジル史、地理、法律の筆記試験。	最終入学試験：現代国際問題、フランス語、英語の口述試験；ブラジル史、世界史、ブラジル地理、一般地理、法学基礎の筆記試験。

出典：著者作成（*Anuário do Instituto Rio Branco*, 2020 のデータに基づく）

以上の表は、外交官採用試験の過程における時代的变化を理解し、さらに両時期においてそれぞれ二人の日系人が受験した試験の特質を比較するうえで重要な情報を提示している。まず注目すべき点は、募集定員数に関するものである。フジタの時代には 30 名の募集が行われ、これはファチマ・イシタニの時代より 10 名多いものであった。しかし最終的に合格したのはわずか 12 名にすぎず、イシタニの時代のようにすべての定員が充足された状況とは大きく異なっていた。

この点に関して重要なのは、フジタの時代には、試験をより社会一般に開かれ、魅力あるものとするための実質的な改革がまだ導入されていなかったことである。すなわち、社会調査や面接といった、きわめて主観的な性格をもつ選抜過程が依然として存在しており、これらは長らく、ブラジル外交部のエリート的集団へのアクセスを特定の候補者に制限する機能を果たしていたのである。

これに対して、ファチマ・イシタニが合格した時期の選抜過程を見ると、フジタの時代と比較して大きな変化は少ないものの、面接や社会調査が姿を消している点は特筆される。これら二つの選抜手段は実際には 1983 年まで継続され、その後「一般評価試験」および「外交官適性試験」に置き換えられたが、これらも長くは存続しなかった。要するに、1975 年のフジタ合格以降、選抜過程においてブラジル社会全体に対して実質的なアクセス条件を拡張するような大幅な変化はほとんど見られず、制度の排他的性格は 20 世紀末に至るまで持続した。その後ようやく、イタマラチーおよびブラジル政府による人材登用の民主化に向けたより大きな姿勢が観察されるようになったのである。

しかしながら、ここで強調すべきは、口述試験、面接、社会調査試験といった選抜過程が「黄色人種」に対して特定の差別的であったと結論づけようとするものではないという点である。むしろ指摘したいのは、イタマラチーの入省における障壁は、教育的背景に関わる厳格な基準の下に構築されていたのみならず、必ずしも客観的とはいえない選抜基準にも依拠しており、その結果、イタマラチー内部の同質性を維持し続ける仕組みとして機能していたことである。かかる制度は、実際には特定の人種集団、なかでも非白人集団を排除することにつながり、長期にわたり日系人の外交官としての参入率が低く抑えられてきた要因の一つであったと考えられる。

ブラジル社会における外交官採用試験への関心の高まり、ひいては日系人を含む他集団の参加の拡大を具体的に示すために、以下の表は、1974年（フジタ受験年度）から1990年（ファチマ・イシタニ受験年度）までのイタマラチーにおける受験者数および合格者数の推移を示すものである。

表⑤ 1974年から1990年にかけてのイタマラチー受験者数および合格者数

年度	受験者数	合格者数
1974	238	12
1975	240	34
1975*	293	26
1976	490	20
1977*	181	13
1977	665	32
1978*	204	10
1978	797	52
1979	974	33
1980	918	36
1981	1.194	37
1982	1.428	35
1983	797	34
1984	914	44
1985	893	20
1986	661	15
1987	554	11
1988	779	13
1989	1.098	24
1990	659	21

キャプション：*外交官職への直接採用試験

出典：Anuário do Instituto Rio Branco, 2020.

以上の表から読み取れるように、この期間において年間の受験者数は相対的に大きな規模には達しておらず、その平均値も大きく変動することなく、概ね千名未満にとどまっていた。ただし、1981年および1982年に限っては、試験会場都市としてマナウスおよびベレンが新たに加えられたことにより、受験者数の増加が観察された。

新都市の追加に関しては、募集試験の実施地域の拡大が、年月を経るごとにリオ・デ・ジャネイロやブラジル以外の地域からの受験希望者の関心を高め、結果として受験者総数に影響を与えたことも指摘に値する。

これらの数値は、イタマラチーがその人員構成へのアクセスを拡大しようとした制度的変更に関して先に述べたことを裏付けるものであり、実際にブラジル社会のより広範な層が外交官職に関心を示すようになったのは、1990年代以降であったことを示している。この傾向は、同時期における制度的措置、すなわち口述試験や面接の廃止、アフロ系子孫に対するアファーマティブ・アクション（割当制や奨学金の付与）の導入、女性の入省促進とその地位向上への取り組みなど、排除的性格を有していた制度を緩和・是正する政策の実施と並行して、あるいはその結果として生じたものと考えられる。

さらに、これらの施策と志願者数増加との関係性をより明確に示すために、以下の表は 1991 年から 2019 年までの受験者数および合格者数を示している（出典は外務省が公開した最新の *Anuário do Instituto Rio Branco*、『リオ・ブランコ学院年鑑』、による）。

表⑥ 1991 年から 2019 年にかけてのイタマラチー受験者数および合格者数

年度	受験者数	合格者数
1991	955	22
1992	757	22
1993	633	23
1994	850	29
1995	545	24
1996*	2.358	35
1997	2.078	30
1998	1.798	25
1999	2.556	20
2000	2.410	25
2001	3.097	32
2002	3.080	27
2003-1	5.791	39
2003-2	2.660	23
2004	2.800	29
2005	6.635	30
2006	6.308	100
2007	8.667	101
2008	8.228	115
2009	9.196	109
2010	8.869	108
2011	7.180	26
2012	6.423	30
2013	6.492	30
2014	4.151	18
2015	6.003	30
2016	4.925	30
2017	5.939	30

2018	5.294	26
2019	6.411	20

キャプション：＊1996 年以降、外交官職への入省は外交官キャリア採用試験（CACD）を通じて行われる。

出典：Anuário do Instituto Rio Branco, 2020.

1990 年代、すなわちファチマ・イシタニが外務省試験に合格した時期は、それ以前の制度的枠組みに大きな変化がもたらされた時期であり、応募者数に顕著な増加が見られる。とりわけ 1996 年以降、外交官キャリア採用試験（Concurso de Admissão à Carreira de Diplomata, CACD）の名称が正式に採用され、外交官養成制度における入省形態が刷新されたことがその契機となった。この変更により、従来の制度に比べて大きな特徴として、リオ・ブランコ学院における研修期間中であっても給与を受け取りつつ、初任官である三等書記官として直接任用される仕組みが導入された。

さらに、この時期には他の大幅な改革も実施された。すなわち、2003 年には口述試験や面接試験が完全に廃止され、2004 年には身体・心理検査も除外され、これらは最終合格後、公務員任用時の前提条件としてのみ実施されることとなった。

以上の制度改革を踏まえると、20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて、イタマラチーが打ち出した施策が受験者層の特性に大きな影響を与えたことが理解できる。この文脈において、日系人の外交官としての参加が本格的に増加したのは 20 世紀末以降であり、1975 年にフジタが初めて合格して以降、しばらくの間は断続的であったといえる。

いずれにせよ、外交官としての日系人の進出に関しては、フジタの先駆的な合格から次世代以降の継続的な合格に至るまでの時間的「空白」には、他の重要な要因も作用していたと考えられる。その一因として、イタマラチーが長らく「閉鎖的」な機関と見なされており、多様性を推進する具体的な施策を積極的に導入するに至ったのは 20 世紀末のことであった点を挙げるができる。

図②② エジムンド・ススム・フジタとセシリア・キク・イシタニ、イタマラチーにて（1996年）



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

クラウディア・イシタニがリオ・ブランコ学院の試験に合格した際、2004年の *São Paulo-Shimbun*⁵⁷は、外交官としてのキャリアにおける日系人の存在が依然として極めて限定的であり、その最大の代表的人物が、当時イタマラチーにおいてアジア・オセアニア局長を務めていたエジムンド・ススム・フジタ大使であると強調していた。

さらに、セシリア・イシタニは、長きにわたり外交官という職業はエリート的なものと見なされ、そのため多くの日系人が「この選ばれた集団に加わる可能性すら考慮しなかった」と指摘している。そして「フジタ大使によって開かれた先例、さらにファチマ・イシタニ参事官による後続の活躍が、この認識を解体する助けとなった」（Ishitani, 2008, p. 97）と述べている。

このように、イタマラチーがより民主的かつ代表性を持つ機関であることを示そうと模索していた時期に、日系人初の女性外交官の誕生と、2002年に一等書記官へと昇進したフジタの顕著な業績が、他の日系人にとって外交官という職業を志す契機となった。それにより、20世紀から21世紀への転換期、さらには今日に至るまで、日本人の血を引く新たな外交官が段階的に増加していったのである。

したがって、1975年におけるフジタのイタマラチー合格は、必ずしもブラジル政府による外交官職へのアクセス拡大の試みの一環として位置づけられるものではなく、むしろ当時の特定の歴史的文脈（およびフジタ個人の背景）において成立した事例であったと考えられる。

キャリアの始まり

エジムンド・フジタは、外交官養成課程の在籍中（1975-1976）、1975年9月にリオ・ブランコ学院が実施した外交官職への直接採用試験に応募した。

⁵⁷ SÃO PAULO-SHINBUN. Jovem nikkei conquista vaga em disputada carreira diplomática. São Paulo, 2004.

イタマラチーは 1967 年以來、この直接採用試験を実施していなかったが、1975 年には外交官人事において約 80 名分の欠員が生じていたため、この方式による採用を余儀なくされたのである。フジタはこの直接採用試験に応募し、最終結果において第 2 位という成績を収めた。この成果について、同時期の同僚であり後に大使となったゴンサロ・ジ・バロス・カルヴァーリョ・エ・メロ・ムラオン（Gonçalo de Barros Carvalho e Mello Mourão）⁵⁸は、当時フジタの経歴を知り強い印象を受けたことを次のように回想している。

私たち一人ひとりには友人に関する最初の記憶というものがあります。私にとってエジムンドの最初の記憶は、大きな敬意と感嘆の念でした。エジムンドは、私が初めて心から尊敬した将来の外交官だったのです。私は直接採用試験の準備をしていました。その試験には最終的に合格することになるのですが——「最終的に」と述べるのは、私がそれ以前にすでに 2、3 回も受験して失敗していたからです——そのとき、誰かが、リオ・ブランコ学院の 1 年生の学生が、同じ直接採用試験を受けるらしいと教えてくれました。私は驚嘆しました。というのも、すでにリオ・ブランコ学院で学んでおり、私が 3 度経験したあの困難をすでに乗り越えていた人物が、改めてすべてを最初から勉強し直して、もう一度試験に挑戦する意欲と忍耐を持っているとは思いませんでした。実際、エジムンドはそうした挑戦をやり遂げ、試験に臨み、我々の同期の中で 2 位という結果を残しました。私は彼と会う前から、すでに彼を並外れた人物だ感じていたのです。⁵⁹

外交官職への直接採用試験に合格したことにより、フジタは養成課程の第 1 学年のみを修了し、外交官としての職務を開始するために外交官養成課程を最後まで履修する必要はなかった。もっとも、直接採用試験に合格していたにもかかわらず、フジタはリオ・ブランコ学院第 1 学年を首席で修了している。

⁵⁸ ゴンサロ・ジ・バロス・カルヴァーリョ・エ・メロ・ムラオンは、キャリア外交官であり、現職の大使である。1975 年に実施された外交官職への直接採用試験において、エジムンド・ススム・フジタとともに合格した。

⁵⁹ 2016 年 4 月 12 日、エジムンド・ススム・フジタの逝去に際し、ムラオンより追悼の辞が捧げられている。

図②③ 1976 年における外交官任命の辞令

MINISTÉRIO DAS RELAÇÕES EXTERIORES DEPARTAMENTO GERAL DE ADMINISTRAÇÃO PORTARIA DE 9 DE FEVEREIRO DE 1976 O Chefe do Departamento Geral de Administração, de acordo com o De- creto número 75.648, de 23 de abril de 1975, resolve: <i>Mandar servir em Brasília</i>	
1) Márcio Florêncio Nunes Cam- braia	10) Maria Aparecida Lopes Nahu
2) Edmundo Sussumu Fujita	11) Eduardo Augusto Ibiapina de Seixas
3) Fausto Martha Godoy	12) Antonio José Maria de Souza e Silva
4) Maria Lucy Gurgel Valente	13) Mario Vilalva
5) Gonzalo de Barros Carvalho e Melo Mourão	14) Gustavo Mesquita de Siqueira
6) Maria Ercília Borges Alves	15) Carlos Henrique Cardim
7) Paulo Cesar de Oliveira Campos	16) Gilberto de Almeida Ferreira
8) Miguel Gustavo de Paiva Torres	17) Alirio de Oliveira Ramos
9) Paulo Tarrisse da Fontoura	18) Michael Patricius de Almeida Geggin
	19) Josal Luiz Pellegrino
	20) Adalnio Senna Ganem
	21) João Batista Cruz
	22) René Pinto de Mesquita Júnior
	23) Carlos Alfredo Lazary Teixeira
	Terceiros-Secretários, da Carteira de Diplomata, procedentes do Rio de Janeiro. — <i>Dário Castro Alves.</i>

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

直接採用試験に合格した後、フジタは 1976 年 2 月 9 日付で外務省の辞令によりブラジリア勤務を命じられた。

フジタは当初、国際連合（ONU）課あるいは外務省内部の経済関係部局への配属を希望していたが、最初の任務は別の部署への配属であった。本人の証言によれば、「彼らはこう言ったのです。『いや、アジア・オセアニア局に行きなさい。君はそこで大いに役立つだろう』と」（2016 年 3 月 6 日インタビュー）。

興味深いことに、その年に新たに任命された三等書記官の中で唯一アジア系の姓を持っていたフジタは、アジア・オセアニア局の補佐官としての職務に任じられた。

図②④ 1976 年におけるアジア・オセアニア局配属辞令

MRE - Boletim de Serviço 1577/10.05.1976/página 2.

1. ATOS PUBLICADOS NO DIÁRIO OFICIAL (cont.)

Em 05 de maio de 1976:

- Portaria de designação de Romero Cabral da Costa Filho, Terceiro-Secretário, para a função de Assistente da Divisão de Ciência e Tecnologia, código DAI-112.2, concedendo-lhe dispensa da função de Secretário Administrativo do Cerimonial, código DAI-111.2.
- Portaria de designação de Márcio Florêncio Nunes Cambraia, Terceiro-Secretário, para a função de Assistente da Divisão da Europa II, código DAI-112.2.
- Portaria de designação de Edmundo Sussumu Fujita, Terceiro-Secretário, para a função de Assistente da Divisão da Ásia e Oceania, código DAI-112.2.

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

フジタは 1979 年に初の在外勤務を命じられるまで、ブラジル国内においてアジア・オセアニア局の補佐官としての職務を担った。その間、主として日本および中国に関する業務に従事し、当時外務大臣アントニオ・フランシスコ・アゼレド・ダ・シルヴェイラ（Antônio Francisco Azeredo da Silveira, 1917-1990）の顧問の一人であったロナルド・サルデンベルグ（Ronaldo Sardenberg, 1940-）参事官と出会っている。

また、1977 年には国際連合主催の第 13 回国際法セミナー（ジュネーヴ）に参加し、さらに 1978 年にはシゲアキ・ウエキ（Shigeaki Ueki, 1935-）⁶⁰ 鉱山・エネルギー大臣を団長とする対中国ブラジル通商使節団に随行するなど、国際的な行事にも積極的に関与した。

シゲアキ・ウエキ

シゲアキ・ウエキが率いた使節団の目的は、ブラジルと中国との商業交流および協力関係を一層強化することであった。この対中接近は、当時のエルネスト・ガイゼル大統領政権が採用した「普遍的かつ責任ある実用主義」と呼ばれる外交政策の産物であり、その政策は当時ブラジルの貿易相手国の拡大を志向していた。

その文脈において、両国の外交関係は 1974 年に樹立されたばかりであり、ウエキが率いたこの使節団は、1977 年に締結された「ブラジル・中国通商協定」に結実した。同使節団には、外務省、鉱山・エネルギー省、全国工業連盟（CNI）の代表者に加え、ペトロブラス社やヴァーレ・ド・リオドセ社などの大企業の経営幹部や社長らも参加した。エジムンド・フジタも外務省の代表として他の 2 名の外交官とともに同使節団に加わり、ブラジルの対外政策を担う立場で中国を訪問した。

この訪中は、フジタにとって、日本人の子孫として外国においてブラジルの国益を擁護するという状況に直面した数多くの出来事の一つでもあった。彼の外交官としての経歴の中には、たびたび、外見的特徴により誤解を受け、「自分は日本人ではなくブラジル人である」と説明し、ブラジルにおける民族的多様性を解説せざるを得ない場面が存在したのである。

妻リガヤによれば、この中国訪問の際、夫フジタは滑稽な体験をしたという。中国到着時、フジタを迎えた委員会の人々は大いに困惑し、「使節団の団長は東洋人の顔つきで、外務省の職員もまた東洋人の顔をしていた。そこで冗談まじりに、『ここに来たのは日本の使節団なのか、それともブラジルの使節団なのか？』と尋ねた」という（2018 年 9 月 22 日インタビュー）。

この訪中から帰国した直後の 1978 年 12 月 11 日、フジタは功績に基づき二等書記官⁶¹に昇進した。翌 1979 年には、初の在外勤務先として「在ロンドン国

⁶⁰ シゲアキ・ウエキは 1969 年から 1974 年にかけてペトロブラス社の商業・財務担当取締役を務めた。1974 年にはエルネスト・ガイゼル大統領の招きにより鉱山・エネルギー大臣に就任し、1979 年まで同職を担った。その後、1979 年から 1984 年にかけてペトロブラスの初代民間人社長を務めている。さらに、コメディアンのコ・アニジオ（Chico Anysio, 1931-2012）が彼を題材に創作した人物によって、ウエキは「ガイゼルの日本人ちゃん（*o japonês do Geisel*）」として広く知られるようになった。

⁶¹ 外務省の公式サイトによれば、外交官の初任官職は三等書記官である。その後の昇進段階として、二等書記官、一等書記官、参事官、二等公使、そして一等公使（大使）が位置づけられている。

際機関ブラジル常駐代表部（Representação Permanente do Brasil Junto às Organizações Internacionais em Londres, REBRASLON）」に配属され、同代表部を率いていたジョアン・パウロ・ダ・シルヴァ・パラニョス・ド・リオ・ブランコ大使（João Paulo da Silva Paranhos do Rio Branco, 1922-2008）の下で勤務することとなった。

ロンドン

1978 年末に二等書記官へ昇進した後、フジタは他の同僚外交官と同様に、国外勤務への着任準備を進めていた。大使館や領事館における勤務への配置換えは、外交官本人の希望のみで決まるものではなく、複数の要因に依存している。具体的には、各地の在外公館において欠員が生じた場合、その空席を充当する形で職員の配置換えが行われる。

このような過程を踏まえ、フジタは東京の在日本ブラジル大使館に生じていた空席の充当を目指していた。日本語の知識を有し、日本研究を深めていた彼にとって、日本で勤務することは大きな夢であった。日本に永住する意図や退職後に同地に留まる考えはなかったものの、祖先の地においてブラジル外交官として職務を果たすことを強く望んでいたのである。そのため、彼は東京勤務の希望を正式に表明し、当時の在日ブラジル大使ロナウド・コスタ（Ronaldo Costa）に対しても事前に接触を行っていた。

しかしながら、同年、外務省行政局（DA）の局長であったエドゥアルド・モレイラ・オザナ（Eduardo Moreira Hosannah）大使の決定により、別の人物が東京大使館に任命されることとなった。フジタとロナウド・コスタ大使の往復書簡（図 25）には、この決定に対する両者の驚きと落胆の念が明確に表れている。

ロナウド・コスタ大使は 1979 年にフジタへ送った書簡において、すでに東京赴任のための配置換えが進行しており、その対象者がヴァルデマール・カルネイロ・レオン・ネット（Valdemar Carneiro Leão Neto）⁶²である旨を説明している。

⁶² ここで注目すべきは、ヴァルデマール・カルネイロ・レオン・ネットが 1987 年、リオ・ブランコ学院高等研究課程において『ブラジルにおける日本人移民の危機（1930-1934）：外交的側面（*A crise da imigração japonesa no Brasil, (1930-1934): contornos diplomáticos*）』と題する論文を提出したことである。この研究は日本研究分野においてきわめて重要な業績とみなされており、ブラジルにおける日本人移民の多くの重要な側面を理解するうえで主要な参考文献の一つとなっている。

図②⑤ ロナウド・コスタ大使による書簡（1979年）

Tôquio, em 24 de abril de 1979.

Meu caro Edmundo,

Horas depois de falar com você, fui surpreendido com um telex do Hosannah pelo qual estava indicando o nome do Waldemar Carneiro Leão para vir para Tôquio. Não sei se a remoção já está sendo processada ou não. Suponho que sim, dados os termos em que ele colocou a questão.

Imediatamente falei com o Carbonar, a fim de esclarecer a sua situação. Disse-me o Carbonar que não há, da parte do Gabinete, nenhuma objeção à sua vinda para aqui. Tratar-se-ia apenas de questão administrativa da alçada do DA.

Assim sendo, voltei a me comunicar com o Hosannah, pedindo para que você seja considerado para uma das próximas vagas, já que está prestes a abrir-se outra vaga na Embaixada. Ainda não tenho resposta dele, mas confio que prevalecerá o bom senso e o deixarão vir para aqui. Parece-me um total absurdo, como já lhe disse, fazer esse tipo de discriminação, se bem que a intenção seja boa.

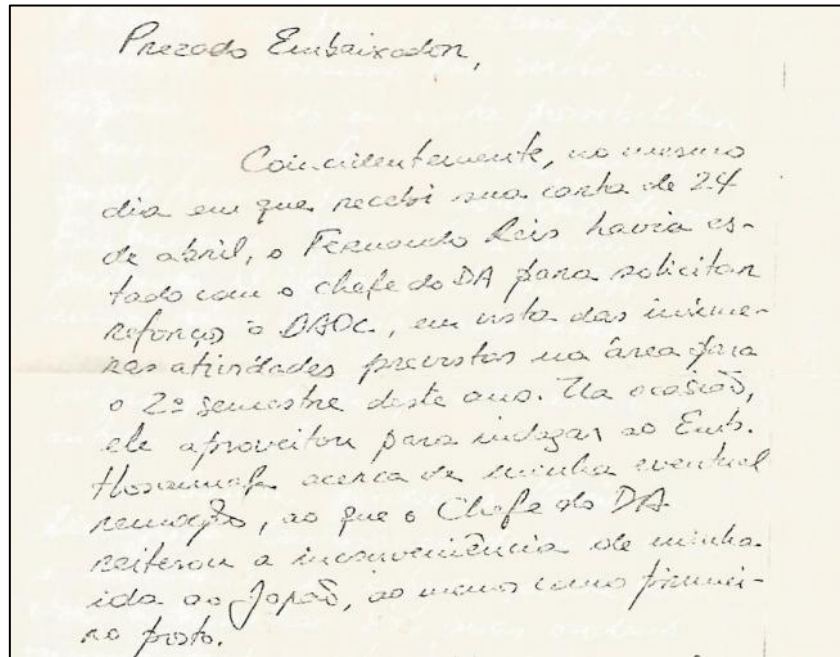
Pode ficar certo de que, mais do que nunca, tenho o maior interesse em tê-lo aqui na Embaixada em Tôquio. Será um grande prazer poder ter a sua ajuda e sua dedicação, já de mim tão conhecidos.

Logo que tiver outra notícia, voltarei a me comunicar com você.

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

その時点においては、フジタが日本における在ブラジル大使館の次回の欠員に対する希望を表明する以外、なすべきことはほとんど存在しなかった。フジタはロナウド・コスタ宛ての返信書簡（図 26）において、この状況を理解している旨を示し、外務省に対して自らの要望が受け入れられなかった理由を問いただそうと試みたものの、その努力は実を結ばなかったことを述べている。

図②⑥ フジタからロナウド・コスタ宛ての書簡（1979年）



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

したがってフジタは、当時日本への赴任を強く主張することは賢明ではないと判断した。というのも、そのような態度は誤って解釈され、場合によっては在日ブラジル大使であったロナウド・コスタにとっても不都合な状況を生じかねないと考えられたからである。さらに、フジタの書簡によれば、外務省の管理部は、彼の最初の海外勤務先を日本とすることは不適切であるとの見解をすでに明確にしていた。フジタ自身もこれを大きな異議なく受け入れ、その時点では自分よりも日本勤務に相応しい人材がいると述べている。

この結果、1979年5月23日付でブラジル外務省より発出された省令により、ヴァルデマール・カルネイロ・レオン・ネットは在ロンドン・ブラジル大使館から在東京・ブラジル大使館へ転任することとなった。そして、ロンドンで生じた欠員を補うかたちで、同じ省令においてエジムンド・フジタは外務本省から在ロンドン・ブラジル大使館へと異動を命じられた。

フジタとリガヤは、1979年から1982年までロンドンに居住した。初の海外勤務先は当初フジタが希望した場所ではなかったものの、リガヤによれば、このイギリス滞在は夫にとって最も重要な時期の一つであったという。職務面では、ロンドンの任務は多国間性格を有し、コーヒー、サトウキビ、カカオ、穀物を担当する在ロンドン国際機関ブラジル常駐代表部での業務に従事した。

また、ロンドン滞在中にフジタはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンスに進学し、1981年に比較政治学の修士号を取得した。大使館勤務と修士課程の両立は、フジタにとって肉体的・精神的に大きな負担を伴う時期であった。リガヤは、この頃の夫が最も寡黙であったと振り返り、それを過酷な生活の疲労に帰している。彼女の証言によれば、「夫は一日中働き、その後大学に通い、論文執筆に追われていました。[……]レセプションでは、一日の忙しさにもかかわらず社交的義務を果たす必要がありましたが、彼はただ黙って周囲を観察しているだけでした」（2017年4月24日インタビュー）。

フジタは、ロンドンにどの程度滞在することになるのか当初は見通しが立たなかったため、学業に全力を傾注する必要があると述べていた。その結果、彼はわずか一年間で修士課程を修了することに成功した。限られた期間ではあったが、フジタはイギリスの文化的側面に触れることを決して怠らず、同国が有する多様な劇場、美術館、歴史的建造物を積極的に訪れたのである。リガヤによれば、「彼は文化的な側面を決して犠牲にしませんでした。私たちの旅行はすべて文化的、歴史的、そして美食的なものでした」(2017年4月24日インタビュー)という。

このようにして、フジタにとって初の海外勤務は、職業的にも私生活的にも極めて大きな意義を有した。すなわち、ブラジル外交の多国間的業務に直接携わる機会を得たこと、比較政治学の修士号を取得したこと(この時期、彼はブラジルとメキシコ、ならびにブラジルとソ連を対象とした比較政治に関する2著作を執筆している)、さらにイギリスが提供する豊かな文化活動を享受できたことが、彼の人生における重要な蓄積となったのである。

東京

1982年5月7日、フジタは在日ブラジル大使館において二等書記官として勤務することを命じられ、1985年まで同職を務めた。当初は念願であったロナウド・コスタ大使の下で働く予定であったが、同大使はカナダ勤務に転任となり、フジタはルイズ・パウロ・リンドンベルグ・セッチ(Luiz Paulo Lindenberg Sette)大使の指揮下で職務を遂行することとなった。

東京での任務は、フジタが経済分野において知見を深める契機となった。1970年代初頭のブラジルは経済危機に直面し、それが後に「ブラジル債務危機」および1980年代の「失われた十年」として知られる事態へとつながった。この背景には、海外からの投資資金の不適切な運用があった。こうした困難な時期、ブラジル外交は深刻な課題に直面し、フジタもまた国外におけるブラジル代表として、ブラジル経済や国際的な金融義務履行能力に関する重要な問題に取り組んだのである。

また、東京勤務時代のフジタを特徴づける要素のひとつは、その日本語能力であった。ブラジル外交団の中で唯一、日本語を流暢に操ることのできた彼は、3紙の新聞を定期購読し、毎朝必ず目を通して一日の業務準備に充てていた。そして、大使館に出勤すると、注目すべき記事を切り抜きポルトガル語に翻訳してリンドンベルグ・セッチ大使の机上に置くことを日課としていた。

しかしながら、日本語に堪能であり日本文化に関する知識も豊富であったにもかかわらず、日系人外交官としてのフジタは自身のエスニシティに起因する困難を経験することもあった。リガヤの証言によれば、「彼は顔立ちは日本人で、日本語も流暢でしたが、日本的な習慣は持っていませんでした。手を差し出して握手をし、頭を下げることはなかったのです。そのため、人々は彼を誇り高い人物だと思ってしまったのです」(2017年4月24日インタビュー)という。

すでに本書で言及したとおり、フジタは自らを「二つの文化の狭間にある存在」として認識していた。自身が東洋文化から大きな影響を受けていることを理解しつつも、同時に西洋的とされる習慣や価値観を有している自覚もあった。そのため、祖先の地に到着した際、外見からは日本人と見なされつつも、その

行動や所作によって自らが「異国人」であることを実感させられるのであった。したがって、多くの移民的あるいはディアスポラの経験に見られるように、「帰還の神話」⁶³はフジタに対し、当初は日本への帰属意識や親近感を喚起したものの、実際に日本で生活する中で自身が「異邦人」であることを再確認させられる契機となったと解釈し得よう。

日本において疑問や不明な点が生じた場合、フジタは自身で問いかけるのではなく、妻マリア・リガヤに代わりに尋ねてもらうことがあった。例えば、ある漢字が読めなかった際、フジタは「自分で質問すると知らないことを批判されかねないので、彼女が尋ねる方が望ましい」と述べていた。握手の習慣など、このような行為は、スチュアート・ホール（1997）が提示する「社会的行為」の概念に照らして理解することができる。ホールによれば、人間は社会的行為を通じて意味体系を解釈し、その体系やコードが総体として「文化」を構成する。したがって、すべての社会的行為は「文化的」行為であるとされる。

この観点からすれば、日本滞在中にフジタが行った社会的行為は、彼が当該文化に属する存在ではないことを示していた。同時に、それは彼にとって、自身のエスニシティに関わる問いへのひとつの応答でもあった。すなわち、リガヤの証言によれば、フジタはこうした局面において、国外におけるブラジル外交官としての行動を通じ、自らのブラジル人としてのアイデンティティを確認したのである。

このように、祖先から受け継いだ伝統的要素を保持しつつブラジル人であると自己を位置づけることによって、彼の混成的、あるいはシンクレティックなアイデンティティは、異なる文化間を往還しつつ、より自然にその狭間に自らを認識する契機となった。

家庭生活の側面においても、日本での滞在はフジタにとって家族との絆を深め、祖先の歴史に再接近する機会をもたらした。父方の系譜では、フジタの父藤田芳郎の姉が、藤田家がブラジルへ移住した際に日本に残っており、外交官は在日中、その叔母や従兄弟たちを訪ねる機会を得た。

他方、母方の系譜では、当時日本で留学生として滞在していた従姉クララ・ミエ・ヤマムロの助けを得て、長野県に居住していた親族と出会うことができた。大使館の協力のもと、戸籍などの記録を手掛かりにフジタは山室家の一部を特定することに成功したのである。マリア・リガヤによれば、「とても感動的な再会でした。大変温かく迎えてくださり、祖先の墓を案内していただき、戦後、ブラジルの家族が日本の家族に薬や食糧を送った際に交わされた手紙を見せてくれました」と語られている。

さらに、在東京ブラジル大使館勤務中、フジタはブラジルと日本外交史における重要な出来事に関わる機会を得た。それは、1984年に元ブラジル大統領ジョアン・バプチスタ・ジ・オリヴェイラ・フィゲイレード（João Baptista de Oliveira Figueiredo, 1918-1999）が日本を公式訪問した際のことである。

⁶³ SAFRAN, William. *Diasporas in modern societies: Myths of homeland and return*. In: *Diaspora*. vol.1, n. 1, spring 1991, p. 83-99 を参照されたい。

図②⑦ 1984年フィゲイレード大統領歓迎会へのフジタ宛招待状



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

フィゲイレード大統領の東京公式訪問は 5 日間にわたり、その日程は主として経済的性格を有していた。当時 5 億ドル規模の融資要請がその中心的課題に含まれていたほか、経済交流に加え、両国は若い学生間の交流を深化させる意向を示し、さらに双方の国において文化的行事を実現することも企図された。フジタとフィゲイレード大統領の会見の様子は、以下の写真に記録されている（図 28）。

図⑳ フィゲイレード大統領の訪日



キャプション：ファーストレディ、ドウルセ・フィゲイレード (Dulce Figueiredo, 1928–2011) の傍らで、エジムンド・ススム・フジタとジョアン・バチスタ・フィゲイレード大統領が握手を交わす場面。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

Folha de São Paulo, 1984 年 5 月 24 日

赤坂離宮に宿泊したブラジル前大統領フィゲイレードは、当時の日本国天皇・昭和天皇と会見した。その席上、天皇は、日本国民がブラジルに対して特別な親近感と愛情を抱いている旨を述べ、さらに「日本人移民およびその子孫は、良きブラジル市民としてブラジルの経済的・社会的・文化的発展に参画し、貢献してきた」⁶⁴と言及した。

天皇のこの発言は、ブラジル社会の中で重要な地位に到達した数多くの日系人の事例に裏付けられるものであり、実際、当時のブラジル公館自体においても、日系人外交官が勤務していたことにより具現化されていた。

モスクワ

東京のブラジル大使館での勤務を経て、フジタは 1985 年に一等書記官としてモスクワのブラジル外交代表部に転任した。ここで彼は、後に国際連合（ニューヨーク）および共和国大統領府戦略問題事務局（SAE）においても共に活動することになるロナウド・モタ・サルデンベルグ大使の指揮下で勤務した。

モスクワ勤務期間中、彼の職務は主として外交上の政治的側面に関連していた。当時のソ連は、米国との軍拡競争の終焉やペレストロイカ・グラスノスチ

⁶⁴ 1984 年、ブラジル前大統領ジョアン・フィゲイレード公式訪日時における昭和天皇の言葉。
取 得 先 は、
https://www.funag.gov.br/chdd/images/Resenhas/RPEB_41_abr_mai_jun_1984.pdf (2021 年 5 月 21 日取得) である。

政策の推進といった多様な変革期にあり⁶⁵、フジタはその渦中において政治動向に直接関与する任務を担った。

サルデンベルグ大使はそれ以前からフジタを知っており、モスクワでの任務は両者の関係をさらに深める契機ともなった。大使はフジタへの信頼を強調し、困難な政治状況における彼の存在の重要性を次のように評価している。「彼は即座に安心感と信頼感を与えてくれる人物であった。[……] 政治的困難のある地域においては、大使館の一部が堅固で強固であることが不可欠である」⁶⁶。

その後、国連安全保障理事会および戦略問題事務局における両者の共同作業は、重要な研究成果をもたらした。例えば、フジタによる論文「ブラジルと安全保障理事会——移行期の 10 年についての覚書（1985-1995）（*O Brasil e o Conselho de Segurança: Notas Sobre uma Década de Transição: 1985-1995*）」や、1998 年に戦略問題事務局より公刊されたプロジェクト『ブラジル 2020』（図 29）などが挙げられる⁶⁷。

図 29 プロジェクト「ブラジル 2020」に関する新聞記事



出典： *Jornal Notícias do Japão*, São Paulo, 1998 年。エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

モスクワでの任務期間を終えた後、フジタはブラジルに帰任し、ブラジリアにて 2 年間居住した。その後、1990 年から 1995 年にかけてニューヨークに移り住み、国際連合安全保障理事会において活動した。そこで彼は、多国間主義

⁶⁵ 1985 年、ソビエト連邦において最後の最高指導者となったミハイル・ゴルバチョフの下で「ゴルバチョフ時代」が幕を開けた。同時期には、経済再建（ペレストロイカ）や政治的透明性（グラスノスチ）といった、現代化を目指す重要な試みが推進された。

⁶⁶ ロナルド・モタ・サルデンベルグによるインタビュー（2018 年 9 月実施）

⁶⁷ 『ブラジル 2020』は、ブラジルの未来についての省察を目的とした文書である。本研究は 1998 年 7 月に、当時戦略問題事務局長官であったロナルド・サルデンベルグおよび同局分析・評価副長官であったエジムンド・フジタの共同監修のもとで公刊されたものであり、2020 年におけるブラジルのありうる諸シナリオを提示することを意図していた。取得先は、<https://issuu.com/sae.pr/docs/ebook-brasil-2020>（2021 年 7 月 18 日取得）である。

および核兵器不拡散に関連する諸課題に一層深く関与し、これらは彼の外交官としての経歴において長らく主要な関心領域を構成することとなった。

リオ・ブランコ学院における学位論文

フジタはリオ・ブランコ学院の第 26 期高等研究課程 (Curso de Altos Estudos, CAE) に参加し、参事官から二等大使への昇進要件として、「非拡散体制における権力と知の方程式 (*As equações do poder e do saber nos regimes de não proliferação*)」と題する論文を執筆した。

リオ・ブランコ学院の高等研究課程は、1960 年代初頭に制定された 1961 年 7 月 14 日付の法律第 3.917 号によって正式に創設されたものであり、当初は創設から 5 年後以降、一等公使への昇進に必要とされる条件と規定されていた。しかし、実際に高等研究課程が施行されたのは 1977 年 4 月 20 日付の政令第 79.556 号によってであり、その際の規定は若干修正され、昇進要件は一等公使ではなく二等大使への昇進に適用されることとなった。

リオ・ブランコ学院年鑑によれば、2020 年後期までに外交にとって重要な多様なテーマを扱った 796 本の論文が承認されている。1979 年に初回が実施されて以来、高等研究課程は中断することなく継続しており、その課程は分析的かつ提言的な性格を兼ね備えた論文の作成を必須としている。この論文はブラジル外交に資する実践的意義を有するか、あるいは外交思想およびブラジル史学に新たな貢献をもたらすことが求められる。要約すれば次のとおりである。

候補者はまず論文計画を提出し、諮問委員会による承認を得た後に執筆と提出が認められる。論文は本文のみで 150～200 頁を基準とし、参考文献および付録は含まれない。審査は一等公使で構成される試験委員会によって行われ、さらに二名の査読者による評価意見に基づいて審査が進められる。試験委員会は論文が口頭試問に進む資格を有するかを決定し、候補者は自らの論文を口頭で発表し、他候補者の試問にも立ち会う。そのほか、会議・セミナー・訪問などの活動が並行して実施される場合もある。試験委員会は特に優れた論文については公刊を勧告することができ、その際には通常アレクサンドレ・デ・グスマン財団によって出版される。⁶⁸

フジタの高等研究課程提出論文は全 164 頁に及び、当時彼が専心していたテーマに即して、いわゆる「非拡散体制」と称される国際的取り決めの機能について考察した。これらの体制は、大量破壊兵器（核兵器・化学兵器・生物兵器）の拡散を防ぐ目的で、高度技術製品の商業的流通を規制するために設けられたものである。フジタの論文は、高度技術品の拡散における「権力」と「知」の相関関係の均衡を模索する提言を行い、その中で「現行の非拡散体制の狭隘な視座を超えて、新たな多国間協力の枠組みを確立し、知のより公平な拡散を促進する必要性」(Fujita, 1993, p. 5) の緊急性を明示したものであった。

⁶⁸ INSTITUTO RIO BRANCO. Anuário do Instituto Rio Branco (2020). 取得先は、<http://www.institutoriobranco.itamaraty.gov.br/images/pdf/Anuarios/anuario-2020.pdf> (2021 年 3 月 21 日取得) である。

フィデルとの会見

米国での任務を終えた後、フジタはブラジルへ帰国し、最初の在外大使としての赴任に至るまでの11年間をブラジリアで過ごした。1995年から1999年にかけて、フェルナンド・エンリケ・カルドーゾ（Fernando Henrique Cardoso, 1931-）政権下で、大統領府戦略問題局の分析・評価次官補として勤務し、ロナルド・サルデンベルグとともにブラジルの将来に向けた戦略的構想の策定に携わった。

このサルデンベルグとの協働による政治的活動の中で、エジムンド・フジタの外交官としての経歴において特筆すべき瞬間の一つとなったのが、戦略問題局勤務中に実現したキューバ訪問であった。

図③⑩ 1995年4月、サルデンベルグとフジタによるキューバ訪問



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

その際、彼らはキューバの元首相フィデル・アレハンドロ・カストロ・ルス（1926-2016）と会談した。この会合では、フジタが大切に保管し、現在では妻リガヤが夫の数多くの思い出深い記録とともに自宅で守り続けている、フィデル・カストロと共に収められた一枚の興味深い写真（図30）が残されている。

大使フジタ

1999年、フジタは大統領府戦略問題局での職務を離れ、イタマラチーのアジア・オセアニア局長に就任し、2005年までその任を務めた。同年、彼はブラジルのインドネシア大使に任命されることとなった。アジア・オセアニア局長としてフジタは、アジア中南米協力フォーラム（FEALAC）の設立において重要な役割を果たした。アジア中南米協力フォーラムは、ラテンアメリカ諸国と東アジア諸国が参加する国際的な協力の場であり、1999年にシンガポールとチリの主導で創設された常設の非公式多国間協力メカニズムである。

当時、ブラジル外務省内部では当該フォーラムの実現可能性に対して一定の懐疑的な見解が存在したものの、フジタはその構想の意義を信じ、実現に向けて献身的に尽力した。2001年、チリのサンティアゴにて第1回会合が開催され、

さらに 2004 年にはフィリピン・マニラで行われた第 2 回会合において、フジタはブラジル代表として参加した。

また、ブラジルとアジアとの関係強化におけるフジタのもう一つの重要な業績として、2001 年に開催された国際セミナー「ブラジルとアジア 21 世紀——新たな地平を求めて」が挙げられる。同セミナーでは、当時外務大臣であった外交官・学者のセルソ・ラーフェル（Celso Lafer, 1941-）が基調講演を行った。

この間、フジタは外交官として最高位に到達し、2002 年には功績に基づき一等公使（ブラジル大使の公式称号）に昇進した。これにより、彼はブラジル初の日系大使となり、日本人社会における先駆性を改めて示すとともに、ブラジル外交史において新たな画期を刻んだ。

図③① フジタの大使任命に関する新聞記事の切り抜き



出典：Jornal Nikkei, 2002 年 12 月 21 日。エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

なお、2005 年にインドネシア駐在大使に正式に就任する以前の 2004 年には、アジア・オセアニア局長として、日本の小泉純一郎首相（当時）のブラジル公式訪問の際に連絡官として活動する機会を得た。

小泉の涙

外務省アジア・オセアニア局長としての職務に従事するなかで、フジタはブラジルと日本との関係強化を推進する方策を提案し、2005 年にブラジルの元大統領ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルヴァが日本を訪問するよう尽力した。また、両国関係を再活性化すべきであるとの主張のもと、「日本はブラジルの実力を認識し、相互の信頼関係を確立する必要がある」との理念を掲げ、当時の日本の小泉純一郎首相のブラジル訪問実現にも尽力した。

当時、日本にとってブラジルは主要な通商関心国の一つであり、小泉首相の訪問は両国間の通商協定締結に向けた重要な意味を有していた。この訪問の特徴は、首相が通常の閣僚や政府関係者のみの随行ではなく、日本の主要経済団体の一つである日本経団連の代表団を伴っていた点にあった。

しかし、経済的・政治的な利害を超えて、小泉訪問を象徴的に記憶させる出来事が生じた。2004年9月14日、小泉首相は随行団とともにサンパウロ州リベイロン・プレートのグアタパラ農場⁶⁹上空をヘリコプターで飛行していた。同地において移民開拓に尽力した日本人移民を追悼するため、花束を投下する予定であった。同行していたのは、当時の在ブラジル日本国大使堀村隆彦、サンパウロ州元知事ジェラルド・アルックミン (Geraldo Alckmin, 1952-)、元農務大臣ロベルト・ホドリゲス (Roberto Rodrigues, 1942-)、そしてイタマラチーのアジア・オセアニア局長エジムンド・ススム。フジタ大使であった。

ヘリコプターから農場を見下ろした際、小泉は芝生に大書された「小泉首相、ようこそ」の日本語標語とともに歓呼する群衆を認め、フジタに彼らが誰であるかを問いただした。フジタが「ブラジルに渡った最初期移民の子孫たち」であると答えると、小泉は感極まり、「彼らに直接会うことはできないか」と尋ねた。公式日程には含まれていなかったが、フジタは即座に「ご希望であれば可能です」と応じ、堀村大使が狼狽の表情を示すなか、小泉の要望に従って着陸を指示した。⁷⁰

小泉首相がヘリコプターを降りて群衆に歩み寄ると、随行の2機の護衛ヘリは状況を理解できず上空を旋回し続けた。フジタとホドリゲスが同行するなか、小泉は人々と握手し、抱擁を交わし、感謝の言葉を述べた。その交流は約30分にわたり、小泉はグアタパラの日系人に「ブラジルで幸せか」「社会に統合され、充実しているか」と尋ね、彼らは熱意をもって肯定的に答えた。

フジタは *Nippo-Brasil* 紙に寄稿した記事において、この場面を次のように描写している。

それは熱烈な歓迎であった。ヘリコプターが野に降り立つや、人々は日本の指導者を一目見ようと我先に駆け寄った。老翁は地にひざまずき、幾度も頭を地につけて拝礼し、まるで古代封建の儀式のごとくであった。人々は「万歳！万歳！」と叫び、小泉首相は明らかに感極まり、近寄る者すべてを抱擁し、写真に収まった。⁷¹

このように、フジタが「プロトコルを破り」、小泉首相を群衆のもとに導いたことによって、同首相にとって忘れ得ぬ体験が実現した。翌日、小泉はブラジル大統領ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルヴァとの首脳会談の場で、この出来事を参会者に語り、「先駆移民の子孫との出会いに胸を打たれ、涙がこみ上げた」と述懐した (Fujita, 2016, p. 17)。

⁶⁹ グアタパラ (Guatapar ) は、1908年に笠戸丸で渡航した最初期の日本人移民が送られたサンパウロ州の地である。

⁷⁰ 出典は、*Jornal Nippo-Brasil*, 2004年掲載記事より。資料提供：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

⁷¹ 出典は、*Jornal Nippo-Brasil*, 2004年掲載記事より。資料提供：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

図③② グアタパラでの出来事を回想し、感涙する小泉首相（2004 年）



出典： *Jornal Nippo-Brasil*, 2004 年。エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

ルーラ大統領との会見後、小泉はブラジル日本文化協会の講堂における式典において、集まった日系ブラジル人社会に対し先の出来事を語った。その場で再び感極まった元首相は、約 1,200 名の聴衆の前で涙を流し、列席者たちを驚かせると同時に深い感動を与えた。小泉は演説の中で「ブラジルは私たちにとって外国の国であるが、私の心に最も近い国である」と述べている。セルソ・ミン（Celso Ming）が 2004 年に *Nippo-Brasil* 紙に寄稿した記事において「サムライの涙」（Ming, 2004）と表現されたその情景は、現実的かつ象徴的な意味を有し、日系ブラジル人社会がブラジルにおいて達成した高度な統合の度合いを直感させるものである（Fujita, 2016）。

小泉純一郎元首相とエジムンド・フジタ大使が直接に関与したこの出来事は、フジタが日伯関係における重要な役割を担う存在であったことを示す数多の場面の一つを構成している。小泉のブラジル訪問は極めて良好な成果をもたらし、その翌年の 2005 年にはルーラ大統領が公式に日本を訪問し、両国は「日伯経済関係活性化共同計画」と呼ばれる経済協定に署名した。

かくして、エジムンド・フジタがアジア・オセアニア局長として務めた最終年は、ブラジルと日本との強固な接近、ならびにグアタパラ農場での出来事によって特徴づけられることとなった。そして 2005 年、日系人である同氏はインドネシア駐在ブラジル大使に任命され、外交官としての最高位にあたる一等公使（大使）として初の在外任務に就くこととなった。

ジャカルタ

イタマラチーにおいてアジア・オセアニア局長を 5 年間務めた後、フジタはカルロス・エドゥアルド・フォンセカ・コスタ（Carlos Eduardo Fonseca Costa, 1949-）大使の後任としてインドネシア・ジャカルタにおけるブラジル

大使館を率いることとなり、2005年10月5日から2009年4月5日まで駐在した。ジャカルタ大使としての職務は、ブラジルとアジア諸国との接近の過程を継続させるとともに、ブラジルにおいては未だ十分に知られていない地域である東南アジアに位置する国家との関係を緊密化するという使命をフジタに与えるものであった。

フジタはアジア・オセアニア局長在任中、すでにインドネシアとの人的関係を築く機会を得ていた。すなわち、2001年にフェルナンド・エンリケ・カルドーゾ前大統領がディリおよびジャカルタを訪問した際、また2002年にインドネシア前大統領アブドゥルラフマン・ワヒド (Abdurrahman Wahid, 1940-2009、通称グス・ドウル) がブラジルを訪問した際である。

図③③ *São Paulo-Shinbun* の2004年記事切り抜き



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

ジャカルタ大使館に着任したフジタは、ブラジルとインドネシア関係において、日本や中国にとどまらずアジアの他国におけるブラジルの関与を拡大する好機が存在するとの楽観的な見通しを抱いていた。彼の見解によれば、ブラジルはアジア大陸に対して必要な関心を払っておらず、その地域諸国との間に実りあるパートナーシップを築く大きな機会を逸していたのである。

ブラジルはいまだアジアに目覚めていない。人類最古の文明的核を有する極東は、歴史上新参者たるブラジルの極西をいまだ感化していない。双方のあいだには、その潜在力と相乗的可能性に関する顕著な無知が存在している (Fujita, 2009, p. 11)。⁷²

フジタは、将来的に人口の高齢化や天然資源の枯渇によって、アジアが数十年後には活力の中心としての地位を失うと予見したうえで、ブラジルにはその前段階において商業関係における重要な地位を確保する好機があると考えていた。しかしながら、彼はブラジル外交における一部アジア諸国の扱われ方に対

⁷² エジムンド・フジタのインドネシア駐在大使としての任務報告。出典は、エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

して批判的であった。特にジャカルタにおいては、館員が館長とその副官のみという機能的に脆弱な体制を問題視していた。

行政体制は歪である。外務省内に偏見に基づく認識が広がっており、それが東南アジア勤務を「キャリアの逸脱」とみなし、志願を阻んでいる。これらを卑下的に「犠牲の任地」と呼ぶのではなく、より奨励的または半ば義務的な制度を検討すべきである (Fujita, 2009, p. 11)。

同様にフジタは、外務省および新世代の外交官が、こうした誤った認識によって一度きりの機会を逸しつつあると指摘した。おそらく他の機関、さらには民間部門が、ブラジル外交がアジアに残した「空白」をより有効に利用し、より大きな職業的成果を得ることになるだろうと論じている。彼の分析は単なる批判にとどまらず、政府がアジア地域をより重視するよう促す警鐘であり訴えでもあった。フジタによれば、この軽視の傾向は彼自身が外交官となった 1970 年代から続いているという。フジタは次のように述べた、「私がキャリアに入った 1970 年代当時、日本、ロシア、インド、あるいは中国に行きたがる者は誰一人いなかった。そうした地域は「世界の果て」と見なされていた」(Fujita, 2009, p. 12)。彼はさらに任務報告書の中で次のように述べている。

私の人生の大部分は、かつて「エキゾチック」と見なされた東京、モスクワ、中国といった場所に捧げられてきたが、後悔はない。むしろ、そうした任地で仕える機会を得られなかった人々に同情を覚える。彼らは「安く買って高く売る」好機を逸したのだ。歴史が新世代において繰り返されぬよう願うばかりである。最初は悲劇として、次には茶番として (Fujita, 2009, p. 12)。

ブラジルとアジア関係に対するこのような展望の下、フジタは、自らが赴任した国々においてブラジルの積極的なイメージを広めるべく精力的に活動した。とりわけインドネシアでは、その外交活動は両国間の文化交流に強く結びついていた。彼の在任期間中、ブラジル大使館は、ブラジルのイメージをインドネシア国内で普及・強化することを目的とした多数の文化イベントを実施した。フジタによれば、「インドネシアにおいては、当初からブラジルの音楽、スポーツ、観光に対する強い好意を見出した」⁷³という。フジタはこのようなイベントの推進にとどまらず、インドネシアのテレビ番組に出演し、新聞記事を執筆し、さらにはインドネシア大学やハビビ国際研究センターに招かれて芸術展や講演を行い、アジアとラテンアメリカの関係について言及した数少ないラテンアメリカ人の一人となった。

2007 年には「文化週間」と題するイベントを開催し、従来 9 月の国祭日に行われていた外交団や地元エリート層のみに限定された祝典の形式を刷新し、一般市民に公開した。ブラジル人写真家ジョアン・パウロ・バルボーザ (João Paulo Barbosa) による写真集『ブラジル・インドネシア』の制作 (同時に芸術写真集『私の見たブラジル (*Brasil por meus olhos*)』として出版)、デウザ・ブルムケ (Deusa Blumke) による絵画展『ブラジル、私の情熱 (*Brasil Minha Paixão*)』、カポエイラ公演、ポルトガル語講座、ダンス講座、さらにブ

⁷³ エジムンド・フジタのインドネシア駐在大使としての任務報告。出典は、エジムンド・ススム・フジタ個人コレクションである。

ラジル音楽に関心をもつインドネシア人音楽家の演奏など、多彩な企画を実現した。

このイベントは大きな成功を収め、バルボーザの写真集『私の見たブラジル』は在インドネシアの各国大使館で高い評価を得て文化広報の資料として活用され、その形式は他の活動においても模範とされるに至った。

図③④ 「ヴィラ＝ロボスへのトリビュート」 *The Jakarta Post*, 2008 年



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

2008 年、ジャカルタ音楽院において、ブラジル大使館の共催のもと「ヴィラ＝ロボスへのトリビュート」と題するイベントが開催された。本行事はブラジル人作曲家エイトル・ヴィラ＝ロボス（1887-1959）へのオマージュであり、現地の複数の音楽家による演奏を特色とした。ジャカルタ大使館におけるフジタの使命の一つは、ブラジル文化を広範に紹介し、彼自身が深く敬愛していた数々のブラジル芸術作品をインドネシアの人々に提示することであった。ジャカルタ音楽院との協働によって、インドネシアの若者たちはブラジル文化に触れ、ブラジルのクラシック音楽を学ぶ機会を得、それを大使館との共催による演奏会を通じて自国の聴衆に共有することが可能となった。

2008 年、大使エジムンド・フジタの秘書からの一本の電話が、ブラジル大使館とジャカルタ音楽院（JCoM）との間における音楽的協働の始まりを告げた。アグスティニ・ウィジャヤ（Agustiny Wijaya）夫人は、フジタ大使がジャカルタ音楽院を通じてブラジルを代表する作曲家の一人であるエイトル・ヴィラ＝ロボスの作品を紹介したいとの意向を伝えたのである。大使館の全面的支援を受け、楽譜が入手され、才能ある若手音楽家が選抜された。彼らは、ヴィラ＝ロボス作品に内在する刺激的なリズム、調和に富む民俗的

要素、そして豊かな音楽性に魅了された。若手音楽家たちは週ごとの指導を受け、三か月後には暗譜で演奏できるまでに達した。⁷⁴

その後もジャカルタ音楽院において、ヴィラ＝ロボス作品のみならず、エルネスト・ナザレー（Ernesto Nazareth, 1863-1934）といった他のブラジル作曲家を紹介するための演奏会が開催された。さらにフジタは、2007年の「祖国文化週間」や2008年9月の「建国記念日」など、ブラジル文化を広めるための多様な催しを実施している。

フジタ画家

文化行事、展覧会、音楽公演といった活動の数々は、大使フジタに芸術的側面を発展させたいという欲求を呼び起こしたように思われる。まさにその時期に、彼は本格的に絵画制作を始める決意を固めたのである。若年期には風刺画を描くことを好み、一生を通じてピアノやリコーダーを演奏していたが、実際に絵画制作に着手したのは50歳を過ぎてからであった。妻リガヤによれば、その発端はインドネシア滞在時に遡る。「インドネシアに到着したある日、彼が私に言ったのです。『絵を描きたい気持ちがあるんだ』。私は『どういうこと？』と聞くと、彼は『わからない、まるで靈感のようなものが降りてきたようだ』と言ったのです」（インタビュー、2018年9月22日）。

必要な画材一式を揃えたのち、大使は念願の絵画制作に取り組み始めた。不眠の夜には数時間にわたり絵筆をとり、短時間のうちに作品を仕上げるのが常であった。構想が思い浮かぶとすぐに制作に取りかかり、途中で中断することなく完成まで突き進んだ。夜明けには、徹夜で描き上げた作品を妻に見せるため彼女を起こすこともしばしばであった。

⁷⁴ 2022年9月1日、インドネシア・ジャカルタ音楽院のピアノ教師、アデレード・シンボロン（Adelaide Simbolon）によるレポート。

図③⑤ エジムンド・ススム・フジタによる創作絵画



キャプション：作品の題名は、“And the Twain Shall Meet”（2008）である。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

フジタは、シュルレアリスムの画家ジョアン・ミロー（1893-1983）や抽象表現主義のジャクソン・ポロック（1912-1956）を高く評価していた。彼の作品の中には、その影響を色濃く映したのが見受けられ、ポロックの「ドリッピング技法」を想起させる絵画も存在する。

制作態度についてリガヤは「彼はせっかちな画家だった」と表現している。ひとたび構想が頭に浮かぶと、彼は直ちにそれを絵画として具現化せずにはいられなかった。油絵具の乾燥を待つ余裕や、多くの選択肢を熟考する忍耐が彼にはなく、アクリル絵具を主に用いたのもそのためであった。「彼の頭の中には驚くべきものがあつたのです。突然に色の組み合わせが生まれ、それがそのまま作品として結実するのです」（インタビュー、2018年9月22日）。

さらに、彼の多文化的背景も影響し、その作品には日系ブラジル人画家からのインスピレーションが色濃く反映されていた。彼は前衛的画家マナブ・マベ（Manabu Mabe, 1924-1997）、トミエ・オオタケ（Tomie Ohtake, 1913-2015）、カズオ・ワカバヤシ（Kazuo Wakabayashi, 1931-2021）といった芸術家を高く評価し、その作品を蒐集するとともに、自らの住居の装飾にも用いていた。「彼は日系ブラジル人画家がとても好きで、マナブ・マベ、トミエ・オオタケ［……］彼らから少なからず影響を受けたのだと思います。そして彼自身も2度、個展を開催したのです」（インタビュー、2018年9月22日）。

フジタは自身を「偶然の画家」と称していた。彼の絵画は「見たこともないの風景」と呼ばれる想像上の記憶の表現であり、不眠の夜に彼を捉えて離さなかったイメージを具現化する試みであった。インドネシア滞在時に芽生えたその創作衝動は、韓国・ソウル駐在時にも継続され、彼の芸術活動は外交官としての歩みと並行して展開されたのである。

ソウル

ジャカルタにおけるブラジル大使としての任務を終えた後、フジタは韓国・ソウルのブラジル大使館を率いることとなった。彼は 2009 年から 2015 年まで同地で勤務し、その後ブラジルへ帰国した。フジタがソウルでの任務を開始した時期は、ブラジルと韓国関係において大きな接近が見られた時期にあたる。すなわち、ブラジルの伝統的貿易相手国であった欧米諸国が経済停滞に直面するなか、ブラジル政府は国際舞台における新たな協力関係を模索し、韓国を有望なパートナーとして位置づけたのである。

フジタはブラジル大使館ソウル公館の任務報告において、自らの活動成果を次のように要約している。

6 年半にわたり韓国におけるブラジル大使館を率いた（2009 年 4 月～2015 年 9 月）任務を終えるにあたり、本任務報告を作成するのは、任務達成の充実感と職務遂行の満足を抱いてのことである。韓国社会との交流や同国各地域への訪問を通じ、この卓越した国民の特質を知る機会を得られたことは、職業的にも家庭的・個人的にも大きな満足をもたらした。実際、2007～2008 年頃までは、韓国は日本や中国といった長年のアジアのパートナーと比較して、我が国の政治的・経済的・文化的視野にはほとんど入っていなかった。しかし、2007～2008 年の世界金融危機以降、欧州や米国といった伝統的パートナーが停滞に陥ったことで、新たなパートナーシップの模索が両国の地政経済的枠組みに大きな変化をもたらした。二国間貿易は危機前の約 50 億ドルから 150 億ドル規模に拡大し、韓国からの対ブラジル投資額はブラジル国内における上位 15 位以内に入る規模となった（Fujita, 2015, p. 1, 強調引用者）。

このような文脈において、フジタは韓国におけるブラジル外交の存在感を強化するため尽力した。着任当初、ソウルのブラジル大使館には外交官 1 名と外務補佐官 1 名しか在籍していなかったが、任務終了時には外交官 4 名と公使参事官 1 名が加わり、体制は大幅に拡充された。

また、1991 年に両国間で署名された科学技術協力協定には、重点分野の設定や協力事業を検討する混合委員会の設置が規定されていたものの、実際に第一回会合が開催されたのは、フジタの任期中である 2011 年、協定締結から約 20 年後のことであった。こうした経緯から、フジタ大使の業務は主として科学技術分野に集中し、その分野が大使館業務全体の半分以上を占めることもあった。

この時期に特筆されるのは「国境なき科学（Ciência sem Fronteiras, CsF）」プログラムへの注力である（図 36 参照）。韓国は東アジアで初めて同プログラムに参加した国であり、「十数の韓国大学において 500 名以上のブラジル人学生を受け入れた」（Ziemath; Aguiar, 2017, p. 184）。

図36 「国境なき科学」プログラムに関する記事



出典：The Korea Times 紙記事切り抜き（2012年）。エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

フジタはブラジル人学生により多くの機会を提供すべく尽力し、ブラジル大使館の支援を得て、現地の大企業——たとえば現代自動車やサムスン——との間で提携を結び、奨学生に対するインターンシップ枠を開放させた。

筆者の見解によれば、フジタ大使の採用した戦略は、戦略的知性、卓越した外交手腕、そして公共的責務への献身を体現した驚くべき実践例であった。フジタ大使は、奨学生全員にインターンシップの機会を提供するという目標を定めるや、数か月にわたり韓国の企業界における広範な人的ネットワークを駆使して、一人ひとりの学生のために謙虚に支援を要請し続けたのである。状況を問わず、どのような機会も無駄にすることはなかった。多文化的交渉に長けたフジタ大使は、韓国社会における「トップの決定は絶対に履行される」という厳格なヒエラルキー尊重の特質を巧みに活用し、大企業の会長やCEOの承認を得ることで確実に成果を導いた。⁷⁵

その成果として、まず現代自動車において 50 名分のインターン枠が開放され、韓国政府はブラジル人奨学生の支援に約 50 万ドルを拠出した。その後、LG グループ、SK グループ、ポスコなどの大企業も相次いでブラジル人学生を受け入れるようになった⁷⁶。ダニエル・フィンク（Daniel Fink）は、フジタがいかにしてブラジル人学生のための機会を拡充したかについて、次のように証言している。

ブラジル副大統領の韓国訪問の際、大使はある大手自動車メーカーの会長と会談する機会を得た。同社がブラジルに工場建設を検討していた折であり、その場においてフジタ大使は、同会長に対して奨学生のインターンシップ支援を要請した。この会談によって、きわめて有望な機会が保証されただけで

⁷⁵ フジタ在任中に在ソウル・ブラジル大使館の科学技術顧問を務めたダニエル・フィンク（Daniel Fink）による回想録。

⁷⁶ エジムンド・ススム・フジタの韓国での任務報告書（2009-2015）から入手したデータ。

なく、ブラジルの交流プログラムに対する多額の寄付までもが実現したのである。

さらに、フジタの任期中には、ソウル大学校および斗山インフラコア社との協力のもと、ブラジル文化センターが設立された。その運営は、韓国で活動する芸術家たちに精通していたブラジル人ピアニスト、レダ・キム (Leda Kim) に委任された。

同様に、大使館業務を補完する目的で 2 名の名誉領事が任命された。すなわち、現代グループ社長のヒョン・ジョンウン (Hyun Jeong-eun) 女史、および SK ケミカル社長のチェ・シンウォン (Choi Shin-won) 氏である。両名誉領事はそれぞれ、韓国最大の空港拠点である仁川および最大の港湾都市である釜山に配置され、「領事業務の負担軽減に寄与したのみならず、現地社会の多くの有力人物を大使館に紹介する役割も果たした」(Fujita 2015, p. 2)。

また、科学技術分野においても重要な成果が見られた。2009 年には、ブラジル農牧研究公社 (EMBRAPA) と韓国農村振興庁 (RDA) の協力により、ソウルから 40 キロ離れた水原市に「バーチャル研究所 (Labex)」が設立された。フジタも出席した同研究所の開所式は、韓国主要紙に大きく取り上げられた (図 37 参照)。なお、Labex 設立を規定する覚書の署名は、当時の李明博 (Lee Myung-bak, 1941-) 大統領が 2008 年にブラジルを公式訪問した際に行われていた。

図③⑦ 2009 年における Labex 開所式



出典：The Korea Herald 紙記事切り抜き (2012 年)。エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

文化分野においては、韓国におけるブラジル文化の普及を目的として多様な事業が推進され、ソウル所在ブラジル大使館は数多くのブラジル人芸術家および学術関係者の招聘を後援した。その一環として、著名シェフ、アレックス・アタラ (Alex Atala, 1968)⁷⁷がソウル料理フェスティバルに参加する機会も設けられた。

⁷⁷ ミラド・アレクサンドル・マック・アタラ (Milad Alexandre Mack Atala, 1968-) は、ブラジルの有名なシェフである。

さらに 2012 年には、韓国からブラジルへの移民 50 周年を記念する催事 *Seoul of Brazil* が開催された。同音楽祭 *Seoul of Brazil* は、フジタの言によれば、その年に予定されたブラジル文化プログラムの「中核かつ魂的支柱」⁷⁸を成すものであり、1962 年 2 月に最初の移民団が到着して始まった韓国人移民の歴史 50 周年を祝賀する意味も担っていた。

この催事は、フジタの言葉を借りれば、「二つの豊穡かつ地理的に対蹠的な文化の邂逅を可能にする初めての橋を築いた、あの勇敢な開拓世代への讃辞」⁷⁹であった。

2012 年 5 月 15 日から 17 日にかけて開催された同音楽祭には、ブラジル人アーティストとして、ハーモニカ奏者ガブリエル・グロッシ (Gabriel Grossi)⁸⁰、ピアニストのレダ・キム (Leda Kim)⁸¹、パーカッションニストのヴァウチーニョ・アナスタシオ (Valtinho Anastácio)⁸²らが参加し、エイトール・ヴィラ＝ロボス、アントニオ・カルロス・ジョビン (Antônio Carlos Jobim, 1927-1994)、ミルトン・ナシメント (Milton Nascimento, 1942-)、ピシンギーニャ (Pixinguinha, 1897-1973) といったブラジル音楽界を代表する巨匠の作品を演奏した。

図③⑧ 2012 年における *Seoul of Brazil* 広報資料



出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

同催事においては、ファッションを通じて両文化の融合を表現することを主題とした、韓国系ブラジル人デザイナーによるファッションショーが開催された。デザイナーのアンジェラ・クン (Angela Kung) は、持続可能なミニマリズムを基調とし、シルクやコットンの生地に加え、コーヒー、カカオ、アサイ

⁷⁸ 「Seoul」の発音は、英語における「soul」と類似しており、「魂」を意味する。また、「soul」は音楽ジャンルの一つを指す語でもあるため、ここにおいても言葉遊びが成立する。

⁷⁹ エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション、*Seoul of Brazil* 公式広報冊子より。

⁸⁰ ガブリエル・グロッシは、世界的に卓越したハーモニカ奏者の一人として高く評価されている。

⁸¹ サンパウロに生まれたレダ・キムは、米国ジュリアード音楽院にてピアノを学び、コロンビア大学において音楽教育学の博士号を取得した。その後、韓国において堅固な音楽的キャリアを築いた。

⁸² サンパウロに生まれたヴァウチーニョ・アナスタシオは、幼少期より音楽に親しみ、多様な打楽器の演奏を習得した。彼は、ビニール袋のような日常的な物から、パンデイロやビリンバウといった楽器に至るまで、あらゆる対象を用いて音楽を創出することで知られている。

一、ウルクンといった天然色素を用いて、熱帯気候にふさわしい軽やかで透けるようなドレスを創作した。

一方、ヌリ・チュ（Nuri Choo）は、ブラジル文化のエスニックな豊かさを基盤とし、ブラジルの職人によって生産された皮革や繊維ロープを織り交ぜ、熱帯ブラジルの暖色を基調としたデザインを展開した。さらに、もう一人の参加デザイナー、ニナ・カン（Nina Kang）は、ブラジル木の香りを取り入れることで官能的な側面を探究しつつ、韓国の伝統衣装である韓服の要素を組み込み、同時にオスカー・ニーマイヤー（Oscar Niemeyer, 1907-2012）の建築にみられる幾何学的形態に着想を得て、両国における先住民族と移民の統合を示す美的表現に到達した。

この祭典に加え、ソウル所在ブラジル大使館は、2014年の外交団による年末慈善コンサートといった音楽イベントも主催した。同コンサートにおいて、フジタ大使はヴァウチーニョ・アナスタシオおよびユン・ヘジン（Yoon Hye-jin）とともにフルートを演奏し、ピシンギーニャ作曲の「カリニョーズ（Carinhoso）」および「ラメント（Lamento）」を披露した。また、この催しには当時の韓国外務部長官ユン・ビョンセ（Yoon Byung-se, 1953-）も参加し、外交団で構成された合唱団に加わった。

図③⑨ 2014 年年末慈善コンサート



キャプション：背面に位置するのがパーカッショニストのヴァウチーニョ・アナスタシオ、中央にフジタ大使、右側にフルート奏者ユン・ヘジンである。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション

これらの音楽祭および演奏会は、フジタにとって音楽という大きな情熱を再び呼び起こす契機となった。インドネシアにおいて絵画が大使としての新たな技能として芽生えたとすれば⁸³、韓国では音楽が彼の人格の重要な一部として再浮上したといえる。

⁸³ フジタ大使は 200 点を超える美術作品を制作し、数多くの展覧会に参加した。これらの作品の売却によって得られた収益は、ジャカルタにおいては Yayasan AIDS Foundation に、また

フジタはしばしば自邸に友人を招き、楽器の演奏を通じて交流を深めた。音楽は常にフジタの人生に寄り添っており、リセウ・パストゥール合唱団での友情の形成や、ソウル所在ブラジル大使館外交団合唱団での活動を通じて、親密な人間関係を築き上げた。すなわち、音楽はエジムンド・ススム・フジタの人生において、接近と再接近の媒介としても機能したのである。

帰国

2015年8月に発表された公示により、フジタはソウルのブラジル大使館を離れ、外務省本省におけるサンパウロ事務所（ERESP）で勤務することとなった。これに伴い、フジタはサンパウロに居を定め、2016年に逝去するまで同地で生活した。

サンパウロ在住中、フジタは幼少期の友人たちと再会し、リセウ・パスチュール校のユース合唱団に所属していた仲間たちを集めるために積極的に行動した。その一環として、長年会っていなかった同校の友人アウグスト・マッゾーラに連絡を取り、再会して昼食を共にする場を設けた。この際、フジタは友人に対して、自身が病気で歩行にも支障があることを明かした。

病状があつたにもかかわらず、フジタはやりたいことを諦めなかった。家族や友人を集めることに常に熱心であり、昼食後の週末に行われるコンサートへのマッゾーラの招待も快く受けた。コンサートでは、リセウ・パスチュール校時代の同級生、ユース合唱団で知り合った友人イライ・ジ・パウラ・ソウザらと再会した。コンサート後、イライ・ジ・パウラ・ソウザが自宅で昼食会を催し、フジタは人生の重要な人物たちと再会し、幼少期の友人たちと親交を深める機会を得た。

このように、音楽は再びフジタの人生に重要な役割を果たした。幼少期には多くの友人をもたらし、大学時代にはサンパウロ大学法学部占拠事件の際の心の支えとなった。「銃声は聞こえず、聞こえるのは物語と音楽だけだった。[…] 夜にはカイオ・マルチンス（Caio Martins）のギターとエジムンド・フジタのリコーダーが響いた」⁸⁴。さらに、外交官としての生涯を通じて、音楽はブラジルと駐在国との文化交流の橋渡しとしても機能した。そして最後に、リセウ・パスチュール校時代の同級生との再会をもたらし役割も果たした。

フジタは友人や家族との集いを何よりも好んだ。最後の集まりは2016年3月6日に開催され、翌日に迎える自身の誕生日および甥の誕生日を祝うものであった。この際、甥たちからのサプライズとしての最後のインタビューも録画され、映像内でフジタは自身の歩みを振り返り、外交官としての記憶を記録している。翌月の2016年4月6日、フジタは66歳で癌のため逝去した。

ソウルにおいては国際連合児童基金（UNICEF）を通じて、藤田家の出身地である福島における津波被災者のために寄付された。

⁸⁴ BUZZONI, Henrique D'Aragona. *Arcadas no Tempo da Ditadura*. São Paulo: Editora Saraiva, 2007 を参照されたい。本引用は、刑事弁護士アルナルド・マリエイロス・フィリョ（Arnaldo Malheiros Filho, 1950-2016）による章の一節である。マリエイロスはサンパウロ大学法学部においてエジムンド・フジタと出会い、大使と深い友情を育んだ人物である。アルナルド・マリエイロスは、フジタ大使と同年に逝去し、友人の死からわずか一か月余りでこの世を去った。

図④⑩ エジムンド・ススム・フジタ：ブラジル外務省初の日系ブラジル人



キャプション：フジタの生涯にわたる写真をコラージュ形式で構成。

出典：エジムンド・ススム・フジタ個人コレクション。コラージュ制作は筆者による。

フジタは逝去時点でもなお外交官としてのキャリアを継続する可能性を有していた。リガヤによれば、本人は公に表明してはいなかったが、日本におけるブラジル大使を務める意欲を抱いていたという。しかし病気のため、その希望が実現するかどうかは確認されぬまま生涯を閉じた。それでも、フジタは、妻の言葉を借りれば、「ブラジル外交官として完全な幸福と達成感、誇りを感じていた」。

ブラジル外務省において初の日系外交官としての先駆的存在であったこと、駐在国における外交関係の促進・強化に尽力したことにより、フジタはブラジル外交史に名を刻むとともに、日本人コミュニティ内においても前例を築き、後続の日系外交官たちの道を切り開いた。

結論

歴史的にみると、ブラジルの外交官のキャリアは主に白人男性、特にリオ・デ・ジャネイロ出身のブラジル上流階級出身者によって占められてきた。1975年にサンパウロ生まれの日系二世、エジムンド・ススム・フジタがリオ・ブランコ学院の試験に合格したことは、当時のブラジルの新聞でも報じられた通り、従来の障壁を打ち破る出来事であり、日伯間の関係を深化させるだけでなく、フジタが従事したすべての国におけるブラジル外交の強化に貢献した外交官の功績の始まりを示すものであった。

フジタは、ブラジル外交官として初めて日本系の血を引く者となり、ブラジル史上初の日系大使となった。本書で示した通り、イタマラチーは長らく個人的基盤に基づく採用を行い、社会的関係や家柄が新規外交官の選抜に影響を与えていた。この選抜過程においては、身体的特徴も採用基準の一部として用いられ、海外ポストへの配属にも影響を及ぼしていたことがある。

このような採用の仕組みは、長期間にわたり、ブラジル外交官の外見的・社会的特徴に一定の均質性を形成する要因となった。その結果、イタマラチーはブラジル公務員制度の中でも最も均質で組織的な集団の一つとして確立され、女性や黒人、さらには本書で示したように黄色人種といった少数派の参加はほとんど存在しない状況が続いた。

1930年代以降、採用過程における個人的基盤の影響は徐々に変化し、官公庁試験の導入や1945年のリオ・ブランコ学院の創設により、新規外交官の採用方法に直接的な影響がもたらされ、徐々に外交官の社会的出自に変化が現れるようになった (Gobo, 2018)。

しかし、本書で述べた通り、試験制度の導入やイタマラチーが社会一般に開かれる可能性があったにもかかわらず、試験内容の難易度の高さや口述試験・学位評価・面接といった主観的評価の維持により、選抜される外交官のプロフィールはほとんど変化せず、外交官キャリア内部の均質性は保たれたままであった (Cheibub, 1984)。

このため、イタマラチーは長らく「人種差別的な機関」であるとの批判を受け続けた。採用過程に介入し、白人男性中心の外交官像を維持することにより、ブラジル社会に存在する社会構造の利益を反映した規範と基準を再生産していたためである。シウビオ・ジ・アウメイダ (Silvio de Almeida, 2019) が指摘するように、その構造的機能には人種差別が自然な要素として組み込まれている。したがって、イタマラチーは長らく、こうした批判に対抗することが困難であり、実質的な改善策も十分に講じられてこなかった。

20世紀末になって初めて、イタマラチーは外交官キャリアへのアクセス拡大を試み、外交官集団がブラジル社会の多様性を反映すべきであるとの意識を示すようになった。1975年にフジタが合格したことは、当時のイタマラチーにおける人種偏見に対する議論を再燃させたが、採用プロセスにおける大きな変化はほとんど起きず、組織の排他的・識別的性格は1990年代半ばまで続いた。その後、口述試験の廃止、女性の参加拡大、アフリカ系ブラジル人への積極的措置の実施が試みられた。

こうした文脈において、フジタの「障壁突破」は、厳格な選抜過程に合格したことに加え、イタマラチー内部における人種・民族的な障壁を打ち破った事例として理解できる。フジタの先駆的業績は、後続の日系が外交官キャリアに進む道を開くものでもあった。

したがって、イタマラチーがその採用制度の枠組みにおいて人種的・社会的・ジェンダー的差異を是正する方策を模索していた時期に、1990年代には既に見たように、初の二世女性外交官であるファチマ・イシタニの合格、そして2002年に一等公使へと昇進したフジタの顕著な活躍が相まって、以降、リオ・ブランコ学院の試験に挑戦しようとする日系人志望者の増加を促す結果となった。

これにより、その時期以降、日本人の血統を有する新たな外交官が漸次的に増加する一因となったのである。以上より、1975年のフジタの合格は、必ずしもブラジル政府によるイタマラチーの人種差別撤廃やアクセス拡大の試みを示すものではなく、むしろ当時の日系コミュニティの歴史的な文脈やフジタ自身の教育的背景、並々ならぬ努力の結果であったことが理解できる。この点に関して想起すべきは、たとえば外務省が外交官に黒人が不在であることを社会経済的要因に帰した事例や、フジタを例として提示することによって、同機関における人種差別の不存在を証明しようとした事例である (Nishida, 2018)。

さらに、先に見たように、フジタが外交官採用試験に合格した軍政期には「人種民主主義」の言説が広く流布しており、ブラジル社会には人種問題が存在せず、すべての人々が平等に社会的上昇の機会を有しているかのように喧伝する言説が、政治的発言やブラジルの報道機関において頻繁に見られた。また、この時期の対日接近の機運のなかで、日本人社会が統合および克服の模範として表象されることがブラジル国内で広まり (Taniguchi, 2015)、これもまた国内における人種差別不存在の言説を正当化する働きを担っていた。

こうして、先に触れたファビオ・ヤスダ、パウロ・ヨコタ、アキヒロ・イケダといった人物を例とする戦後の日系ブラジル人の政治的・社会的上昇は、世界経済における日本の著しい発展およびブラジルと日本の関係接近という歴史的な文脈において生じたものであった。このことは、1908年の移民開始以来の統合過程を深化させ、従来は立ち入ることのなかった社会的領域に日系移民の子孫が参入する契機となり、その一例としてエジムンド・ススム・フジタの経歴を挙げることができる。

このようにして、フジタはブラジルにおける日本人社会の社会的上昇の過程の一部をなした。この過程は、同人の父である藤田芳郎に始まる。すなわち、芳郎は農作業に従事する生活から離れ、サンパウロ市において商業に従事するようになったのである。この流れは、都市的環境に生まれ育った二世のエジムンド・ススム・フジタに継承された。彼は日本語・フランス語・英語を学び、その後サンパウロ大学法学部に進学するという、基盤においてきわめて異なる教育を受けた。こうした多文化的な教養と学業への献身は、彼が国内でも最も難関かつ競争率の高い試験の一つに首席で合格する上で決定的な役割を果たした。

最終的に、フジタの生涯に関する分析は、彼がいかなる条件のもとで国際的なキャリアを選択したのかをより深く理解させると同時に、その特異な幼少期の経験が外交官採用試験合格に直接的な影響を及ぼしたことを明らかにした。

さらに、提示された数々の職業的エピソードを検討することによって、この日系外交官がいかにして国際的舞台におけるブラジル代表として活動し、また自身の民族的・人種的出自に由来する主要なアイデンティティ問題に向き合ったのかを見て取ることができる。

したがって本書は、マリア・リガヤ・フジタ大使夫人が提供した豊富な個人資料の分析、およびフジタの友人や家族へのインタビューを通じて、大使の生涯とその職業的主要事績を再構成しようとする試みである。ブラジルにおける最初の日系外交官の生涯を分析することは、日系ブラジル人共同体のブラジル社会における代表性を考察することを目的とし、また日本移民研究に新たな参照点を提示するものである。

このように、本書が日本研究の発展に寄与することが期待される。すなわち、ブラジルにおける日本移民史上重要な人物の一人の軌跡を提示し、その生涯を通じてブラジル外交の最も伝統的かつ重要な機関の一つであるイタマラチーの歴史形成に関わる主要な対立といかに関係したかを分析することによってである。本書は、日系人のブラジル外務省への参画という議論を超え、ブラジル最初の日系外交官が経験した主要な個人史的・職業的出来事を記録する、今までに未発表の成果を示そうとしたものである。

参考文献

- ALMEIDA, Silvio Luiz de. *Racismo estrutural*. São Paulo: Pólen Livros, 2019.
- ALONSO, Angela. *Perfis brasileiros*: Joaquim Nabuco. São Paulo: Companhia das Letras, 2007.
- AMADO, André. *Por dentro do Itamaraty*: impressões de um diplomata. Brasília: FUNAG, 2013.
- AMARAL, Luís Gurgel. *O meu velho Itamaraty*: de amanuense a secretário de legação: 1905-1913. Rio de Janeiro: Imprensa Nacional, 1947, p. 21.
- ANDREWS, George Reid. *Negros e brancos em São Paulo*: (1888-1988). Bauru: Edusc, 1998.
- AZAMBUJA, Marcos. Casa bem-assombrada: O Itamaraty antes da sua ida para Goiás. *Revista Piauí*. Edição 54, mar. 2011.
- BAPTISTA, Maria Manuel. *Estereotipia e representação social*: uma abordagem psico-sociológica. Coimbra: Universidade de Coimbra, 1996.
- BELÉM LOPES, Dawisson. Diplomacia rima com democracia? A hipótese do ‘republicanismo mitigado’. In: *III Encontro Nacional da Associação Brasileira de Relações Internacionais* (ABRI), 2011, São Paulo. Disponível em:
<http://www.abri.org.br/anais/3_Encontro_Nacional_ABRI/Politica_Externa/PE%2025_Dawisson%20Lopes%20DIPLOMACIA%20RIMA%20COM%20DEMOCRACIA.pdf>. Acesso em: 13 mar. 2023.
- BOURDIEU, Pierre. *O poder simbólico*. Rio de Janeiro: Bertrand Brasil, 2001.
- BRASIL, Constituição (1934) Constituição da República dos Estados Unidos do Brasil. Rio de Janeiro, 1934, Disponível em:
http://www.planalto.gov.br/ccivil_03/constituicao/constituicao34.htm. Acesso em: 26 ago. 2021
- BRASIL, Assembleia Nacional Constituinte, 1933-1934. *Annaes da Assembléia Nacional Constituinte*, v. 4, xx, 560p., 1935.
- BUZZONI, Henrique D’Aragona. *Arcadas*: no tempo da ditadura. São Paulo: Editora Saraiva, 2007.
- CARDOSO, Ruth Corrêa Leite. O papel das associações Juvenis na aculturação dos japoneses. *Revista de Antropologia*, v. 7, p. 101-122, 1959.
- CARDOSO, Ruth Corrêa Leite. *Estrutura familiar e mobilidade social*: estudo dos japoneses no Estado de São Paulo. São Paulo: Primus Comunicação, 1995.
- CARVALHO, José Murilo. *Os bestializados*. São Paulo: Companhia das Letras, 2012.
- CASTRO, Flávio Mendes de Oliveira. *Dois séculos de história da organização do Itamaraty (1808-2008)*. Brasília: FUNAG, 2009. Vol. I e II. 644p.
- CASTRO, Marcos Luiz de. *Entre o Japão e o Brasil*: a construção da nacionalidade na trajetória de vida de Hiroshi Saito. Dissertação de mestrado. Universidade Estadual de Campinas – UNICAMP. Campinas, 1994, 247p.
- CHAVES, Luís de Gonzaga Mendes. Minorias e seu estudo no Brasil. *Revista de Ciências Sociais*, v. II, n. 1, p. 149-468, 1971.

- CHEIBUB, Zairo Borges. *Diplomacia e construção institucional: o Itamaraty em perspectiva histórica*. Dados, Rio de Janeiro, n. 28, p. 113-131, 1984.
- COMISSÃO DO RECENSEAMENTO DA COLÔNIA JAPONESA. *The Japanese Immigrants in Brazil*. Tokyo: University of Tokyo Press, 1964.
- CONDE, Carlos. O preconceito no Itamaraty. *Revista Política Externa*, São Paulo: Paz e Terra, 3 ago. 1978, p. 15.
- CUCHE, Denys. *A noção de cultura nas ciências sociais*. Bauru: EDUSC, 1999.
- DEZEM, Rogério. *Matizes do “amarelo”: a gênese dos discursos sobre os orientais no Brasil (1878-1908)*. São Paulo: Associação Editorial Humanitas, 2005.
- EMBAIXADA DO JAPÃO NO BRASIL. *História de 120 anos de amizade Japão-Brasil*. Disponível em: <https://www.br.embjapan.go.jp/itpr_pt/120historia_pt.html>. Acesso em: 4 nov. 2021.
- ENNES, Marcelo. *A construção de uma identidade inacabada: nipo-brasileiros no interior do Estado de São Paulo*. São Paulo: Editora UNESP, 2001.
- FARIAS, Rogério de Souza. Edmundo Penna Barbosa da Silva: dos Secos & Molhados à diplomacia econômica multilateral. In: PIMENTEL, José Vicente de Sá (org.). *Pensamento diplomático brasileiro: formuladores e agentes da política externa (1750-1950)*. Brasília: FUNAG, 2013.
- FARIAS, Rogério de Souza e CARMO, Géssica. *Filhos da rua larga: o processo de recrutamento da diplomacia brasileira (1930-1950)*. Manuscrito. 2015. Disponível em: <https://www.researchgate.net/publication/273377948_FILHOS_DA_RUA_LARGA_o_processo_de_recrutamento_da_diplomacia_brasileira_1930-1950>. Acesso em: 20 ago. 2021.
- FAUSTO, Boris. *História do Brasil*. 2. ed. São Paulo: Editora da Universidade de São Paulo, 1995.
- FERREIRA, Alessandro Paz. *Por um lugar ao “Sol Nascente”: discursos e representações sobre o japonês como imigrante indesejável (1908-1945)*. Dissertação de mestrado. Universidade Federal do Rio de Janeiro – UFRJ. Rio de Janeiro, 2016, p. 283.
- FRIÇA, Guilherme José Roeder. *Mulheres diplomatas no Itamaraty (1918-2011)*. Brasília: FUNAG, 2018.
- FUJITA, Edmundo Sussumu. *As equações do poder e do saber nos regimes de não-proliferação*. Brasília: XXVI Curso de Altos Estudos, 1993.
- FUJITA, Edmundo Sussumu. *Relatório de Gestão Embaixada do Brasil junto à República da Coreia*. Brasília: Senado Federal, 2015.
- FUJITA, Edmundo Sussumu. 120 anos de relações diplomáticas Brasil-Japão. In: UEHARA, Alexandre Ratsuo (org.). *120 anos: construindo os alicerces para o futuro das relações Brasil-Japão*. 1. ed. São Paulo: Lexia, 2016, v. 1. 176p.
- GOBO, Karla. *O Instituto Rio Branco como espaço de produção e reprodução dos diplomatas brasileiros: uma análise da Revista Juca*. In: Associação Nacional de Pesquisa e Pós-Graduação em Ciências Sociais. Águas de Lindoia, 2013.

- GOBO, Karla. *NOBLESSE D'ÉTAT*: do campo ao habitus da diplomacia brasileira. Tese de doutorado. Instituto de Filosofia e Ciências Humanas – Unicamp. Campinas, 2016, 272p.
- GOBO, Karla. Da exclusão à inclusão consentida: negros e mulheres na diplomacia brasileira. *Política & Sociedade, Florianópolis*, v. 17, n. 38, jan./abr. 2018.
- GOUVÊA, Fernando da Cruz. *Oliveira Lima*: uma biografia. Recife: Instituto Arqueológico, Histórico e Geográfico Pernambucano, 1976.
- GUERREIRO, Ramiro Saraiva. *Lembranças de um empregado do Itamaraty*. São Paulo: Siciliano, 1992.
- GUIMARÃES, Antonio Sérgio Alfredo. Democracia racial: o ideal, o pacto e o mito. *Novos Estudos Cebrap*, São Paulo, n. 61, p. 147-162, 2001.
- GUIMARÃES, Antonio Sérgio Alfredo. Como trabalhar com “raça” em Sociologia. *Educação e Pesquisa*, v. 29, n. 1, p. 93-107, 2003.
- HALL, Stuart. A centralidade da cultura: notas sobre as revoluções culturais do nosso tempo. In: THOMPSON, K. (org.). *Media and Cultural Regulation*. Londres: SAGE Publishing, 1997.
- HALL, Stuart. *A identidade cultural na pós-modernidade*. 11. ed. Rio de Janeiro: DP&A, 2006.
- HANDA, Tomoo. *O imigrante japonês: histórias de sua vida no Brasil*. São Paulo: T.A. Queiroz/Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 1987.
- HOBBSAWM, Eric John Ernest. *A era dos impérios*. Tradução de Sieni Maria Campos e Yolanda Steidel de Toledo. Rio de Janeiro: Paz e Terra, 1988.
- INSTITUTO RIO BRANCO. *A carreira de diplomata*. Disponível em: <<https://www.gov.br/mre/pt-br/instituto-rio-branco/carreira-diplomatica/a-carreira-de-diplomata>>. Acesso em: 16 mar. 2023.
- ISHITANI, Cecília Kiku. Ensaio sobre a herança cultural japonesa incorporada à sociedade brasileira. In: FUNDAÇÃO ALEXANDRE DE GUSMÃO. *Ensaio sobre a herança cultural japonesa incorporada à sociedade brasileira*. 1. ed. Brasília: FUNAG, 2008, p. 85-107.
- KITAOKA, Shinichi. *Palestra Comemorativa da Inauguração da “Cátedra Fujita-Ninomiya”*. São Paulo: Universidade de São Paulo, 2019. Disponível em: <https://www.jica.go.jp/brazil/portuguese/office/activities/c8h0vm0000f5z5e9-att/brazil06_01.pdf>. Acesso em: 5 jul. 2021.
- KOIFMAN, Fábio. *Raymundo Souza Dantas*: o primeiro embaixador brasileiro negro. 1. ed. Salvador: Sagga, 2021.
- KONIGAME, Maria Juliana. *O local e o global na comunidade nipo-brasileira*: um exercício sociológico sob o prisma dos jovens na cidade de São Paulo. Dissertação de mestrado. Universidade de São Paulo – USP. São Paulo, 2011, 201p.
- LAFER, Celso. Prefácio. In: COSTA e SILVA, Alberto da. *O Itamaraty na cultura brasileira*. Rio de Janeiro: Francisco Alves, 2002.
- LAFER, Celso. *Relações internacionais, política externa e diplomacia brasileira*: pensamento e ação. Brasília: FUNAG, 2018.
- LEÃO NETO, Valdemar Carneiro. *Crise da imigração japonesa no Brasil, (1930-1934)*: contornos diplomáticos. Brasília: FUNAG, 1990.

- LESSA, Carlos. *O rio de todos os brasis: uma reflexão em busca de autoestima*. Rio de Janeiro: Editora Record, 2001.
- LESSER, Jeffrey. *A negociação da identidade nacional*. Imigrantes, minorias e a luta pela etnicidade no Brasil. Tradução de Patrícia de Queiroz Carvalho Zimbres. São Paulo: Editora UNESP, 2001.
- LESSER, Jeffrey. *Uma diáspora descontente: os nipo-brasileiros e os significados da militância étnica (1960-1980)*. São Paulo: Paz e Terra, 2008.
- LIMA, Oliveira. *Memórias: estas minhas reminiscências*. Rio de Janeiro: Livraria José Olympio Editora, 1937.
- MAEYAMA, Takashi; SAITO, Hiroshi. *Assimilação e integração dos japoneses no Brasil*. São Paulo: Editora da Universidade de São Paulo, 1973.
- MARCHI, Carlos. Mônica do Itamarati: atriz de uma peça necessária à política externa brasileira. *Jornal do Brasil*, Rio de Janeiro, n. 117, p. 29, 3 ago. 1978.
- MELLEIRO, Marta Maria; GUALDA, Dulce Maria Rosa. O método biográfico interpretativo na compreensão e experiências e expressões de gestantes usuárias de um serviço de saúde. *Revista da Escola de Enfermagem da USP*, São Paulo, v. 37, n. 4, p. 69-76, dez. 2003.
- MING, Celso. *As lágrimas do Samurai*. São Paulo: Nippo-Brasil, 2004.
- MIYAO, Susumu. *Nipo-Brasileiros – Processo de assimilação*. São Paulo: Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 2002.
- MIYASAKA, Kunito. Recordando os 20 anos de labuta. In: BANCO AMÉRICA DO SUL S.A. *Breve história do Banco América do Sul S.A.* Tóquio: Gráfica Hossokawa, 1960.
- MORAIS, Fernando. *Corações sujos*. São Paulo: Companhia da Letras, 2000.
- NASCIMENTO, Abdias do. *O quilombismo: documentos de uma militância pan-africanista*. Petrópolis: Vozes, 1980.
- NINOMIYA, Masato. 10 anos de lacuna: 1942-1952. In: UEHARA, Alexandre Ratsuo (org.). *120 anos: Construindo os alicerces para o futuro das relações Brasil-Japão*. 1. ed. São Paulo: Lexia, 2016. v. 1. 176p.
- NISHIDA, Mieko. *Diaspora and Identity: Japanese Brazilians in Brazil and Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2018.
- NOGUEIRA, Arlinda Rocha. *Imigração japonesa na história contemporânea do Brasil*. São Paulo: Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 1984.
- NOGUEIRA, Arlinda Rocha. *Uma epopeia moderna: 80 anos da imigração japonesa no Brasil*. São Paulo: Hucitec, 1992.
- OHNO, Massao. *Centenário da imigração japonesa no Brasil*. São Paulo: Larousse do Brasil, 2008.
- OKAMOTO, Monica Setuyo. *A influência francesa no discurso brasileiro sobre o Japão: imigração, identidade e preconceito racial (1860-1945)*. São Paulo: Porto de Ideias, 2016.
- OKAMOTO, Monica Setuyo. História oral de intelectuais e artistas nipo-brasileiros do pós-guerra. In: *IX Encontro Regional Sul de História Oral. Porto Alegre*, 2018.
- OLIVEIRA, Jackson Luiz Lima. *Negros e diplomacia: presença de afrodescendentes no Itamaraty*. Estudo comparado entre o Ministério das

- Relações Exteriores do Brasil e o Departamento de Estado norte-americano. Brasília: FUNAG, 2011.
- PIMENTEL, José Vicente de Sá (org.). *Pensamento diplomático brasileiro: formuladores e agentes da política externa (1750-1950)*. Brasília: FUNAG, 2013.
- PORTELLI, Alessandro. Um trabalho de relação: observações sobre a história oral. Tradução de Lila Cristina Xavier Luz. *Revista Trilhas da História*, v. 7, n. 13, p. 182-195, jul./dez. 2017.
- QUEIROZ, Maria Isaura Pereira de. Relatos orais: do “indizível” ao “dizível”. In: SIMSON, Olga de Moraes Von (org.). *Experimentos com histórias de vida (Itália-Brasil)*. São Paulo: Vértice, 1988, p. 14-43.
- REIS, Fidélis; FARIA, João de. *O problema imigratório e seus aspectos étnicos na Câmara e fora da Câmara*. Rio de Janeiro: Revista dos Tribunais, 1924.
- SAFRAN, William. Diasporas in modern societies: Myths of homeland and return. *Diaspora*, v. 1, n. 1, p. 83-99, 1991.
- SAITO, Hiroshi. *O japonês no Brasil: estudo de mobilidade e fixação*. São Paulo: Editora Sociologia e Política, 1961.
- SAKURAI, Célia. Descendentes de japoneses e participação política – perfil de quatro políticos. In: *XVII Encontro Anual da ANPOCS*, Caxambu, 1993.
- JOVEM nikkei conquista vaga em disputada carreira diplomática. *São Paulo Shimbun*. São Paulo, 2004.
- SCHADEN, Egon. Aculturação de alemães e japoneses no Brasil. In: SAITO, Hiroshi; MAEYAMA, Takashi (orgs.). *Assimilação e integração dos japoneses no Brasil*. São Paulo: Editora da Universidade de São Paulo, 1973.
- SCHWARCZ, Lilia Katri Moritz. *O espetáculo das raças: cientistas, instituições e questão racial no Brasil: 1870-1930*. São Paulo: Companhia das Letras, 1993.
- SECKINGER, Ron. O Estado brasileiro e a política externa no século XIX. *Dados*, n. 19, 1978.
- SEVCENKO, Nicolau. *Literatura como missão, tensões sociais e criação cultural na Primeira República*. São Paulo: Brasiliense, 1983.
- SKIDMORE, Thomas. *Preto no branco: raça e nacionalidade no pensamento brasileiro*. Rio de Janeiro: Paz e Terra, 1974.
- SUZUKI, Teiiti. *The japanese immigrant in Brazil*. Narrative part. Tokyo: University of Tokyo Press, 1969.
- TAKEUCHI, Marcia Yumi. A comunidade nipônica e a legitimação de estigmas: o japonês caricaturizado. *Revista USP*, n.79, set./nov. 2008, p. 173-182.
- TANIGUTI, Gustavo Takeshy. *Cotia: imigração, política e cultura*. Tese de doutorado. Universidade de São Paulo – USP. São Paulo, 2015, 345p.
- TOMIMATSU, Maria Fusako. *Kazuo Wakabayashi: vida e obra de um imigrante artista*. Tese de doutorado. Universidade de São Paulo – USP. São Paulo, 2014, 221p.
- TORRES, Alberto. *O problema nacional brasileiro: introdução a um programa de organização nacional*. 4. ed. São Paulo: Editora Nacional; Brasília: Editora UnB, 1982.

- UEHARA, Alexandre Ratsuo. *A política externa do Japão no final do século XX: o que faltou?* São Paulo: Editora Annablume, 2003.
- VASCONCELLOS, Mário de Barros. *O Barão do Rio Branco*. Rio de Janeiro: Ministério das Relações Exteriores/Seção de Publicações do Serviço de Documentação, 1954.
- VIANNA, Candice Sakamoto Souza. Um Japão no Brasil: heranças de 100 anos de história. In: REIS, Fernando Guimarães (org.). *Um Japão no Brasil: heranças de 100 Anos de História. Ensaio sobre a herança cultural japonesa incorporada à sociedade brasileira*. 1. ed. Brasília: FUNAG, 2008, p. 43-83.
- VILAS BOAS, S. *Biografias e biógrafos: jornalismo sobre personagens*. São Paulo: Summus, 2002.
- YAMAMOTO, Erika. Faculdade de Direito inaugura Cátedra Fujita-Ninomiya. *Jornal da USP*, 25 jul. 2019. Disponível em: <<https://jornal.usp.br/institucional/faculdade-de-direito-inaugura-nova-catedra-fujita-ninomiya/>>. Acesso em: 5 jul. 2021.
- ZIEMATH, Gustavo Gerlach da Silva; AGUIAR, Adriano Giacomet Higa de. Relações Brasil-Coreia do Sul. In: BARBOSA, Pedro Henrique Batista (org.). *Os desafios e oportunidades na relação Brasil-Ásia na perspectiva de jovens diplomatas*. Brasília: FUNAG, 2017.

付録 A エジムンド・ススム・フジタに関する情報

1. 個人情報

氏名：エジムンド・ススム・フジタ (Edmundo Sussumu Fujita)

生年月日：1950 年 3 月 7 日

出生地：ブラジル・サンパウロ州サンパウロ市

没年月日：2016 年 4 月 6 日

父母：父・藤田芳郎、母・山室千代子

配偶者：マリア・リガヤ・トレンティーノ・アベレダ・フジタ

2. 学歴

1960 年 初等教育：リセ・パストゥール (Liceu Pasteur) 卒業

1967 年 中等教育：リセ・パストゥール及びサン・ルイス校 (Colégio São Luís) 卒業

1972 年 学士 (法学)：サンパウロ大学 (Universidade de São Paulo)

1974 年 研究生 (法学・政治学)：東京大学法学政治学研究科 (Institute of Law and Politics, Tokyo University)

1975 年 外交官養成課程 (CPCD)：リオ・ブランコ学院 (Instituto Rio Branco) 修了

1980 年 外交官上級研修課程 (CAD)：リオ・ブランコ学院修了

1981 年 修士 (比較政治学)：ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス (London School of Economics and Political Science)

3. 外交官としての職歴

1976 年 三等書記官に任命

1976 年 アジア・オセアニア局 (ブラジル外務省) 配属

1979 年 二等書記官に昇進

1979 年 国際機関担当特別代表部 (イギリス・ロンドン) 勤務

1982 年 在東京ブラジル大使館 (日本) 勤務

1982 年 一等書記官に昇進

1985 年 在モスクワブラジル大使館 (ロシア) 勤務

1988 年 国際機関局（ブラジル外務省）顧問

1989 年 国際連合局（ブラジル外務省）次長代理

1989 年 リオ・ブランコ学院にて政治思想担当講師

1990 年 参事官に昇進

1990 年 国際連合ブラジル政府代表部（アメリカ・ニューヨーク）勤務

1993 年 国際連合安全保障理事会（アメリカ）副代表

1995 年 大統領府戦略問題局分析評価担当次官（ブラジル）

1995 年 二等公使に昇進

1996 年 外交官採用試験の審査委員

1999 年 特別プロジェクト担当大臣（ブラジル）特別顧問

1999 年 アジア・オセアニア局長（ブラジル外務省）

2002 年 一等公使（大使）に昇進

2005 年 在ジャカルタブラジル大使（インドネシア）

2009 年 在ソウルブラジル大使（韓国）

2015 年 外務省本省におけるサンパウロ事務所（ERESP）（ブラジル）勤務

付録 B エジモンド・ススム・フジタの書誌

年	題名	説明・出典
1981	The State and Political Participation of the Masses: The Cases of Mexico and Brazil (1930-1945)	ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス比較政治学修士課程提出論文
1988	The Prevention of Geographical Proliferation of Nuclear Weapons: Nuclear-Weapon-Free-Zones and Zones of Peace in the Southern Hemisphere	UNIDIR – United Nations Institute for Disarmament Research 第 4 巻掲載論文
1993	「非拡散体制における権力と知の方程式」(“As Equações do Poder e do Saber nos Regimes de Não-Proliferação”)	リオ・ブランコ学院第 26 期高等研究課程
1996	「ブラジルと国際連合安全保障理事会：移行の 10 年に関する覚書（1985–1995）(“O Brasil e o Conselho da Segurança (notas sobre uma década de transição; 1985-1995)”）」	<i>Parcerias Estratégicas</i> 、第 1 巻 2 号、1996
1998	The Brazilian Policy of Sustainable Defense	International Affairs (Chatham House)
2003	「ブラジルと中国：模範的戦略的パートナーシップ」(“O Brasil e a China – uma parceria estratégica modelar”)	<i>Política Externa</i> (USP)、第 II 巻 4 号、2003
2004	「ブラジルと日本の再会：小泉首相訪問 (“O reencontro de Brasil e Japão (visita do primeiro-Ministro Koizumi)”）」	<i>Jornal do Nikkey</i> (サンパウロ)、2004 年、9 月 23 日 <i>Jornal Nippo Brasil</i> (サンパウロ)、2004 年 10 月 29 日
2004	「ブラジルとアジア：外交の架け橋 (“Brasil e Ásia: Pontes Diplomáticas”）」	<i>Jornal do Brasil</i> 、2004 年 12 月 20 日
2004	「ブラジルの起業家によるアジアの再発見 (“A Redescoberta da Ásia por empreendedores do Brasil”）」	<i>Gazeta Mercantil</i> 、2004 年 12 月 20 日
2007	The Spirit of Carnival and Imlek (Chinese New Year)	<i>The Jakarta Post</i>
2007	From Rio to Bali: 15 years on road less traveled	<i>The Jakarta Post</i>
2007	A Bridge between Asia and Latin America	<i>Kompas</i> (ジャカルタ)
2008	Penny-wise and Pound-Foolish, or Bio-wise and Eco-Foolish	<i>Tempo</i> (ジャカルタ)

2008	Where have all the foodstuffs gone?	<i>The Jakarta Post</i>
2008	The Free Hand of the Market: Another Myth Laid Bare	<i>The Jakarta Post</i>
2009	Globalization Revisited in 2009	<i>The Jakarta Post</i>
2009	Perfectly FORMED (Korean culture)	<i>KAL Flight Magazine</i>
2010	「未定の極性から新興の極性へ (“Das Polaridades indefinidas rumo a polaridades emergentes”)」	『21 世紀の法における新たな道—セルソ・ラーフェルへのオマージュ (Novos Caminhos do Direito no Século 21: Uma Homenagem a Celso Lafer)』、Luiz Olavo Batista e Tércio Sampaio Feraz 編、Jurus 出版
2010	「イノベーションは韓国グリーン経済の原動力である (“Inovação é o motor da economia verde sul-coreana”)」	<i>Jornal da Ciência</i> 、共著 Mauricio Lopes と Daniel Fink
2011	Perspectives and possible paths for enhanced Partnerships between Brazil and South Korea	<i>2011 ICIC DAEDOK</i> , 共著 Mauricio Lopes と Daniel Fink
2011	「国境なき韓国：教育のグローバル化とブラジルへのシナジーに関する覚書 (“Coreia Sem Fronteiras – Notas sobre a globalização da educação e sinergias para o Brasil”)」	<i>Mundo Afora</i> 雑誌
2011	「ブラジルと韓国のシナジー的パートナーシップ (“Parceria Sinérgica Brasil-Coreia do Sul”)」	Working Paper, 4 March 2011
2011	Synergistic Korea-Brazil Partnership	<i>The Korea Times</i>
2011	「新興経済の切り札における二枚のジョーカー (“Um par de coringas na cartada das economias emergentes”)」	通信省 (Ministério das Comunicações)
2011	「ブラジルと東アジア：シナジー的パートナーシップ構築に向けた覚書 (“O Brasil e a Ásia do Leste- Apontamentos para a construção de parcerias sinérgicas”)」	<i>Política Externa</i> 、第 20 巻 2 号、2011
2011	A synergistic partnership between Brazil and South Korea	MiniCom ウェブサイト
2012	「国境なき韓国：教育のグローバル化とブラジルへのシナジーに関する覚書 (“Coreia sem fronteiras – notas sobre a globalização da educação e sinergias para o Brasil”)」	<i>Mundo Afora</i> 雑誌

2013	Brazil, Korea seek synergy over next Five years	<i>The Korea Times</i>
2013	「ブラジルと韓国における知識生産の軌跡比較：傾向と可能性（“Análise comparativa das trajetórias de produção de conhecimento entre o Brasil e a Coreia do Sul: tendências e possibilidades”）」	<i>Mundo Afora</i> 雑誌
2014	「東方の道をたどって（アジアとブラジル）（“Na Trilha do Oriente (Ásia e Brasil)”）」	<i>Exame CEO</i>
2014	「知の外交とシナジー的パートナーシップの構築（“A Diplomacia do Saber e a construção de Parcerias Sinérgicas”）」	<i>Política Externa</i> 、第22巻2号、2014
2016	「未来に向けた120年のブラジルと日本関係（“120 de Relações para o Futuro das Relações Brasil-Japão”）」	『120年：ブラジルと日本関係の未来の基盤を築く（ <i>120 Anos: Construindo os Alicerces Para o Futuro das Relações Brasil-Japão</i> ）』第1章、Alexandre Ratsuo Uehara 編、2016

付録 C エジムンド・ススム・フジタの執筆集

目次

序論.....	134
1. The reluctant artist	135
2. The spirit of Carnival and Imlek	136
3. Occidentalism	139
4. ミスチー (Misty) : 白さから白さへ	142
5. シロ (Shiro) 宛ての手紙	143
6. サンフランシスコ広場 (Largo de São Francisco) の同僚たちへの手紙	145
7. 受難の中の花	147

序論

以下に示す文書は、エジムンド・ススム・フジタによって作成された諸テキストの逐語的な書き起こしであり、その多くはこれまで未発表である。これらは、マリア・リガヤ・フジタが管理するフジタの個人コレクション資料の一部であり、フジタ自身がさまざまなテーマについて思索を深めた結果として残されたものである。

以下のテキストは、亡き愛犬への追悼文から、軍事独裁下における法学部生時代の経験をユーモラスに綴った回想まで、多岐にわたる。これらは、エジムンド・ススム・フジタという人物の内面をより親密に理解する手がかりを提供するとともに、外交官として執筆した論文・報告書・覚書にとどまらない、彼の個人的思考や性格の一端を明らかにするものである。

編纂されたテキストのうち三篇は完全に英語で記されている。これらについては、フジタが原文として書き残した形をそのまま転写することとした。各原文の下には、自由訳を添えてある。

以上の前置きを踏まえ、ここからフジタの諸文書の検討に入る。読者には、これらのテキストを通して、ブラジルにおける初の日系外交官としてのエジムンド・ススム・フジタという人物をより深く知る契機となることを期待する。

1. The reluctant artist

EDMUNDO SUSSUMU FUJITA

I never thought of having a painting experience for almost forty years. I always liked to draw characters like manga since childhood. Then I took my first lessons of perspective techniques at my primary school. At high school, I also frequented a painting institute, where I learned the technique of mixing of paint and textures. Then, I became busy with my career and forgot everything about painting, except my interest in galleries and museums.

Now, in my old age, I may be coming back to my original tastes. Suddenly, last Summer, I got a craving to paint. During my insomnia hours late at night, my therapy is to do some painting. I hope I can still remember all of those techniques that I learned during my young days.

"Memories of imagination" are fruits of these untimely adventures. I remember the many painting expositions I have attended, the museums, the artists. I am just imagining to copying some of their ideas, though not their styles. I beg for your indulgence in appreciate them.

1.1. ためらい芸術家

私は、ほぼ40年間、絵を描く経験を持つとは夢にも思っていなかった。子どもの頃から、漫画のキャラクターを描くことが好きであった。その後、小学校の頃に遠近法の基本技法を学ぶ初めての授業を受けた。さらに高校時代には美術学院に通い、絵の具やテクスチャーを混ぜる技法を習得した。しかし、その後はキャリアに忙殺され、絵画に関することはほとんど忘れてしまい、ギャラリーや美術館への関心のみが残った。

現在、老年期に入り、再びかつての趣味に立ち返ろうとしているのかもしれない。昨年夏、突然絵を描きたいという衝動が湧いたのである。深夜、眠れぬ時間に描く絵は、私にとって療法のような役割を果たした。若い頃に習得した技法を、いまだに思い出すことができればと願っている。

「想像の記憶（"Memórias da imaginação"）」は、こうした即興的な試みの成果である。私はこれまでに訪れた様々な絵画展、美術館、そして画家たちのことを思い起こす。そして、彼らのスタイルではなく、いくつかのアイデアを模倣する自分を想像する。鑑賞される方々には、どうか寛容に受け止めていただきたい。

2. The spirit of Carnival and Imlek

EDMUNDO SUSSUMU FUJITA, 2007

This week, at the height of Brazil's Carnival festivities, Asia commemorated Imlek, or the Chinese New Year. Imlek is a momentous event that has been celebrated for thousands of years by people who represent a large part of humanity.

Simultaneously on opposite sides of the world, the multiethnic society of Brazil commemorates a festival that symbolizes a veritable union of ethnic, religious, cultural, and other diversities, while the highly homogeneous Chinese celebrates its historic-cultural specificity in multi-ethnic countries. This is a remarkable coincidence, to say the least.

What is intriguing, however, is that while the Brazilian Carnival displays an authentic and spontaneous amalgam of cultures, ethnicities, and religions, one feels that the idea of harmonious unity among diverse human beings still seems to be a somewhat distant paradigm in many parts of the world, including Asia. It is known, for example, that the celebration of Imlek was not permitted in some places and occasions, as Christianity or Islam were forbidden in others.

I have followed with interest commentaries pointing out certain differentiated forms of treatment, including discrimination, between indigenous populations and immigrants around the globe. There seem to exist very surreptitious divisions, for instance, among first, second and other classes of citizens. Certain rights are given to some, privileges are conceded to others, almost always contrary to law and ethics.

In spite of being a foreigner in this land, my Oriental features almost always lead to confusion about my nationality. Once I was asked (very cordially, I must stress) by authorities of a certain country about my identity:

"What is your name, please?" he asked. "Such and such," I answered.

"What is your age and civil status?" "Such and such," I responded.

"And what is your race?" "I beg your pardon?" was my puzzled reply.

The last question surprised me. While I have some typical physical features, I am neither "white" nor the other standard, but scientifically obsolete, criteria used to respond to this question. In my country, I have never been asked about my race and I could not understand what use this type of information could have for the person who was asking the question.

The only thing I could say in response was: "Well, I believe that in certain places they would say I am 'yellow', but I think I am a little bit tanned to be considered such."

My interlocutor patiently explained that he wanted to know whether I was of Chinese, Indian or any other ethnic origin of the region. Only later did I learn the significance of this question and its implications.

I was told that in certain cases, classifications by "race" brought with them distinct types of treatment. This has made me reflect on concepts such as "nations", "bridge between civilizations", "racial equality", etc.

How can we build a world that is truly and spontaneously egalitarian and harmonious if we worry about physical appearances and skin color? The contrasting nature of the festivities this week – Carnival in Brazil (during which time diverse creeds celebrate as brothers) and Imlek in Asia (where an ethnic group celebrates its specificities within culturally and ethnically diverse countries around the world), got me to thinking about the superficiality of certain concerns of people.

The importance of human beings resides neither in the color of their skins nor in their religious beliefs. True humanity lies in the convergence of minds and hearts.

2.1. カーニバルとイムレックの精神

今週、ブラジルにおいてはカーニバルが最盛期を迎える一方で、アジアにおいてはイムレック（中国の旧正月）が祝われた。イムレックは数千年にわたり人類の大部分を占める人々によって受け継がれてきた重要な祭礼である。

同時期に、地球の反対側に位置する両地域において、ブラジルでは多民族社会が宗教的・文化的・民族的多様性の真の融合を象徴する祝祭を挙げる一方、中国人は多民族国家にあってなお自らの歴史的・文化的特質を強く保持した祝祭を営むという事実は、少なくとも偶然としてきわめて注目に値する。

しかし興味深いのは、ブラジルのカーニバルが文化・民族・宗教の真正かつ自発的な融合を体現しているにもかかわらず、人類の多様な存在が調和的に共存するという理念は、アジアを含む多くの地域において依然として遠い理想であるかのように感じられる点である。実際、イムレックの祝祭はかつて特定の地域や時期には禁止されたことがあり、それはキリスト教やイスラームが他の地域で禁じられた事例と同様である。

私は、世界各地における先住民と移民との間に存する差別的取扱いや不平等な対応に関する議論に注目してきた。そこには、市民の大一層、第二層といった分類によって潜在的な分断が生じ、ある者には一定の権利が、他の者には特権が与えられるという、しばしば法や倫理に反する状況が存在するように思われる。

私自身、異国にあって東洋的な身体的特徴を有するがゆえに、しばしば国籍に関して誤解を受けてきた経験がある。ある国において、当局から非常に丁寧にはあつたが、次のように問われたことがあつた。

「お名前は？」

「〇〇です」と私は答えた。

「ご年齢とご結婚の有無は？」

「〇〇です」と答えた。

「そして、あなたの人種は？」

「失礼ですが……」と私は驚きながら答えざるを得なかった。

この最後の質問には大いに戸惑わされた。私は典型的な身体的特徴を一部有しているが、「白人」でもなく、またこの問いに答えるために用いられる科学的に時代遅れの分類基準にも当てはまらない。自国においては「人種」を問われたことは一度もなく、この種の情報が質問者にとっていかなる意味を持つのか理解できなかったのである。

その場で私が唯一答えられたのは、「そうですね、ある地域では私は『黄色人種』と言われるかもしれませんが、少し日焼けしているのでそうは見えないかもしれません」という言葉であった。

すると相手は、私が中国系、インド系、あるいはその他の地域的出自を持つかどうかを確認したかったのだと、辛抱強く説明した。その意味と含意を理解したのは、さらに後のことである。

その後、場合によっては「人種」分類が異なる扱いを生み出すことを知った。この経験は、私に「国家」や「文明間の架橋」あるいは「人種平等」といった概念について深く考える契機を与えた。

人間の外見や皮膚の色に執着しては、真に自発的かつ平等で調和的な世界を構築することはできないであろう。今週の祝祭——すなわち、ブラジルにおけるカーニバル（多様な信仰をもつ人々が兄弟として共に祝う）と、アジアにおけるイムレック（多文化・多民族的環境にあってなお特定の民族が自らの特質を祝う）——の対照的な性格は、人間の関心がいかに表層的であるかを私に改めて考えさせた。

人間の価値は、皮膚の色や宗教的信念にあるのではない。真の人間性とは、精神と心の交わりにこそ存するのである。

3. Occidentalism

EDMUNDO SUSSUMU FUJITA

In his masterpiece “Orientalism”, Edward Said wrote an insightful piece of ideological deconstruction, showing how the supposed “cannon” about the Near East was construed by European writers, and then, subsequently utilized for political purposes by politicians and militaries in order to justify their imperialistic hegemonic ambitions.

The reverse of the medal nowadays is what we could call “Occidentalism”, which is how some political leaders see themselves as highly civilized, altruistic, and illuminated by some self-imagine civilizational right to justify their justification for their interventionistic actions in the globe, when their interests are at stake.

Recently, Guy Sorman, a French philosopher, pretending to refute the infamous thesis of “The Clash of Civilizations” perpetrated by Samuel Huntington, wrote about the virtues of the “West” in the newspaper “Le Monde” entitled “The West against the rest?”, as a model of civil organization innovative and inquisitive, as against the laggard “East”, which would be too proud and at submissive to defy a supposedly hierarchical order.

It is interesting to note that Asia is now more dynamic than the so-called West. While East is East and West is West, both seem to want to meet. Ultrationalists (ufanistas in Portuguese) on the one side, and catastrophists on the other, seem at a loss to explain, how did it come about?

The tricky part is the political manipulation and blurring of concepts, as it happened many times in recent times, purposefully or not. Parts of facts are taken as if it were the whole concept. It is known in literature as metonymy. West, historically and geographically speaking, is only Europe from Iberia to Danube. Nevertheless, it may encompass nowadays, according to the conveniences of political, military, and economic circumstances, from US to Europe to Oceania and Japan. Geographically speaking, US is not West, nor is Japan, nor Australia, nor New Zealand. Russia is Europe, but not considered West. Turkey at least geographically is partly Western, but the European Union has so far refused to accept the idea.

More dangerously, the conception of “West” is surreptitiously equated to “International Community” by interested Governments and media. Who is the international community, to start with? Who defines what are the geographical boundaries, who are the constituencies and what are the socio-cultural links? Or is it only to justify the “coalition of the willing”, as it is expediently termed when some countries deem convenient?

At the United Nations, which is the closest example of an international forum, most resolutions are adopted by 99% of countries in favor of most resolutions as against the one solitary vote casted against by US, sometimes accompanied by Israel, Marshall Islands, Solomon, and other islands. The “international coalition of the willing” (or collusion?) of military interventions around the globe has, in practice, only US, usually accompanied by the subservient UK and some dependent island countries.

The “West” (whatever that means) and the so-called “International Community”, which are deliberately mixed by the media interchangeably, are one of the most cross-manipulated concepts in the modern jargon. Who is the International Community? (UN where US is 1 outvoted by 190?), or the West where US, Australia and Japan are out of the European tradition while the rest of South America is considered just Latinos but non-Western?

Getting stranger and intriguing. West is West and East is East? I am having doubts about my (dis)orientations...

3.1. オシデンタリズム

エドワード・サイードはその代表作『オリエンタリズム』において、近東に関するいわゆる「正典」がいかにしてヨーロッパの作家たちによって構築され、その後、帝国主義的なヘゲモニー的野心を正当化するために政治家や軍人によって政治的に利用されたかを、鋭いイデオロギー批判として描き出した。

今日におけるその裏面とも言うべきものが、ここで「オシデンタリズム」と呼び得る現象である。それは、一部の政治指導者が自己を高度に文明化され、利他的で、ある種の「文明的権利」に照らされ啓発された存在とみなし、そうした自己像をもって世界各地への介入主義的行為を正当化するという構図である。

近年、フランスの哲学者ギー・ソルマン (Guy Sorman) は、サミュエル・ハンチントン (Samuel Huntington) による悪名高い『文明の衝突』論を反駁するかのように振る舞いながら、『ル・モンド』紙上に「西洋対その他？」と題する論考を寄せた。そこで彼は、「西洋」を革新的かつ探究的な市民的組織モデルとして称揚し、一方で「東洋」を、あまりに自尊心が強く従属的であり、仮構された序列秩序に抗うことのできない遅滞した存在として描き出した。

しかし注目すべきは、現在アジアの方がむしろ「西洋」と呼ばれる地域よりもはるかに動態的であるという事実である。「東は東、西は西」と言われるものの、双方は互いに接近を欲しているようにも見える。片や超国家主義者、片や悲観主義者は、この現象をいかに説明すべきかに窮しているのである。

問題の核心は、意図的にせよ無意識的にせよ、概念の政治的操作と曖昧化にある。部分的な事実を全体の概念であるかのように提示する手法は、文芸批評においては換喩 (メトニミー) として知られている。「西洋」は歴史的・地理的に言えば、イベリア半島からドナウ川に至るヨーロッパを指すにすぎない。しかしながら、現代においては政治的・軍事的・経済的便宜に応じて、アメリカ合衆国からヨーロッパ、さらにはオセアニアや日本にまで拡張されることがある。地理的に見れば、米国も日本もオーストラリアもニュージーランドも「西洋」ではない。ロシアはヨーロッパに属するが「西洋」とは見なされず、トルコは少なくとも地理的には部分的に西洋に含まれるが、欧州連合はいまだその受容を拒み続けている。

さらに危険なのは、利害関係を有する政府やメディアによって、「西洋」という概念が「国際社会」と事実上同一視されている点である。そもそも「国際社会」とは誰を指すのか。その地理的境界、構成主体、社会文化的紐帯はいかに定義されるのか。それとも、都合のよい場合に「有志連合」と称されるものを正当化するための方便にすぎないのだろうか。

実際、国際的な討議の場として最も近い例である国際連合において、多くの決議は加盟国の 99%が賛成する形で採択されるが、それに反対票を投じるのは米国ただ一国、あるいはイスラエルやマーシャル諸島、ソロモン諸島など数か国が同調するにとどまる。有志連合と称される軍事介入も、実際には米国を中心とし、そこに従属的な英国や島嶼諸国が加わる程度に過ぎない。

このように、「西洋」（それがいかなる意味を持つにせよ）と「国際社会」という概念は、現代の言説において最も恣意的に操作されるものの一つである。国連における「国際社会」とは、190 か国に対し米国が 1 票で敗北する場合なのか。それとも、米国・オーストラリア・日本といったヨーロッパの伝統から外れる国家を含み、南米諸国を「ラテン」として「非西洋」に分類する「西洋」のことなのか。

事態はますます錯綜し、興味深く、同時に不可解である。西は西、東は東と断じることとはできるのか。私は、自らの（非）方向感覚に疑念を抱かざるを得ないのである。

4. ミスチー (Misty) : 白さから白さへ

ミスチーは14年間、私たちの伴侶であった。彼女の旅立ちを、いまだに受け入れることができずにいる。とりわけ、なぜあのような去り方をしなければならなかったのか、その理由を理解できないでいる。彼女は真っ白な毛並みをもつ秋田犬で、美しく、気品に満ちていた。確かに、同じ犬種に多いように、少々頑固なところもあった。しかし、いつもいたずらで私たちを笑わせ、家の空気を明るくしてくれた。

時は流れていたが、私たちはそのことに気づかずにいた。妻と私は、彼女を自分たちの存在の一部として当然のように受け止めていた。しかし彼女は人間よりも速く歳をとっていった。彼女にとっての14年は、人間に換算すればおよそ90年に相当する。心はまだ冴えていたが、体がそれに追いつかなくなっていた。

やがて、少しずつ老いの兆しが現れはじめた。かつて優雅だった腰を蝕む関節炎、ジャボチカバの実のようだった瞳を覆う白内障、誇らしげに立っていた耳を鈍らせる聴力の衰え。そして何よりも、筋肉の働きを失っていく内臓の衰え…。誇り高い彼女にとって、そして私たちにとっても、その生理的な失禁は次第に頻繁になり、耐えがたく、そして痛ましいものであった。

しだいに、彼女は家の中の部屋には入れなくなった。使用人は絶えず彼女の排泄の後始末をしなければならず、それはかつて真っ白だった毛並みにも染みついていった。漂う臭気は、彼女自身をもひどく苦しめていたに違いない。

ある午後、仕事から戻ると、使用人が絶望的に叫びながら、プールの底で溺れていたミスチーを助け出そうとしていた。慌てて一緒に水から引き上げたが、すでに手遅れだった。間もなく仕事から戻った妻リガヤは、濡れたその体に必死でドライヤーをあて、生き返ることを祈ったが、命は戻らなかった。

翌日、私たちは彼女を火葬場へ連れて行った。最後にその体を見つめたとき、ミスチーはかつてのように真っ白で、美しい姿をしていた。火葬の炎に包まれる彼女を見ながら、私は思った——「なぜ彼女はあのように逝ったのか。私たちと過ごした彼女の人生は、どんな意味を残そうとしたのか」と。炉から取り出された遺灰には小さな骨片が残っていたが、頭の形はほぼそのまま残り、空洞になった眼窩が私を見つめているように思えた。

あの日の衝撃からしばらく時を経たいまも、私はなお彼女の最期を理解しようとしている。拙いながらもフロイト的な死の象徴解釈により、せめて自らを慰めようとしている。

誇り高い彼女は、自らの老いた姿、失禁、漂う匂いに耐えがたく、羞恥を感じていたのだろう。半ば盲目となった彼女は、純粋な心で水に身を投げ、身を清めようとしたのかもしれない。リガヤが必死にその冷たい体を温め直そうとしたとき、ミスチーは再び白く、清らかな姿を取り戻した。その姿を、私たちは今も心に焼き付けている。そして火葬を終えたあと、私は彼女の小さな顔が私を見つめ、「ねえ、昔のように、私はまた白くきれいに戻ったでしょう？」と問いかけているように感じた。

5. シロ（Shiro）宛ての手紙

ここ数週間、シロは毎朝 4 時に私を起こして散歩に連れて行こうとした。私は心配性でありながらもどこか諦め顔の父親のように、真夜中の一番深い眠りの途中で起き上がり、家のいくつもの扉を開けてやった。もちろん、その後は眠れなくなってしまう。仕方なく、その時間を利用して友人たちにメールを送ったりしていた。

私があまりに深く眠っているときには、シロはゲイに懇願していた。不思議なことに、彼は決して吠えなかった。おそらく声を持たない犬だったのだろう。近ごろはますます耳が遠くなり、ただ鋭く胸を突くような鳴き声をあげるばかりだった。

耳が聞こえなくなり、おそらく視力も衰えつつあった彼は、いつもゲイや私の後を、ただ匂いだけを頼りについて回った。何度も転げ落ちて痛い思いをしたにもかかわらず、勇敢に階段を上り下りしていたことも忘れられない。一時期は恐怖心から階段を上らなくなったが、それでも「私たちのそばにいたい」という気持ちが勝り、やがてまた何事もなかったかのように上り下りするようになった。

彼はしばしば咳き込み、私たちは喉に何か詰まっているのではないかと心配した。獣医を呼んだところ、肺に問題があるのではないかと言われ、抗生物質やビタミンで治療した。しかし、血を吐き、食欲を失ったとき、私たちはより深刻な病であることを悟った。二つの動物病院でレントゲン検査を受けたところ、肺はすでに完全に冒され、残された機能はわずか 40%に過ぎなかった。癌なのか、腫瘍なのか、あるいはウイルス性のものかは特定できなかった。確定には手術が必要だったが、いずれにせよ治る見込みはなく、苦しみながらゆっくりと死を迎えるほかはなかった。

そこで私たちは、彼の苦痛と、私たち自身の苦しみをこれ以上長引かせないため、獣医の勧めに従い、安楽死という断腸の決断を下した。あまりにも辛い決断で、何日も眠れず、泣き続け、自分たちはシロにひどく不公平な仕打ちをしたのではないかと責め続けた。その最期の日、彼はむしろ元気そうで、快方に向かっているかのように見えた。二度も立ち上がり、外に出て用を足した。シロは最期まで規律正しく、家の中を汚すことは一度もなかった。排泄のコントロールも完全に保っていた。私たちは一瞬決断を取り消そうとしたが、獣医は「無駄ですよ」と静かに言った。

シロは私たちのそばに身を寄せ、「守ってくれる」と信じていた。ゲイと私は子犬のような彼を抱きしめ続け、ゲイはただ泣きながら「ごめんね、許して、愛しいシロ」と英語で繰り返した。致死の注射を受けた彼は、静かに、安らかに息を引き取った。真っ白な毛並みをまとい、まるで小さな熊のように美しい姿のままで。私たちの腕の中で、眠るように旅立った。ミスチーと同じように、シロもまた私たちに大きな喜びを与えてくれた。特に彼女の死後は、忠実な子犬であり伴侶であり続けてくれた。彼は最後の瞬間まで「ジェントル・ドッグ」であり、私たちの帰宅を、尻尾を振りながら喜びと満足をもって迎えてくれた。

私たちは彼を火葬にし、今はミスチーの隣にその灰を置いている。二匹が共にいてくれた 13 年間は、幸せに満ちていた。彼らは私たちと一緒にアジアにま

で渡り歩いてくれた。今、私たちは子どもたちを失ったのだ。しかし、それでも人生は続いていく……

6. サンフランシスコ広場（Largo de São Francisco）の同僚たちへの手紙

親愛なる友人ならびにフランシスカノの同僚諸氏へ

私は、40 年前の 1968 年における法学部占拠事件の記念行事を、遠くからではあるが、郷愁をもって見守り、精神的に共にしている。その際、当時の参加者それぞれが、自身の視角と状況のもとに出来事を回想することによって、歴史的瞬間における「アルカードス（法学部アーチ型回廊）」の役割を全体として再構築することが可能となる。

私もまた同世代の多くと同様に、この占拠にささやかながら関与し、またその余波を実際に体験した者の一人である。ここにおいて、同僚ブッゾニ（Buzzoni）氏が編纂した『独裁時代のアルカードス（*As Arcadas nos anos da Ditadura*）』の刊行、さらに「八月十一日学生会」によって推進された占拠 40 周年記念プレートの設置式に敬意を表したい。

想起すれば、当時の主要なスローガンの一つは大学改革であった。それは学問的・カリキュラム的側面のみならず、組織的・参与的側面に及んでいた。我々は、終身教授職の廃止、社会的要請に即したカリキュラムの再編、大学制度の民主化、そして大学運営における対等な代表制を求めている。

しかし、当時の権威主義的政府の反応は、学生運動への弾圧と、いわゆる「スプリシー法（Lei Suplicy）」の制定によって具現化された。この法律は、従来の学生自治組織を無効化しようとし、人工的な代表制を押しつけることを狙ったものであった。だがその戦略は功を奏さず、多くの「合法的」学友会はむしろ結束し、周縁化されつつあった学生センターの要求を代弁する共鳴装置として機能するようになった。

私は 1972 年、学生代表の一人として法学部評議会に選出された。約 30 名の教授に対し学生はわずか 3 名という、望まれていた対等な代表制には程遠い状況であったが、それでも学生が声を発する機会を得たことは有意義であり、意識を高める経験であった。

我々は教育改善、学部の行政・組織上の課題、そして何よりも、1968 年の占拠に関与した同輩を対象とする懲戒手続について議論を重ねた（これは最終的に巧みな遅延戦術によって不起訴となった）。当時の学生代表は、まるで初心者楽団のようであった。親愛なる友人マリア・エレナ・ピメンテル（Maria Helena Pimentel）がトランペットを奏で、私はバスチューバを担当する、といった具合であった。しかし、その稚拙な楽団も調和を奏でることができたのである。1 年間の任期を終えたとき、我々は 1968 年の同僚に対する義務を果たしたという充実感を抱いていた。

本日、この記念の場において往時を追想するにつけ、私は 1969 年 6 月 23 日の精神が再び甦るのを誇らしく感じている。願わくは、新たな世代の学徒が、この理想主義と行動主義の炎を絶やすことなく、我々の世代が未来のブラジルに捧げようとした精神を継承していくことを望むものである。

学術的敬意をこめて

エジムンド・ススム・フジタ（大使）

2008 年 6 月 23 日

7. 受難の中の花

イースター休暇の長期連休を利用して、私は妻とともにインドネシアの広大な群島内のより遠隔の地を訪れ、文化的学びをさらに深めようと決意した。ボロブドゥール、プランバナン、ジョグジャカルタ、スマトラ、スラウェシ、パプアなどにはすでに訪れた経験があったが、復活祭という時節を考慮し、今回はインドネシアにおける豊かな宗派的多様性を体験できる「宗教的観光」とも呼びうる旅を選択した。私たちは特段敬虔な信徒ではないものの、単なる傍観ではなく実践を伴う旅とすることで、より相乗的な経験を得ようと考えたのである。

フローレス島は、東ヌサ・トゥンガラ州に属し、ジャカルタから約 2000 キロの距離に位置する。そこへは、まずバリ島まで 1 時間半の飛行、その後マウメラまでさらに 1 時間半の飛行、そして陸路 3 時間を経て最終目的地ララントゥカに至る。この地は 1512 年のポルトガル人來訪以来、国内におけるカトリック信仰の中心地として知られてきた。私たちがこの時期に当地で体験した出来事は、まさに忘れ難いものであった。

私がラテン語によるミサに通っていた青春時代以来、これほど豊饒で熱烈な典礼に再び触れることはなかった。壮麗な島々と静穏な海を臨む道程を経てララントゥカに到着したのは、3 月 19 日（水）の夜半前であった。そこでまず目にしたのは、約 700 年前に創設されたララントゥカ王国の守護者「ロザリオの女王」に捧げられた祈祷であった。信徒たちが唱和する声は、ラテン語、古ポルトガル語、そして現地方言が入り混じり、まるで催眠的とも言える祈りの連なりであり、約 1 時間にわたって続いた。この儀式は、海から奇跡的に（おそらくマラッカより）到来したと伝承される聖母像「トゥアン・マ」が安置された礼拝堂で執り行われ、聖木曜日の朝に予定されている「顕現」のための前儀であった。続いて、司教館と前王妃邸宅の間に位置する「トゥアン・アナ」礼拝堂を訪ねると、民衆が盛大な大行列のための練習をしていた。

翌 20 日午前 8 時、群衆はトゥアン・マ礼拝堂前に集結し、聖像崇拜のための扉の荘厳な開扉を待ち受けていた。当地には「コンフレリア (*Konferia*)」と呼ばれる組織が存在し、篤信の地元信徒から選ばれ、1622 年には教皇グレゴリウス 16 世により承認を受けた。この組織が聖母像管理を担い、また 1599 年に初めて行われたとされる聖金曜日大行列を主宰している。

その古王国最後の王（洗礼名ドン・ロレンソ・ディアス・セラ・デ・ゴディーニョ (Dom Lourenço Dias Serra de Godinho)) の末亡人ママ・ドンナの手によって礼拝堂の扉が開かれると、人々は膝をつきながら奥へ進み、顕現したバロック様式の聖母悲哀像の足に口づけをした。その間、私の大いなる驚きとして、膨大な会衆がブラジル訛りでポルトガル語のロザリオを唱えていたのである。なお、私自身は「ボンフィン教会の石段」で修練を積んだ経験がないため、儀式後には両膝が痣だらけとなったことを告白せねばならない。

その後も、「立像キリスト (Standing Christ)」をはじめ、周辺の島々に点在する多数の礼拝堂や聖像を訪ね歩いた。ワイバルン島の「牧者としての王キリスト」像や、司教館前にある「ロザリオの女王」像など、宗教芸術の豊かさに圧倒された。

さらに聖木曜日の夜には、司教座聖堂において洗足式の荘厳な歌ミサが執り行われた。ララントゥカの人々は音楽的才能に恵まれており、各小教区には洗

練された合唱団があり、週ごとのミサで交代に奉仕している。印象深かったのは、私たちの滞在中、案内役や運転手、写真家に至るまで、多声部で宗教歌を歌いこなしていたことである。ハンデルの「ハレルヤ」まで響き渡ったのは実に驚きであった。

ララントウカの聖週間の頂点は受難日である金曜日である。午前には「トゥエ・メニヌ（聖なる御子）」の像をコタ（市）の浜辺から 15 キロ離れた海上の礼拝堂から船で運ぶ海上行列が行われる。櫓で漕ぐ伝統船サンパンによって司教館へと運ばれるその行列は、数十隻の漁船によって彩られ、約 1 時間半を要した。私たちも同行したが、像に少しでも近づこうとする多くの込んでいる舟と衝突の危険を孕みながらの進行であった。

夜には、地上での大行列が始まる前に 2 時間に及ぶ荘厳ミサが執り行われ、4 時間ほどかかる行進中に歌われる主要な曲が「予行演習」される。特に感動的だったのは、各ステーションで「聖ヴェロニカの嘆き」を模したアリアが、卓越したソプラノによって無伴奏で歌われる場面である。

準備を終えた市民は黒衣に蠟燭を手に、司教座聖堂を発ち、トゥアン・マとトゥエ・メニヌの像を担いで行進する。「ニコデモス」と呼ばれる中世風衣装に身を包んだ信徒たちが像を担ぎ、白衣を纏ったコンフレリアが式を進行させる。十字架の道を提示する各小教会で停留するたびに、ヴェロニカの嘆きとロザリオの祈りが繰り返されるのである。

復活祭前夜の土曜日には、アルファとオメガを象徴とした壮麗な復活祭ミサが執り行われ、人々の希望の再生が告げられる。ここでは詳細は割愛するが、ララントウカ司教フランス（Frans）との出会いや、前王妃ママ・ドンナとの会話、あるいはカトリック信仰を保持する伝統的村落での歓迎の儀礼舞踊と音楽、さらには 16 世紀以来ジャカルタに根付くポルトガル系トゥグ伝統を想起させるカヴァキーニョやアコーディオンを含む楽団との交流なども、我々の記憶に深く刻まれた。

私は、多様な宗教のメッセージを理解するにあたって排他的であってはならないと信じる。その根源は一つである。インドネシアに来て以来、18,000 の島々、300 の民族、400 の方言を抱えながら持続し、統合し、共存し得るこの国の奇跡的ともいえる姿に常に感銘を受けてきた。9 世紀以来、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教の文明と帝国が重層的に築かれ、さらにポルトガルとオランダの影響が加わり、寛容と適応の独自の複合性を形作ってきた。私と妻がこうした多様な人々と文化に接する中で、この地域において文明間対話の希望が確かに存在すると私は信じるに至ったのである。

ジャカルタ、2008 年 4 月

付録 D エジムンド・ススム・フジタの友人 や仕事同僚からの証言集

本書の以下に収録される証言は、マリア・リガヤ・フジタ大使夫人によって収集されたものであり、エジムンド・ススム・フジタという人物が、友人や職業上の同僚の眼差しを通してどのように認識されていたかを示すものである。これらの証言が公にされることにより、本書の著者が提示してきたフジタ像を越えて、同氏の人柄を同僚、芸術家、そして友人としてさらに理解する手掛かりとなることが期待される。

I. フォンソ・ジョゼ・セナ・カルドーゾ (Afonso José Sena Cardoso)、退任大使。2022 年 8 月 10 日。

私は、友人、仲間、そして仕事上の伴侶として、エジムンドと関わる特権を有した。私たちが初めて出会ったのは 1974 年、リオ・ブランコ学院入学試験においてであった。彼は日本人移民の子として、私はポルトガル人移民の子として、それぞれ家族の中で初めて高等教育を修了した者であり、いずれも外交官の親族を持つわけではなかった。

各自が有する社会的・文化的背景に加えて、私たちはともに公教育機関での学びを基盤とし、1964 年に始まった権威主義体制の末期に特有の不安と希望を共有していた。当時のイタマラチーは、一定の範囲ではあったが、外交政策は必ずや国家の経済的・社会的発展に資するべきだという根幹的理念を保持しており、その枠組みの中で私たちは外交官としての能力と伝統を身につけ始めたのである。

エジムンドが特に卓越していたのは、多国間外交における活動であり、また二国間外交においては、アジアとの相互利益に基づく関係深化に尽力した点にあった。加えて、大統領府戦略問題事務局での勤務は彼にとって貴重な経験となった。海外において唯一ともに活動した際には、私にとってエジムンドがパートナーであったことは大きな価値を持ち、我々はロナウド・サルデンベルグ (Ronaldo Sardenberg) 大使およびルイズ・アウグスト・ジ・アラウジョ・カストロ (Luiz Augusto de Araújo Castro) 大使を補佐し、国際連合安全保障理事会におけるブラジル代表団の一員として従事した。

かくしてエジムンドは、ブラジルの国際的関与が変容し、拡大していく歴史的瞬間に立ち会ったのである。そして私は、自らの経験に基づき、また同僚や各国のカウンターパートの証言を通じて、彼がこれらの過程の成功に多大な貢献をなしたと確言できる。

ソランジ (Solange) と私は、エジムンドの生涯の伴侶であったマリア・リガヤの到来を、常に温かな感慨とともに記憶している。友人、仲間として、私とソランジ、そして私たちの家族や友人たちは、彼らがもたらしてくれた多様な才能と惜しみない友情をともに祝福した。

エジムンド、そしてマリア・リガヤは、40 年以上にわたり、私たちと喜びも悲しみも分かち合ってくれた。その存在は単なる思い出にとどまらず、今もなお私たちの人生を形づくる確固たる一部となっている。

II. マリア・ルイーザ・ヒベイロ・ヴィオッティ (Maria Luiza Ribeiro Viotti)、大使。国連事務総長アントニオ・グテーレスの内閣長官 (2017-2021)。2020 年 10 月 5 日。

エジムンド・フジタについて語ることは、容易であると同時に困難でもある。容易であるのは、彼が私にとってかけがえのない友人であり、深い敬意を抱いた同僚であったからである。他方で困難であるのは、いかなる言葉をもってしても、彼の職業人として、また人間としての卓越した資質、さらには外交官として遺した豊かな遺産を十分に表現し尽くすことは不可能だからである。

私たちが初めて出会ったのは、1974 年末、リオ・デ・ジャネイロで実施されたリオ・ブランコ学院の入学試験においてであった。それは長期にわたり緊張を強いられる過程であり、常に脱落の危険が伴う一連の試験であった。実際、途中で試験に失敗する者もあり、残された私たちには、不運な仲間を見送り、空港まで同行するという悲しい儀式が課せられた。

他州から来た受験生は、フラメンゴ地区のレジーナ・ホテルに宿泊していた。厳格な学習の日課が課され、昼食や夕食の時間は、その日の読書内容について意見を交換する機会であると同時に、気分を和らげ雑談する数少ない時間であった。エジムンドは十分な準備を整えていたため、本来であれば海や都市の文化的魅力を楽しむ余裕もあったはずである。だが彼はそうした性分ではなく、むしろ厳格な規律心と完全を期す気質を備え、他の受験生と同様に厳しい勉強の規律を貫き、読書に没頭していた。

最終的に、レジーナ・ホテル組で最後まで残ったのは私とエジムンドの二人であった。私の便が彼より早かったため、エジムンドは親切にも私を空港まで送ってくれた。その時の心境は以前とは異なっていた。私たちは疲労困憊していたが、同時に歓喜に満ちていたのである。最終段階に至ることができた達成感に包まれていた。そしてエジムンドの場合には——驚くには当たらないことだが——さらに特筆すべき成果として、首席合格を果たしたのである。

それ以来、私たちは友情を育み、リオ・ブランコ学院での最初の一年を通じてそれはさらに強固となり、年月を重ねるごとに深まりを増していった。その関係は配偶者であるマリア・リガヤおよびエドゥアルド (Eduardo) にも及び、親密な交友関係が築かれた。1975 年末には、いわゆる「直接試験」と呼ばれる特別試験が実施され、それに合格した者はリオ・ブランコ学院での課程を経ずに外交官として任用される制度が存在した。エジムンドはこの試験に挑み、今度では次席で合格し、1976 年初頭に正式に外交官として任官した。

エジムンドにおいて私が常に感銘を受けたのは、堅固な学問的素養、鋭い知性、誠実さ、人格の正しさに加え、幅広い教養と知的好奇心であった。それは彼が関わる課題にとどまらず、実に多様な領域に関心を向け、知識を深化させようとする姿勢に表れていた。この特徴は彼のキャリアを通じてますます顕著になっていった。しかしその知的探求心は単なる学問的関心にとどまらず、外交実践に直結する戦略的配慮と責務意識に支えられていたのである。

洗練された美的感覚と芸術への関心もまた、彼の重要な一側面であった。音楽、演劇、文学、美術などへの愛好は、ロンドン、東京、モスクワ、ニューヨーク、ソウルといった赴任地においても刺激と機会を得ることができた。ブラジルの芸術や文化の紹介は、彼が喜びをもって取り組んだ外交活動の一環でも

あった。趣味の一つにリコーダー演奏があり、リオ・ブランコ学院時代には私と共に演奏したこともある。また壮年期には絵画に傾注したことも記憶に残っている。

エジムンドは、信頼を寄せるに足る人物であり、常に頼ることのできる存在であった。善良で寛大、友人思いであった。外交官という職務上、長く会わない時期があったとしても、友情が揺らぐことはなく、再会すれば、まるで会話を中断した直後からそのまま再開するかのようであった。

さらに彼のもう一つの顕著な特徴として、美食と良質なワインを愛した点を挙げないわけにはいかない。妻マリア・リガヤと共に友人をもてなし、彼女は非の打ち所のないホステスであり、卓越した料理人であった。思い出深い晩餐、夜更けまで続く尽きない会話、それらは今も鮮明に記憶に刻まれている。

エジムンドは、マリア・リガヤという真の伴侶を得た幸運に恵まれた。彼女は一生のパートナーであり、趣味や関心を共有する存在であった。それのみならず、彼女自身きわめて有能な専門職であり、知性、温雅さ、感受性、才能によって、夫の外交官としての歩みに不可欠の協働者となったのである。

III. マリア・ラウラ・ダ・ホシャ (Maria Laura da Rocha)、駐ルーマニア・ブラジル大使 (2019-2022)。現イタマラチー外務省事務総長。2022 年 8 月 2 日。

私がリオ・ブランコ学院に入学した 1977 年当時、すでにイタマラチーにはエジムンド・フジタという若く才能ある外交官がいることを耳にしていた。実際に彼とその最愛の妻マリア・リガヤと親しく交流する機会を得たのは、ゴルバチョフのペレストロイカ期にモスクワで過ごした時である。そこでは、ロナウド・サルデンベルグ大使の指揮の下、同じ在モスクワ・ブラジル大使館に勤務した。あの時代は、過酷な労働と雪深い夜、そして麻雀に興じながら果てしなく続いた語らいとともに、忘れ得ぬ思い出として刻まれている。

ソ連体制の初期的変革が始まり、世界の注視が集中する激動のモスクワにおいて、国際外交団、報道関係者、さらには各国企業人が、都市の昼夜を活気づけていた。フジタ邸で催された祝宴や舞踏の集いは瞬く間に評判を得た。それはブラジル音楽の響きと主人夫妻の温かなもてなしによる享楽に満ちただけでなく、参加したソ連および諸外国の専門家たちにとって、経験や政治分析を交換する貴重な場ともなったからである。

私はエジムンドから、細部への配慮と概念の正確性がいかに重要であるかを学んだ。彼が高等研究課程に提出した論文は、国際的な先端技術およびデュアルユース技術の開発と移転を規制する管理メカニズムの仕組みを明晰に解明している。後年、私が自身の論文を執筆するにあたり、この研究を精読し、大いに参考としたことをここに強調したい。

私たちは再び、ロナウド・サルデンベルグ大使が大統領府戦略問題担当長官を務めた時期に共に働いた。当時、エジムンドは「ブラジル 2020」と題された将来予測およびシナリオ構築の作業を統括する任を担っていた。20 世紀末にあって、世界が楽観と繁栄の兆しを示し、より生産的で良好な時代が訪れるかのように思われた。しかし残念ながら、21 世紀最初の 20 年において現実となったのは、彼らが想定した最悪のシナリオであった。

卓越した外交官としての資質に加え、エジムンドは一人の完璧な芸術家でもあった。深い感情を込めて文章を綴り、ピアノやフルートを奏で、鮮やかで調和に満ちた色彩を湛える絵画を描いた。動的で、学究的かつ創造的な彼の思慮深さと、時に見せる譲らぬ姿勢は、友人、上司、同僚にとって常に一つの規範であった。

彼はあまりにも早くこの世を去った。しかし、その鮮烈な存在感と、生への感染力ある愛情は、彼を知り、敬愛したすべての者にとって、今なお尽きぬ靈感を与え続けている。

IV. セシーリア・キク・イシタニ (Cecília Kiku Ishitani)、国連ジュネーヴにおけるブラジル代表部次席大使。2022 年 10 月 9 日。

エジムンド・フジタ大使は、私が外交官としての職務に就く以前から、重要な指標であった。博識かつ研鑽を重ねた外交官として広く認められた彼は、まさに完璧なシンクレティズムの体現者であった。すなわち、規律と責務に対する強い自覚といった日本的伝統の諸要素を十全に体得すると同時に、それらをブラジルへの深い献身と見事に融合させていたのである。

私が外交官の職に就いたばかりの 1990 年代半ば、フジタ夫妻はすぐに私を温かく迎え入れてくれた。常に友人たちに囲まれていた二人の自邸でのレセプションは、親切かつ温情に満ちた場であり、経験豊富な同僚を紹介してもらえる貴重な機会であった。それはまた、遊牧的ともいえる外交生活において、家庭的な友情と支えを確かに得られる場でもあった。

高度に複雑な主題を専門としたエジムンド・フジタ大使は、その正確さと規律に裏打ちされた手腕によって、将来のシナリオや趨勢を予見する才能を有していた。その能力は、大統領府戦略問題事務局における業績などにおいて、遺憾なく発揮された。さらにフジタ大使は、アジアを広範に理解する先駆者でもあった。

東アジア局 (Departamento da Ásia do Leste, DAL) 局長としての活動の一環として、彼は 2000 年初頭に「21 世紀におけるブラジルとアジア」と題するセミナーを開催した。この場において、アジア研究の専門家たちは各々の見解を共有し、それらは後に重要な論文集として編纂された。この取り組みは、同地域をめぐる新たな対話の場を切り開いた画期的な試みであった。

私的な側面においても、高等研究課程論文の準備を始める際、私は彼の貴重な助言を仰ぐ特権を得た。その過程で示された膨大な蔵書群は、彼の学究的軌跡の豊かさを如実に物語っていた。後年、私が東アジア局の局長代理および日本・朝鮮半島・太平洋課長を務めた際には、彼が長年をかけて培った幅広い人脈を活用することができ、その多くが夫妻と親しい友人関係を結んでいた。

フジタ大使の足跡を辿ることは、私に責任感を抱かせると同時に、喜びと靈感の源泉でもあった。それは、祖先から受け継いだ価値と伝統を、ブラジルへの揺るぎなき献身と融合させた姿の模範であった。今日、私が多国間外交の場に勤務することは、ある意味で彼の歩みを継承することに他ならない。彼の最初の任地が多国間分野であったこと、そしてその課題に対して示した熱意を、私は鮮明に記憶している。

彼の早すぎる逝去は、私にとって達成や歓びを共に分かち合えない深い哀しみを残した。しかし、家族や友人との交わりを祝い、全力で職務に打ち込み、新たな関心を育んで自己と世界への洞察を広げ続ける姿は、私にとってのフジタの記憶を形づくるものである。最後に、この回想の機会を与えてくださったリガヤ・フジタ大使夫人に感謝を表するとともに、彼女の英断を称えたい。国連における輝かしい経歴を持ちながらも、卓越した才能と天賦の外交的資質をもって夫の歩みを支えた彼女は、フジタの人生に不可欠な存在であった。

V. クラウジア・キミコ・イシタニ・クリストーフオロ (Cláudia Kimiko Ishitani Christófolo)、国連ジュネーヴ におけるブラジル代表部参事官。2022 年 10 月 9 日。

ブラジル外交団に初めて加わった日系人として、エジムンド・ススム・フジタ大使は、今日イタマラチーに所属する他の日系外交官たちに道を拓いた先駆者であった。彼は同時代の人々からだけでなく、後進の同僚たちからも尊敬を集め、その知識を求めて訪れる多くの人々に対して惜しみなく知見を共有した。

私がリオ・ブランコ学院において 2004 年から 2005 年にかけて「修士」論文を執筆した際、研究対象は中伯関係であった。当時、中華人民共和国は現在のような政治的・経済的戦略的地位を確立してはおらず、その文脈の中でフジタ大使にインタビューを行った。私はその時、まるで一流の講義を受けているかのような感銘を覚えた。

さらに十数年を経た後、私が高等研究課程論文において日伯戦略的パートナーシップを論じた際には、かつてフジタ大使が快く提供してくださったインタビューの一部を再び参照する機会を得た。それは、彼の豊かな知識、業績、そして遺産に対してささやかな敬意を表する方法であった。不幸にして再度直接お話を伺う機会には恵まれなかったが、彼の残した言葉と歩みは、私の研究にとって今なお大きな指針である。

VI. ジョアン・パウロ・バルボーザ (João Paulo Barbosa)、写真家・歴史家。2021 年 5 月 29 日。

エジムンド・フジタ——文化の外交官。彼は卓越した数々の外交活動を展開したが、その中でも文化外交における姿は特に印象深いものであった。私にとって、芸術や文化の話題になるとき、彼の眼差しは一層強く輝きを放っていたことが忘れられない。芸術家に対する彼の温かな受容、そして文化の発信にかける真摯な姿勢は広く知られている。私は、芸術家としてというよりも、むしろ飾らない人間としての彼の姿から深い感化を受けたのである。

私にとってエジムンドは「人文主義者サムライ」であった。彼の剣は、実際には筆であった。その芸術に対する禅的な視座は、核心を直截に捉えるものであった。彼は夢を思い描き、それを実現へと導いた。芸術の領域において、彼は自由と自信をもって（再）創造を行った。ピアノ、フルート、演説、文章など多様な表現活動をこなし、さらにはカラオケにおいてフランス語で歌い、私たちが勝利を収めたことをも思い出す。エジムンドにとって、例えばカポエイラは紛れもなく芸術であった。そして料理もまた然りである。人生を芸術として生き、成長し、自らを確立し、あらゆる場に自在に身を置くことのできる人

物であった。ジャカルタのワルンで臓物料理を味わうことから、韓国で「奇異」と思われる食文化に触れることまで、彼はその全てを芸術的経験として受け止めていた。

外交官として最高位に就きながらも、新進の芸術家たち——私自身やデウサ、ミン、ガブリエル・グロッシら数多くの若手に惜しみなく敬意を払い、支援を与えたことは、真の芸術家にふさわしい謙虚さの表れであった。

私が芸術の道を選んだからこそ、2007年から2012年にかけて彼と過ごした日々は、最も豊かな交流の時期となった。まさに魔法のような年月であった。

VII. ミン・パク (Ming Park)、韓国人写真家・作家。2021年8月2日。

私にとってエジムンド大使は、まさに「ブラジルの父」のような存在であった。彼は、私に写真家として成長する機会を与えてくれただけでなく、他分野における私自身の職業的可能性に目を開かせてくれたのである。大使の支援のもと、写真家ジョアン・パウロ・バルボーザと私は一か月にわたり韓国各地を旅し撮影を行った。その成果は、写真展および写真集 *Korea and Brazil: Mirror Images of a Journey* の刊行へと結実した。

この旅行と写真展は、単に写真家として活動する機会にとどまらず、企画、キュレーション、カタログや書籍の制作といった貴重な経験を私に与えてくれた。その結果、私は短期間のうちに、撮影の枠を超えて自己の技能を拡張することができたのである。

また、芸術家でもあった大使は、他の芸術家たちの心情を深く理解する人物であった。彼自身、画家や音楽家としての特別な才能を有し、さらに自邸において文化的・美食的な催しを主宰し推進した。

VIII. ユン・ヘジン (Yoon Hye Jin)、韓国人フルート奏者。2022年9月2日。

純粹かつ深い音楽への敬愛を抱いていたフジタ大使は、私のブラジル音楽に対する真摯な愛情を理解し、ブラジル・フェスティバルや大使館主催の諸行事に招いてくださった。そこでは、大使や音楽家仲間と共に演奏する機会を得て、大きな喜びを味わうことができた。また、韓国における外交団主催の年末慈善行事においては、大使と二重奏を披露するという光栄にも浴した。

さらに、2015年にソウルでの任期を終えられる際の送別会では、私たちのバンド *Tudo Bem* がフジタ大使のために最後の演奏を捧げた。芸術を愛し、広大かつ温かい心を備えたフジタ大使は、まさに卓越した人物であった。振り返れば、それらの瞬間は二度と戻らぬ、極めて貴重で満ち足りたものであったと痛感する。

彼は誰よりも思いやり深く、芸術と音楽を子どものように純粹に愛し、私のような音楽仲間を常に惜しみなく遇してくださった。

IX. ヴァウチーニョ・アナスタシオ (Valtinho Anastácio)、ブラジル人音楽家・パーカッショニスト。 2022 年 8 月 18 日。

我が敬愛する友人エジムンド・フジタは、韓国におけるブラジル大使としての在任中、私が出会った人物であり、その歩みの中で多大なる足跡を残した。彼は極めて特別な存在であり、その職務に対して並々ならぬ献身を示した人物であった。ソウルのブラジル大使館において、援助を必要とする者に常に惜しみなく手を差し伸べる姿勢を貫いていた。私は、彼の公邸において開催された数々の行事を鮮明に記憶している。それらは、ブラジル文化およびあらゆる分野の芸術、音楽、絵画、写真、さらにはブラジル料理を推進するための重要な機会であった。

彼は卓越したフルート奏者であると同時に、一流の画家でもあった。そして比類なき人間性を備え、広大な心を有していた。私にとって、彼はブラジル文化を広く世界に伝え、我が国を最良のかたちで紹介しようと尽力した最も献身的な大使の一人であった。

X. アデライデ・シンボロン (Adelaide Simbolon)、ジャカルタ音楽院ピアノ教授。2022 年 9 月 1 日。

フジタ大使は、エイトル・ヴィラ＝ロボスやエルネスト・ナザレーなどのブラジル人作曲家を紹介するためにジャカルタ音楽院 (JCoM) と協働したのみならず、私に光栄な機会を与えてくださった。それは、モロー・ゴットシャルク作曲『ブラジル国歌による大幻想曲 トリオンファル (*Grande Fantaisie triomphale sur l'hymne national brésilien*)』、Op. 69 を、2 年連続でブラジル国祭の日にベントラ・ブダヤ文化センターおよびウスマル・イスマイル劇場において演奏するというものであった。ブラジル国歌をアメリカ人作曲家による再解釈として紹介するという、この卓抜した発想は、フジタ大使以外には到底なし得なかったものである。

私にとって、エジムンド・フジタ大使は、インドネシアの音楽家と大使館との協働を通じて、ブラジルのクラシック音楽の演奏を促進し、その成果は聴衆から高く評価されたという点において、大きな成功を収められた人物である。温和な語り口をもちながらも、相互理解と無限の支援のもとに、その文化的使命の実現に向けて全力を尽くされた。ジャカルタ音楽院 (JCoM) は、学生たちの音楽的視野を大きく広げることとなったフジタ氏の多大なる貢献に対して、永遠に感謝の念を抱いている。

疑いなく、彼は唯一無二の存在であり、今後も深い敬愛と共に記憶され続けるであろう。

XI. レナ・スル (Lena Sull)、ソウル在住ブラジル人芸術家。2021 年 10 月 6 日。

フジタ大使は、真の指導者が備える自然な才覚をもってブラジル文化を愛し、またその振興に尽力した人物であった。

彼は常に韓国におけるブラジル人コミュニティに奉仕し、ブラジル人が参加する諸行事には欠かさず姿を見せた。その姿勢は、若き指導者たちに異文化の探求、新たな思想の涵養を促し、個人として、また職業人としての成長を力強く支援するものであった。学生たちは彼を心から敬愛していた。

また、彼は優れた画家でもあり、鮮やかな色彩を直観的に用いて作品を創造し、そこには懐旧と若々しさが巧みに表現されていた。彼は音楽においても人々と深く結びつき、愛用の楽器であるフルートやピアノを気軽に楽しげに演奏することで、その人柄の温かさと自由闊達さを示した。

さらに、彼の愛犬への情熱は広く知られており、愛犬シバ・サティの子犬たちの新たな家を探す活動を「犬の外交」と称して推進した。その結果、現在ではシバの家族がソウル、ウィーン、メキシコ、カンピーナス、サンパウロ、そしてブラジルに居を構えている。

私たちの気高く洗練された「武士」として、また常に信頼できる友人として、フジタ大使は多くの人々の人生と心に深く触れた存在であった。ソウルにおける在任期間中、寛大で心配りに満ちた人物を代表として迎えられたことに対し、ブラジル人コミュニティは限りない感謝を抱いている。

XII. ユ・ナ・キム (Yoo Na Kim)、ブラジル人ジャーナリスト。2022年9月9日。

敬慕と追憶——エジムンド・フジタ大使。私がフジタ大使と初めて出会ったのは 2008 年、韓国系ブラジル人企業家らと共に在韓ブラジル大使館を訪問した折であった。大使はきわめて温かく私たちを迎え入れ、大使館の扉を開放し、私たちを快く受け入れてくださった。その態度には、私たちに対する深い関心と誠意が明確に表れていた。

その後、大使夫妻との協働によって、学びの機会を得るとともに友情を深めることができた。なかでも記憶に残るのは、ブラジル産素材を用いた韓国系ブラジル人デザイナーによるファッションショーである。

さらに忘れがたいもう一つの事業は、ソウルの韓国国立現代歴史博物館において開催された「韓国人ブラジル移住 50 周年記念展」であった。この展示を通じ、私の家族やコミュニティも含まれる移住の歴史を韓国社会に伝えることができたことは、きわめて感慨深く、また大きな喜びであった。

フジタ大使は、卓越した知性と豊かな芸術的才能を併せ持つ極めて特別な人物であった。高位の立場にありながらも謙虚さを失わず、誰に対しても深い敬意と誠実な心配りをもって接した。そのため、多くの人々との友情を育み、幅広い敬慕を集める存在となった。

とりわけ私にとっては、彼は真の守護天使のような存在であった。大使からの貴重な励ましと支援がなければ、私はこれほど多くのことを成し遂げることではできなかったであろう。彼は私の人生、そして職業的歩みにおいて極めて重要な役割を果たした人物である。ゆえに、私は永遠に感謝の念を抱き続けるであろう。

XIII. レダ・キム (Leda Kim)、ピアノ教授、中央大学校 (韓国)。2022 年 10 月 2 日。

エジムンド・フジタ閣下は、私の人生において決して忘れることのできない、きわめて温かな人物であった。私は閣下と音楽を共有したのみならず、数多くの芸術的経験や文化的プロジェクト、そして私自身の芸術的発展および人間的成熟にとって重要な諸理念をも共にすることができた。

私は多くの心温まる瞬間を深い敬意をもって想起する。フジタ大使の邸宅は、祖国を離れ、ブラジルを懐かしみ、望郷の念に駆られていた私たちブラジル人に常に開かれていた。

閣下は寡黙であり、感情を強く表すことは少なかったが、私は常にその人間的温もり、祖国への深い愛情、そして周囲の人々を受け入れようとする心を感じ取っていた。また、ここ韓国においてブラジル文化を紹介・普及しようとする関心もきわめて大きなものであった。

フジタ大使の突然の逝去は大きな喪失であるが、彼の誠実さと温もりを知った人々の心のうちに、その記憶は永遠に生き続けるであろう。

XIV. リサ・カン (Lisa Kang)、ソウルブラジル大使館・大使秘書。2021 年 8 月 28 日。

私は、エジムンド・フジタ大使に関して非常に良い記憶を保持している。まず第一に、大使は卓越した知性と才能を有し、創造的な発想に満ちた人物であった。文章表現に優れ、絵画においても大変な感性とインスピレーションを示された。

大使は形式や儀礼に囚われることは少なく、「外交官でなければならない」といった制約にこだわらなかった。南大門市場で屋台の食事を楽しみ、明洞で提供される韓国伝統麺「カルグクス」の行列に並ぶことも厭わなかった。花や風景の写真撮影を好み、テレビで気に入った場所を見れば、翌週の旅行予約を即座に行うほど旅行を愛していた。

フジタ大使のおかげで、私は高位官僚、芸術家、学者など多様な層の人々との接点を大いに広げることができた。大使トリガヤ大使夫人は常に私をこれらの知人に紹介し、温かい言葉で励ましてくださった。その恩義と温かさには、今も深く感謝している。

さらに、フジタ大使はリコーダーの演奏も嗜まれ、韓国外務省主催の年末コンサートにも参加された。個展を開き、またグループ展にも参加して、大変な成功を収めた。

現在も私の執務室には、フジタ大使が韓国を去る際に贈ってくださった絵画が掛けられている。大使トリガヤ大使夫人は、私の大使館での経験に多大な肯定的影響を残してくださったことは間違いない。

XV.ロザネ・エル・ジャイク (Rosane El Jaick)、 OUVSE・外務省外務局監察部事務官。2021 年 7 月 13 日。

2013 年 4 月 12 日、私は駐韓ブラジル大使館文化部門に赴任するため、韓国に到着した。この日はちょうど北朝鮮がソウルに向けてミサイルを発射する日と重なっていた。

両国間の緊張は年々高まりを見せる中で、厳密には 1950 年以降、正式な平和条約が締結されていないため、両国は事実上戦争状態にある。

当時、私は新しい上司であるエジムンド・ススム・フジタ大使を存じ上げなかった。ただ、彼が非常に教養深く、リオ・ブランコ学院の同期で首席であったこと、また日系二世として初めてブラジルの外交官・大使となった人物であることは知っていた。

ブラジル出身で日系の大使が韓国に赴任する——歴史的背景を考えれば、それだけで一種の不安を抱かざるを得なかった。外国人にとって容易ではない国で、日系二世の上司はどのような人物なのだろうかと。

初めて上司と面談した際、私はその知性、教養、温かさ、礼儀、そして細やかな配慮に深く感銘を受けた。大使館では非常に丁寧に迎え入れていただき、その後の数年間で得た学びのすべてを、私は永遠に忘れることはない。

フジタ大使は、ブラジル文化への深い関心と豊富な知識を有していた。革新的な取り組みを支援し、常に先人移民が選んだこの国の多様で豊かな文化を広く発信することを目的としていた。また、大使夫人マリア・リガヤ・フジタもブラジル文化に精通されており、常に助力を惜しまず、多くのことを教えてくださった。

私は、フジタ大使の指揮のもと、ほぼ 2 年間にわたり勤務する機会に恵まれた。その間、大使は私に全面的な支援と励ましを与え、韓国の人々に我々が愛するブラジル——多様な文化と人種の融合によって形成された巨大な国家の本質——を伝えることができる環境を整えてくださった。

外務省で 20 年以上勤務してきた中で、私は断言できる。フジタ大使は、ブラジル史上最も卓越した大使の一人であり、私がこれまでに会った最良の上司の一人である。

彼は惜しまれることに早く私たちのもとを去ったが、まだ多くを教えてくださる余地があった。常に部下の声に耳を傾け、プロジェクトの実行を奨励し、革新的な取り組みを支援し、信頼と尊重をもって職務の裁量を委ねてくださった。私はその思い出を、深い敬愛と感謝の念とともに心に刻んでいる。

XVI.ダニエル・フィンク (Daniel Fink)、ICANN・ブラジル関係者部門ディレクター、2008-2014 年 駐韓ブラジル大使館科学技術担当技術顧問。2022 年 10 月 10 日。

回想

ソウル、午前 4 時 30 分、冬の寒い夜、チョンワデ路 73、鍾路区、4 階の蛍光灯が灯る室内。Skype のメッセージ通知が深夜の静寂を破る。その内容は以下の通りであった：

「ダニエル、何か進展は？」

「お疲れ様です、大使。はい、ブラジルの [……] と話し、[……] と教えてもらいました。明日、[……] との会議を設定できます。」

「ああ、よろしい。では大使館で 8 時に会おう。」

「8 時ですか、大使？まだ寝ていません！」

この一件は長年にわたり多くの笑いを生んだが、私の人生における最も幸いで、生産的かつ変革的な期間である、エジムンド・ススム・フジタ大使と共に働いた日々を象徴している。

旅に出る

フジタ大使が最初に求めた課題の一つは、「テクノロジー企業や研究機関を訪問しよう」というものであった。距離の遠近、季節、訪問の種類を問わず、生産工場や研究所への立ち入り、さらには教授たちとの一杯のコーヒーであっても、大使の返答は常に「はい！」であった。

私は数多くの工場訪問を思い出す。半導体製造のクリーンルームに入るために白い作業服を着用したこと、造船所ではヘルメットをかぶったこと、さまざまな分野の研究所や企画室を訪れたこと、そして最後には必ず企業の社長室でコーヒーを飲みながら有意義な会話を交わしたことなどである。

こうした視察のための移動手段も多様であった。大使の忠実な運転手であるキム氏による快適な車での移動から、韓国的高速鉄道 KTX の利用、あるいは国の最南端へ向かう短距離便に至るまで、大使は常に先頭に立つことを好んでいた。

韓国赴任の初期から、技術分野を精力的かつ熱心に探求するこの姿勢は、大使の職務運営において大きな特色となり、両国関係の改善の在り方を構想するうえで重要な基盤を築いたといえる。

さらに、大使は現場訪問によってしか得られない産業分野の深い知識を備えるだけでなく、各方面で友情を育み、人的ネットワークを拡大することにも非常に長けていた。それが、目の前に現れつつあった機会を十分に活かすうえで大いに寄与したのである。

2 プラス 2 モデル

ある日、大使執務室で行われた恒例の打ち合わせの席上、フジタ大使は私たちに一つの講義をしてくださった——「我々は 2 プラス 2 モデルを推進しなければならない」と。それは何か。すなわち、韓国側においては大学または研究機関と企業を一組とし、ブラジル側でも同様の組み合わせを形成するという二

国間協力の枠組みであった。この二組が連携関係を結び、特定の分野を共同で開拓するというものである。

フジタ大使は、このモデルこそが、単なる「1プラス1」——すなわち大学または企業が一つずつ連携して学術成果や市場開拓に取り組むという従来型の協力——を超えた、より望ましい相乗効果を発揮し、互惠的利益の新たな可能性を切り拓くものだと強調していた。

それは極めて単純で理解しやすく、かつ大いに示唆に富むモデルであった。企業人や研究者との会合の場でも短時間で説明可能であり、またいかなる応用分野にも柔軟に適合させることができたのである。そこに明確な目的、使命、そして中長期的に卓越した成果へと導く指針が確立されたのであり、実際にその通りの展開がなされた。

卓越した筆致と卓越した表現力を兼ね備えていたフジタ大使は、その構想を直ちに数多くの電報、学術論文、新聞のコラムや講演において記述した。やがて、ブラジルと韓国の指導層は次第にその構想を理解し、驚くべきことに戦略に全面的な賛同を示すに至ったのである。

高まる需要

ブラジルから韓国への代表団派遣の告知がない週は、ほとんど稀であった。何らかの理由で、同国は成長、競争力、応用技術に関心を寄せる多くのブラジルの諸機関にとって目的地となっていたのである。フジタ大使はこの動きを的確に把握し、その訪問対応に全力を注ぎ、あらゆる資源を投入した。

大使は、可能な限りすべての代表団を自ら執務室で迎え入れ、またしばしば公邸でのレセプションを催して来訪者との交流を深め、随行予定にも熱心に同席した。各方面における個人的な活動を通じて培われた知見と人的関係は、代表団に対して充実した、時には過密ともいえる日程を用意するうえで大いに役立った。

ここで得られたさらなる教訓はこうである——良好な人的ネットワークを築いたならば、それを実際に機能させなければならない。

良き思い出

リオ・グランデ・ド・スル州で電気工学を学んでいた頃から、私はブラジルが半導体産業を強化しようとする取り組みについて多く読んでいた。大使館に身を置いてからは、これらの努力を主導し、企業家と連携し、税制優遇を洗練させていく非常に有能で専門性の高い政策担当者たちと接触する機会を得た。

そうした折、あるブラジル人実業家が、コンピュータ用メモリ分野において韓国企業との合弁事業を計画しているとの知らせが舞い込んだ。しかも、その合弁事業はブラジルのある大学の科学技術パークに設置される予定であった。おや、これで方程式を「4」にするために必要な最後の一片が整いつつあるのではないか。

フジタ大使が提唱した「2プラス2」の構想は、どうやら企業家たちに極めて好意的に受け止められたらしく、やがて韓国企業が地元大学と長年にわたって築いてきた協力関係の経緯が我々にも伝わってきた。ほどなくしてこのモデルは実際に動き出し、双方の教員や研究者が相互に訪問、会合、交流を重ねる中で、ブラジル国内における半導体産業の構築が進められていったのである。

しかし最後の要素がまだ欠けており、我々は依然として朝鮮半島において比較的孤立した立場に置かれていた。

新たな希望

2011年半ば、ブラジル政府が、世界有数の大学に学部学生を派遣するため多数の奨学金を投じるとの知らせを受けた。フジタ大使は大いに熱意を示し、「韓国も学生派遣先として選ばれるだろうか。こちらの大学は非常に優秀だが、果たして学生たちは韓国を選ぶだろうか」と、執務打合せの席で繰り返し語っていた。

大使は常に、韓国の大学が国際的学術ランキングにおいて高い評価を得ていることや、先端技術の進展について、本国との通信に詳述していた。なかでも産業界と学界が緊密に連携し応用技術を発展させる点を特に重視し、ブラジルにおいてもより一層活用すべきであると考えていた。

また、韓国の大学が国際化を推進し、授業言語を韓国語から英語へと転換していく過程も、大使の報告にしばしば取り上げられた。この新方針の導入には学術共同体全体が大きな努力を払っており、教授や学生にとって決して容易ではなかったが、いわゆるアジア的な忍耐強さが功を奏し、徐々に英語による課程が拡充され、大学は国際化指数を誇らしげに公表するようになった。

やがて、ブラジル政府が10万人の学生を世界有数の大学へ派遣することを目的とした「国境なき科学」計画の派遣先リストに、ついに韓国が加わるとの知らせが届いた。この報せはフジタ大使に大きな喜びをもたらし、大使はブラジル政府の要請する全ての条件を満たすべく全力を注いだ。韓国側では、大使自ら最優秀の大学を選定し、同計画を提案した。大使にとってはすでに長年の関係を有する大学も多かった。

しかし、真の着想はその後に訪れた。国境なき科学計画の副次的目的の一つとして、休暇期間中に企業や研究機関でのインターンシップを提供することが掲げられていたのである。奨学金の期間が2、3学期に及ぶため、学生にとって極めて有益な追加経験となり得た。他方で、数十人、あるいは数百人規模の学生に、文化も言語も生活習慣も全く異なる韓国で受け入れ先を見つけることは、ほとんど不可能に近いと思われた。

大学は若者を受け入れる体制を備え、教授陣や教育環境を有しているが、企業は必ずしもそうではなく、ましてや均質性が高く独自の慣習に満ちた韓国社会では困難が予想された。

ここでフジタ大使が採用した戦略は、戦略的知性、外交的卓越性、公的使命感の模範と呼ぶべきものであった。全奨学生にインターンシップの機会を提供するという目標を掲げた大使は、数か月にわたり企業界の最上層の人脈を駆使し、謙虚にブラジル人学生のための機会を求めて奔走した。機会が無駄にされることは一度もなかった。大使は多文化的な交渉術に長け、韓国における「社長や会長の決定は絶対」という文化を巧みに活かしたのである。

ある時、ブラジル副大統領の韓国訪問に際し、大手自動車メーカーの会長との会談が行われた。その席で大使は学生のインターンシップ支援を要請し、結果として輝かしい機会が保証され、さらには同交換計画への多額の寄付までもが得られた。

ここで特筆すべきは、当時ソウルに駐在していたブラジル人経営者たちの支援である。ゼネラル・モーターズのセルジオ・ホシャ（Sérgio Rocha）氏、メルクのユルゲン・ケーニッヒ（Juergen Koenig）氏、韓国パスツール研究所のルシオ・フレイタス＝ジュニオール（Lucio Freitas-Junior）氏らが、大使の呼びかけに即応し、貴重なインターンシップの場を提供してくれた。

さらに、「偉大な人物の傍らには常に偉大な女性がいる」という言葉を証明するように、マリア・リガヤ・フジタ大使夫人の存在なくして、若き科学者たちがこれほど温かく迎え入れられることはなかったであろう。大使夫人は常に計画や実行の場に同席し、私自身が直接赴けない場面でインターンシップの機会を獲得するために尽力した。

私にとって最も大きな喜びは、大使夫妻から新たな受け入れ先確保の知らせを受け、その後、企業担当者と共にそれを実現することであった。大使の緻密で見事な働きの後では、すべてが驚くほど容易で自然に進んだ。

おそらく、ブラジル人奨学生にこれほど多くの機会を提供できた国は多くはなかっただろう。しかし、それ自体は重要ではない。重要なのは、私は、数多くの若者の人生を変え、かけがえのない経験を与えるために尽力し、山を動かし海を分けるがごとき努力を惜しまなかった、輝かしいブラジル外交官の姿を目の当たりにしたということである。多くの人々の心と思考の中に、フジタ大使の一部が今も息づいている。それこそが、すべてを価値あるものにした所以である。

心からの感謝を込めて。ありがとう、親愛なる藤田大使。